March 2026 No.26

AC×2

[エー・シー・ドゥー]

Aomori Contemporary Art Centre

青森公立大学 国際芸術センター青森
レポート 2024–2025



国際芸術センター青森（ACAC）は、八甲田山麓に広がるダイナミックな自然と建築家・安藤忠雄による建築群が生み出す環境を活かして、多彩な現代芸術のプログラムを実施するアートセンターです。
2001年、青森市市制100周年を記念して開館し、2009年から青森公立大学により国際性、地域特性のある芸術文化の創造・発信拠点として事業展開しています。

豊かな自然環境の中で、国内外のアーティストが滞在制作を行う「アーティスト・イン・レジデンス（AIR）」を主要事業とし、「展覧会・公演・アートプロジェクト」、「教育普及・交流事業」の3つを事業の柱とし、活動を展開しています。表現者の創造活動を支援し、優れた芸術を広く発信するとともに、その活動を通じてつながりを生み出し、国際的なネットワークの構築を図ります。さらに、市民や学生がアーティストと出会い、学び、交流する機会を提供することで、アートセンターとしての役割を果たしています。

建物は、周囲の自然や起伏に富んだ地形を損なわないよう配慮し、「見えない建築」をテーマに森に溶け込むように配置されています。自然の地形に寄り添ったその設計は、環境との調和を大切にしています。春から秋にかけては、森の散策や野外彫刻の鑑賞も楽しむことができ、自然と芸術が共に息づく、開かれた芸術の拠点となっています。

主なプログラム

■ アーティスト・イン・レジデンス（AIR）
国内外のアーティスト、キュレーター、リサーチャーなど、芸術表現に関わる多様な人々が滞在し、創作や研究活動を行います。
学芸員の企画によってアーティスト等を招く指名型、公募により参加者が選出される公募型に加え、自主滞在枠も設け、多様な形で受け入れています。滞在中は制作やリサーチに加え、市民や学生との交流、展覧会などを行い、芸術体験を通じた人材育成と文化振興を目指しています。

■ 展覧会・公演・アートプロジェクト
アーティスト・イン・レジデンスプログラムの成果発表に加え、滞在制作環境を活かした展覧会や公演、地域社会と協働するアートプロジェクトも実施しています。アーティストによる実験的な試みや、地域に新たな視点をもたらす表現など、「今この場所」でしか生まれない活動を紹介しています。

■ 教育普及・交流事業
アーティストや専門家を講師に迎えたワークショップや教育機関向けの創作体験、学芸員による鑑賞プログラムなど、多彩な学びと体験の機会を提供しています。
また、市民や学生、芸術に関わる多様な人々との交流や、自然環境を活かしたプログラムも展開し、校外学習の受け入れや出張授業にも、条件やご要望に応じて柔軟に対応しています。

■ 出版事業
アーティスト・イン・レジデンスプログラムや展覧会など、各種プログラムの記録集と、定期刊行誌「AC²」（エー・シー・ドゥー）を発行し、ACACの事業報告や芸術に関する情報を発信しています。

青森公立大学 国際芸術センター青森　事業協力金（寄附金）のお願い

国際芸術センター青森では、アーティスト・イン・レジデンスプログラム（アーティスト等の滞在制作・展覧会等）や教育プログラム（市民の方々の芸術・創作体験等）を中心に、芸術体験の場を提供する様々な事業を行っております。
事業実施にあたり、皆様からのご支援を賜りたく、事業協力金（寄附金）についてのご協力をお願いしております。
詳しくは、公式Webサイトをご覧ください。

「AC²」（エー・シー・ドゥー）バックナンバーのご案内

本誌の過去号は、一部オンラインにて公開しております。
在庫のある号につきましてはお渡しすることも可能です。
お気軽にお問合せください。

表紙（表）
展覧会「currents / undercurrents—いま、めくるめく流れは出会って」（2024年）
Photo: 百頭たけし

表紙（裏）
アーティスト・イン・レジデンス プログラム2025「CAMP」指名型AIR（災害ユートピア）| ACACベースキャンプ（2025年）
Photo: 岩根愛

今日のACAC 2024年12月16日

Photo: 高野ユリカ



井上尚子「Life is smell ～素数の森～」

Photo: 木下雄二

共催：弘前大学教育学部出佳奈子研究室、青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］
プログラム会期：2023年8月—2024年3月
展覧会会期：2024年2月10日—3月3日





展覧会「Life is smell ～素数の森～」

展覧会「currents / undercurrents—いま、めくるめく流れは出会って」

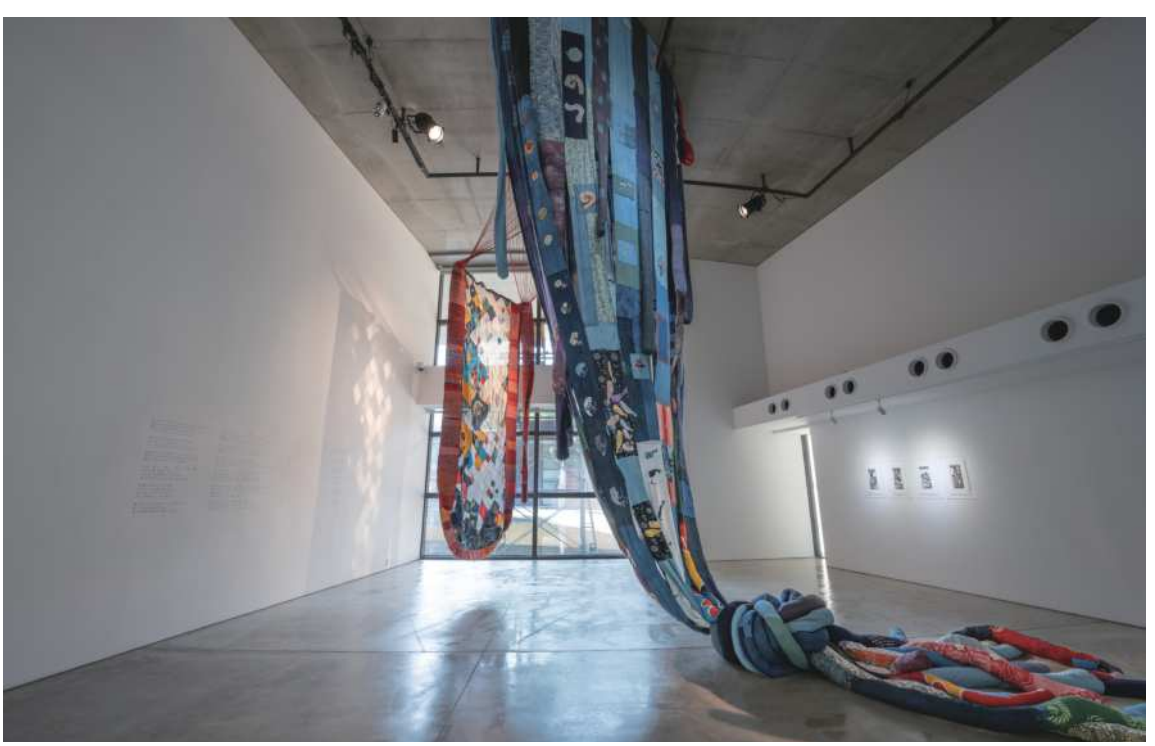
Photo: 百頭たけし

プログラム会期: 2023年3月—2024年9月
展覧会会期: 2024年4月13日—6月30日（前期）、7月13日ー9月29日（後期）

【前期】



青野文昭《戦う英雄たち - SACRIFICE 2024》2024年



前: 是恒さくら《双子鯨の夢を見たら》2024年
後右: ロビン・ホワイト《アラ・ムワクリ（確かな道）》2023年
後左: 光岡幸一《あ゚さ゚ぷや゚ま゚あ゚さ゚ぷや゚ま゚》（部分）2024年

展覧会「currents / undercurrents—いま、めくるめく流れは出会って」

Photo: 百頭たけし

【後期】



ロビン・ホワイト　中:《ふたりの宇宙》(竹林嘉子とのコラボレーション)2024年　左:《あおもり探索》2024年



ジュマナ・エミル・アブード作品

AOMORI GOKAN アートフェス2024 つらなりのはらっぱ

プログラム会期: 2024年4月13日—9月1日

Photo: 小山田邦哉



栗林隆≪元気炉≫ACAC展示の様子



辰田翔と青森うぐいす姉妹によるパフォーマンスの様子

アーティスト・イン・レジデンス プログラム2024「SPINNING SCAPES」

Photo: 高野ユリカ

プログラム会期：2024年10月2日—12月24日
展覧会会期：2024年11月30日—12月22日（一部11月14日から）





マギー・チュウ《私が作った巣の中にあなたは家を作りますか?》2024年

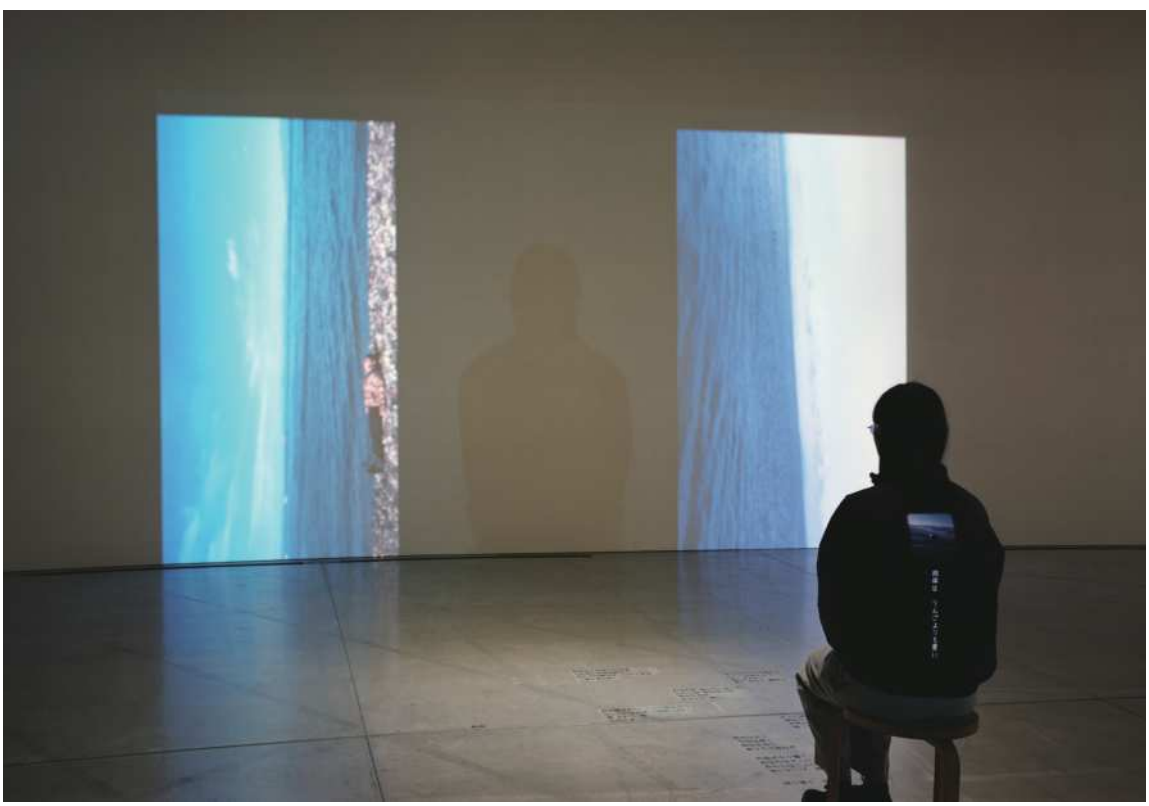




浅野友理子《ひそやかな交易》2024年



ベアトリス・ディディエ《AMOR AOMORI》2024年



八幡亜樹《記憶の海流》2024年

教育普及





創作体験

見えない建築ツアー

Photo: 八戸市美術館





八戸市美術館建築ガイド(アートファーマー)との交流会@ACAC

《ACACの写真部》



ポートフォリオZINE披露会



さまざまな写真集にふれる

CONTENTS

March 2026 No.26
Report 2024–2025

AC2 [エー・シー・ドゥー]
Aomori Contemporary Art Centre

2024

003 | **カラーグラフ**

012 | **井上尚子「Life is smell ～素数の森～」**
013 ***Essay*** においと記憶から、ここに息づく生を考える――井上尚子の実践から | 慶野結香（キュレーター）
017 「Life is smell ～素数の森～」ができるまで
021 プログラム概要

022 | **展覧会「currents / undercurrents ーいま、めくるめく流れは出会って」**
023 ***Review*** 歩くごと　風が吹きつけるごとに“ 今だ ”と“ 今だ　今だ ”と言いたくなるー
| 佐藤熊弥（建築家／キュレーター）
030 ***Review*** 複数の時間、多元化する生命「currents / undercurrents ーいま、めくるめく流れは出会って」をめぐって
| 石倉敏明（人類学者／秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻 准教授）
036 プログラム概要

038 | **アーティスト・イン・レジデンス プログラム 2024「SPINNING SCAPES」**
039 ***Review*** 目まぐるしき世界に根を張る | 高橋麻衣（八戸市美術館 学芸員）
044 プログラム概要

045 | **表現のコモンズ / 《ACACの写真部》/ 見えない建築ツアー / 教育普及**

2025

051 | **カラーグラフ**

065 | **特集―修復とケア** | 大黒優香（国際芸術センター青森 アートコーディネーター）

069 | **アーティスト・イン・レジデンス プログラム 2025「CAMP」**
070 ***Review*** 境を越えてから、そして島になる | 戴周杰（八戸工業大学感性デザイン学部 助教）
076 指名型 AIR（災害ユートピア）ACAC ベースキャンプ | 参加者レポート
081 指名型 AIR（災害ユートピア）テント映画祭 | 学生スタッフに聞いてみた!
084 プログラム概要
085 公募型+海外連携 AIR　写真で滞在を振り返る
098 プログラム概要

099 | **技術員が作ったもの**

103 | **《ACAC の写真部》**
104 《ACAC の写真部》タイムライン
108 ***Interview*** 《ACAC の写真部》メンバーに聞いてみた!
110 ***Essay*** 作品をつくる私とあなたに | 松本美枝子（写真家／美術家）

111 | **教育普及　身体を使った子ども向けワークショップの開発**
112 ***Essay*** 身体を使った子ども向けワークショップを考える | 瀬藤朋（国際芸術センター青森 学芸員）
113 活動タイムライン
114 ***Essay*** 誰かに渡せるかたちの遊び | 和田ながら（演出家）
116 ***Essay*** あいていること | 石川朝日（俳優）
118 身体を使った子ども向けワークショップの開発に向けて――図工部会での実践
119 ***Interview*** ご協力いただいた方々に聞いてみた!
124 教育普及　プログラムレポート

127 | **表現のコモンズ**

130 | **1年を振り返って**



井上尚子「Life is smell ～素数の森～」

Photo: 木下雄二

Essay

においと記憶から、ここに息づく生を考える——井上尚子の実践から

慶野結香
キュレーター、国際芸術センター青森 主任学芸員（2025年12月まで）

2021年度から2024年度まで、国際芸術センター青森（ACAC）は、科学研究費助成事業「美術作品と『嗅覚』―イメージ受容における香りの作用をめぐって」（研究代表者：出佳奈子）の研究分担者として、現代アートにおける香りの効果と嗅覚のはたらきに関する調査・研究を行った。その一環として2023年度には、〝匂いと記憶のアーティスト〟として活動する井上尚子を招へいし、青森・弘前エリアに生きる人々の記憶と地域文化の関係に焦点を当てたリサーチ（2023年8月）、ワークショップ（2023年10～11月、2種・計3回）、成果展覧会（2024年2～3月）を実施した。これらは、現代アートにおいて「香り」を扱う可能性と、嗅覚を通した作品体験のあり方を考えるうえで重要な契機となった。

共同研究の概要

本研究は、弘前大学教育学部准教授・出佳奈子（西洋美術史／美術教育）、成蹊大学理工学部准教授・竹囲年延（フィールドロボティクス／触力覚技術）、ACACによる共同研究である。研究の出発点には、美術作品の受容における「嗅覚」の役割が、ヨーロッパを中心に感覚史研究やオルファクトリー・アートの実践において一定の蓄積がある一方で、日本の美術史研究、現代美術の実践、美術館での体験といういずれの観点からも、これまで十分に注目されてこなかったという問題意識がある。

一方、人工知能分野では嗅覚センサーや嗅覚システムの開発が進み、アニメーションやゲームなどへの応用も試みられている。嗅覚は記憶や感情に強く作用する感覚であり、視覚中心とされてきたイメージ受容に変化をもたらしうるのではないか。こうした状況を踏まえ、本研究では、美術作品の受容において香りがもたらす効果を検討するとともに、現代アートへの応用可能性、さらに美術館・展示施設への導入効果を明らかにすることを目的とした。

本研究は主に次の3方向から進められた。第一に、出を中心とする美術史的研究である。匂いと嗅覚が芸術作品と無縁とされがちだった近代以前の宗教美術における香りの位相を探り、芳香が聖像に内在する聖性を示唆すると同時に、信者（観者）と聖なる存在をつなぐ役割を担っていたことを明らかにした。

第二に、出と竹囲による共同研究として、脳波計測を通じ、匂いを伴う視覚的イメージの受容を考察した。匂いは脳に強い刺激を与える傾向がある一方、慣れ親しんだ匂いではリラックス効果が生じることが示唆された。

第三に、ACACと出による共同研究として、匂いと記憶の結びつきを地域住民および学生と現代アートへ応用する実践研究を行った。

現代アートにおける「嗅覚」の現在

ACACが研究分担者として参加した本研究も、「美術作品の受容における『嗅覚』のはたらきは、美術史研究においても、現代の美術作品においても、また美術館における作品体験の面でもこれまでほぼ看過されてきた[*1]」という問題意識から出発した。

筆者の視点で整理するなら、近代美術の制度は「視覚」を感覚ヒエラルキーの上位に置き、作品は理性的に見る対象として、鑑賞者は距離を保って観察する存在として想定されてきた。他方、「におい」は時間とともに変化し、個人の記憶や文化的背景によって意味が大きく揺れる。保存・再現・共有が難しい嗅覚は、作品の

同一性や価値判断の基盤を前提とする美術館制度と相容れず、周縁化されてきたと言える。



エルモ・フェアメイズ《Residual Landscape》2019年　Photo: 山本糾

しかし20世紀以降、インスタレーションやパフォーマンスなど、概念や行為、時空間を含む表現が広がることで、受容は単に「見ること」から「その場に身を置く体験」へと開かれていった。ACACでも、滞在制作を通じたリサーチと新作プロダクションを重視し、「場／サイト」を意識化したプロジェクトが多い。近年の実践を振り返っても、「香り」自体を主題とせずとも、作品体験において嗅覚が重要な役割を果たす事例は少なくない。

例えば、ヒバのおがくずを展示室全体に展開したエルモ・フェアメイズの《Residual Landscape》（2019年）は、日本における自然崇拝の精神性と木材生産の工業的プロセスをめぐる考察を主題としつつ、鑑賞者が歩行を通じて触覚と嗅覚を含む身体的経験を得ることで、森と人間の関係を再考させた。また、南イタリアでの滞在制作をもとにした三原聡一郎の《本日の空気》（2022年）は、土地の植物や収穫物を挽き、香炉で焚いて生まれた香りを伴う空気を共有するパフォーマンスである。コロナ禍の経験を背景に、不可視の空気や有機物との関係を身体的に探ろうとする試みとして位置づけられる。

再現できない一回性の経験が価値を持つようになった現代アートにおいて、美術は次第に身体・環境・生の条件を扱うようになった。環境問題、ケア、ジェンダー、地域性といった主題には、視覚的表象だけでは捉えきれない現実が含まれる。それらは作品化される以前から、空気、温度、湿度、匂いといった環境として身体に作用し、日常や感情、記憶と深く関わっている。嗅覚は、こうした現実を「見せる」のではなく「感じさせる」感覚であり、不可視のものを可視化ではなく「可感化」しうるのではないか。こうした問題意識から、井上尚子を招へいすることとなった。

井上尚子：匂いと記憶とアート

「匂いと記憶のアーティスト」として活動する井上尚子は、匂いを用いた空間演出やワークショップという形式を取りながらも、その核心を「匂いを共有すること」自体に置かない。むしろ、共有できないとされてきた嗅覚体験を、言語化と対話を通じて関係性のなかにひらくことに一貫して取り組んできた。2007年頃から井上はワークショップに深く関わり、匂いによって喚起された記憶や感情を時間をかけて語り合う場を設計してきた。そこでは、作品はあらかじめ完成された形を持たず、参加者それぞれの個人的な記憶や感情が丁寧に掘り起こされると同時に、それらが交差し響き合うプロセス全体が、共有されうる「集合的な記憶」として立ち上がっていく。

なかでも「くんくんウォーク®」は、美術館や公園、都市空間、小学校、大学、企業など国内外の多様な環境で実施されてきた。匂いは特別な素材として提示されるのではなく、日常環境のなかにすでに存在するものとして扱われ、参加者は歩きながら匂いを探し、感じ、言葉にし、他者と分かち合う。同じ場所にいても、感じ取られる匂いとそこから想起される記憶が



三原聡一郎《本日の空気》2022 / 2023年　Photo: 後藤圭孝

文化的背景や経験によって大きく異なることが明らかになり、記憶は他者との交差のなかで揺さぶられ、更新され、編み直されていく。

また2012年以降、井上は環境研究者、生物学者、嗅覚研究者、ろう者や視覚障がい者など多様な専門家・当事者と協働し、嗅覚を介したコミュニケーションの可能性を拡張している。

青森でのリサーチとワークショップ

青森において井上は、地域文化、とりわけ「衣食住」に着目して調査を行った。「衣」では津軽こぎん刺しや、あおもり藍の染色過程、「食」ではりんごや津軽味噌、「住」では青森ヒバなどに焦点を当てた。取材を通して浮かび上がったのは、こぎん刺しに見られる布目の数の3、5、7、に、味噌の熟成3年、大豆と麹の3：7、ヒバが成木になるまで5年の歳月の「素数の感覚」が、生活文化の内部に織り込まれているという事実である。

これらを手がかりに、弘前・青森で2種類（計3回）のワークショップを実施した。ひとつは「Life is smell ～素数の森～」であり、匂いの経験から人生を振り返り、語り合うことを通じて、地域の特性、文化や歴史と匂いの経験を重ね合わせ、地域の匂いを未来へつなぐ回路を考える試みである。もうひとつは、ACACの森で開催した「森のくんくんウォーク」である。

「Life is smell ～素数の森～」では、年齢や性別、出身地、弘前・青森にいる理由もさまざまな参加者が、「自分が今まで生きてきた中で、気になるにおい、好きなにおい、苦手なにおいなど、どんなにおいのものでも構いませんので、においに関連するものをご持参ください」という持参課題に応じ、思い出の本、香水、ドライフラワー、布製品などを持参した。イントロダクションの後、参加者は4～5人のグループで互いの匂いについて語り、「1歳、3歳、5歳…」といった奇数から着想された「素数」の年齢における匂いの記憶（未到達年齢の場合は未来の匂いを想像）をワークシートに記し、共有した。語られたストーリーには人生の転機や葛藤、家族や恋愛の記憶、当時の通信手段や世相などが折り重なり、私的な経験が歴史や社会と接続される瞬間が生まれていた。参加者が自らの経験を引き合いに、他者の経験を受け取るという相互の信頼に支えられ、場が成立していた点が印象的であった。

一方「森のくんくんウォーク」では、参加者は二班に分かれてACAC周囲の森を散策し、木や地面、野外彫刻、建築など多様な対象に鼻を近づけて匂いを嗅いだ。空のペットボトルの蓋に小さな穴を開け、内部の香気が出る用に細工し、葉や水など匂いの源となるものを入れて「くんくんボトル」を制作し、完成後は互いに交換しながら匂いの正体を推測し、対話を楽しんだ。

成果展覧会

展覧会では、①井上がワークショップ冒頭で紹介した青森・弘前の「衣食住」に関わる香り（藍のパウダー、津軽味噌、青森ヒバ油）を小瓶に入れ、実際に嗅げるように提示し、②「Life is smell ～素数の森～」参加者が持参した匂いに関連する物品をエピソードとともに「匂いのハイライト」として配置した。さらに③参加者が素数年齢の匂いの記憶を記したワークシートを閲覧できるスペース、④集まった記憶の数に応じて素数から形作られた多角錐形の紙オブジェ（年齢を重ねるにつれ円錐形に近づく）が天井からモビールのように吊るされて構成さ

れた。

来場者は、ガラス瓶を開けるという能動的な動作を伴いながら匂いを体験し、他者の人生の背景に思いを巡らせると同時に、自身の匂いの記憶へと意識を向ける。ここでは、単一の物語が提示されるというより、断片的で多様な記憶が並置され、鑑賞者が時間をかけて空間に身を置くことが求められる体験が成立していた。

展覧会の重要なモチーフとなった奇数や素数の感覚は、素数の性質（自分自身でしか割ることのできない数）と重ね合わされ、嗅覚がもつ唯一無二の個人性と響き合っていた。匂いは誰かと完全に感覚で共有できないが、それでも人生を形づくる要素として確かに存在する。来場者は、記憶が固定された過去ではなく、現在の身体と環境の関係のなかで更新され続けるものであることを、体感として受け取ったのではないだろうか。井上尚子の青森での実践とその成果としての本展は、地域文化を固定的に表象するのではなく、青森に生きる一人ひとりの記憶と感覚が交わり、変化し続ける場をつくることで、「ここに息づく生」を現在進行形のものとして立ち上げたのである。

アーティストとの協働を通して本研究が示したのは、香りや匂いが現代アートにおいて、単なる感覚的効果や素材にとどまらず、身体・記憶・関係性を結び直す媒介となりうるという可能性である。保存や再現が困難で、共有できないとされてきた嗅覚は、その不確かさゆえに、いま・ここで立ち上がる経験の価値を浮かび上がらせる。匂いを通して生まれる語りや距離は、現代アートが引き受けてきた一回性や身体性、そして地域に根ざした生の条件を可感化する。匂いと記憶を手がかりに、私たちは世界との関係を改めて問い直し続けることができるのだ。

※本研究はJSPS科研費 JP21K18328の助成を受けたものです。

*1 科研費データベース：研究課題「美術作品と『嗅覚』―イメージ受容における香りの作用をめぐって」における「研究開始時の研究の概要」より
https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-21K18328

慶野結香（キュレーター）

1989年東京都生まれ、東京大学大学院学際情報学府修士課程修了。秋田公立美術大学、サモア国立博物館（Museum of Samoa）を経て、2019年4月から2025年12月までACAC学芸員、主任学芸員。キュレーションの方法論として、滞在制作およびAIR（アーティスト・イン・レジデンス）に関心を持つ。アジア・パシフィック地域における、布をはじめとした文化のリサーチを行いながら、アーティストと協働し近現代史を再考する企画を多く手がける。

「Life is smell ～素数の森～」ができるまで

事前リサーチ（2023年8月21日–23日／青森・弘前）

2023年8月21日（月）から23日（水）にかけて、井上尚子は、青森および弘前地域に滞在し、同年11月に実施するワークショップと、2024年2月に国際芸術センター青森（ACAC）で開催する展覧会に向けた事前リサーチを行った。
本リサーチでは、嗅覚を起点として、衣食（住）を中心とした地域文化や生活の層をたどり、青森・弘前に暮らす人々への聞き取りを通じて、日常に根差した匂いの記憶や体験を収集した。土地の風土や暮らしと密接に結びついた嗅覚の経験は、その後のワークショップおよび作品制作の基盤となった。






主なリサーチ先（訪問順）

- あおもり北のまほろば歴史館
- 青函連絡船メモリアルシップ 八甲田丸
- 青森県立美術館
- 青森市森林博物館
- 道の駅なみおか あおもり藍工房
- 佐藤陽子こぎん展示館
- 弘前こぎん研究所
- 弘前市りんご公園
- 白神山地ビジターセンター
- 加藤味噌醤油醸造元

ワークショップ

「森のくんくんウォーク」（2023年11月5日）

2023年11月5日（日）、ACAC周辺の森を舞台に、井上尚子によるワークショップ「森のくんくんウォーク」が開催された。参加者はA・Bの2グループに分かれ、ACAC周囲の森を散策しながら、気になった草花や土などを採取し、ペットボトルに集めてオリジナルの「くんくんボトル」を制作した。素材を加えるたびに変化する匂いを体験しながら、完成したボトルを参加者同士で交換し、そこから喚起される記憶や感想を共有した。井上はこれらのボトルを「匂いのポートレート」と位置づけ、嗅覚を通じた他者理解の可能性を提示した。






ワークショップ

「Life is smell ～素数の森～」（2023年11月3日・4日）

参加者数：（両日合わせて）20名

2023年11月3日（金・祝）に弘前れんが倉庫美術館 スタジオB、11月4日（土）にACACにて開催。井上は「素数」という概念に着目し、参加者が人生の特定の年齢に結びついた匂いの記憶を語り合う場を設計した。素数のもつ唯一性を、青森の人々の個性や人生の在り方と重ね合わせながら、嗅覚を通して自己や他者の人生を振り返る試みが行われた。

ワークショップ参加者

青山富士子、大久保彩音、勝川健三、加藤裕人、加藤諭絵、加藤なつめ、加藤晴馬、河原瑤子、
塚本悦雄、三浦亜希、山舘珠子、小田切峰、工藤正義、白戸はるみ、出佳奈子、赤石晴美、
引敷林さやか、若松広也、武田彩莉、木下雄二










展覧会

井上尚子展覧会「Life is smell ～素数の森～」(2024年2月10日–3月3日)

2024年2月10日から3月3日まで、ACAC にて、井上尚子による個展「Life is smell ～素数の森～」が開催された。2023年11月に実施されたワークショップに参加した20名の人生における「匂いのハイライト」が、ガラス瓶とエピソードカードとして構成され、来場者が実際に匂いを体験しながら鑑賞できる形式で提示された。



イントロダクション(藍のパウダー、津軽味噌、青森ヒバ油)



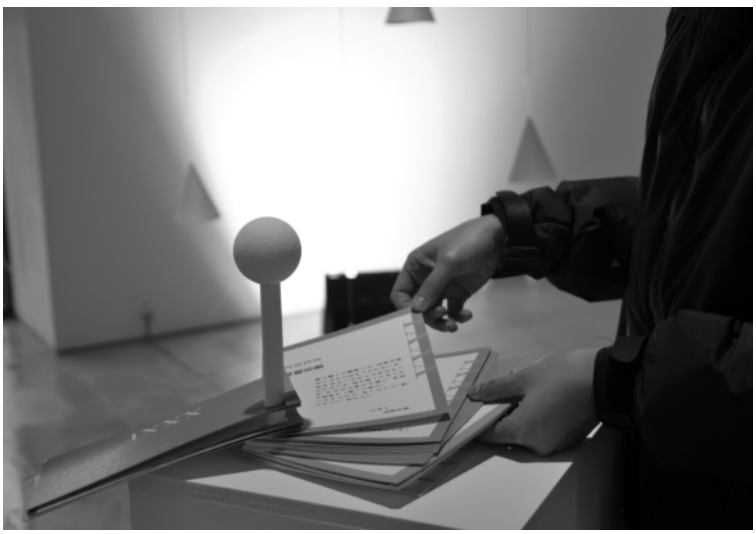
「匂いのハイライト」(部分)

展覧会

井上尚子展覧会「Life is smell ～素数の森～」(2024年2月10日–3月3日)

井上尚子(美術作家)

環境、文化、歴史を匂いの記憶から楽しむ「くんくんウォーク®」を教育機関、美術館、図書館、植物園、企業、公園、空港など国内外で開催。2022年以降、広島市現代美術館、神奈川県立近代美術館葉山、渋谷公園通りギャラリー、横須賀美術館、森美術館、千葉市美術館等で開催。2026年「氣味考古学」@鹿港(台湾)。2025年「記憶の標本室」つくりかけラボ17@千葉市美術館。2017年Museum Villa Stuck in Munich にて「The Library of Smell」(共同制作:白須未香+柴山拓郎)展覧会+ワークショップ開催。WWFジャパンと全国の動物園にて「においでめぐる動物園」開発・実施(2019年グッドデザイン賞受賞)。2018年、The Art and Olfaction Awards 2018 finalist in London、六本木アートナイト2018参加。2020年よりオンラインプログラム「においの話」実施。https://kunkunwalk.jimdoweb.com



素数年齢でのにおいの記憶



素数の紙のオブジェ(部分)





Photo: 木下雄二(pp.019–020)

井上尚子「Life is smell ～素数の森～」

アーティスト	井上尚子
プログラム期間	2023年8月ー2024年3月
展覧会会期	2024年2月10日（土）ー3月3日（日）
会場	青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］ 展示棟 ギャラリーB
共催	弘前大学教育学部出佳奈子研究室、青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］
協力	あおもり藍工房（道の駅なみおか内）、青森市森林博物館、加藤味噌醤油醸造元、あおもり北のまほろば歴史館、AIRS（アーティスト・イン・レジデンス・サポーターズ）、雨森浩子、東京藝術大学 ※本企画はJSPS科研費21K18328の助成を受けています
企画	慶野結香
来場者数	348名

関連イベント

■ 井上尚子 ワークショップ「Life is smell ～素数の森」

日時	2023年11月3日（金）・4日（土）13:00ー16:30
会場	11月3日（金）　弘前れんが倉庫美術館 スタジオB
	11月4日（土）　ACAC 創作棟 講義室
参加者数	11月3日（金）12名、4日（土）8名

■ 井上尚子 ワークショップ「森のくんくんウォーク」

日時｜11月5日（日）10:30ー12:00

会場｜ACAC屋外

メディア掲載

■ 新聞記事

2月26日（月）｜東奥日報　ACACで井上尚子さん展覧会開催　｜5面

■ 雑誌・広告

1月31日（水）｜「あおもりのき」第16号　イベントスケジュール　｜P43

2月　1日（木）｜「広報あおもり」No.452　ACACからのお知らせ｜P16

■Web媒体

TOKYO ART BEAT

https://www.tokyoartbeat.com/events/-/Hisako-Inoue-Life-is-Smell-The-Forest-of-Prime-Numbers/ABF44D5B/2024-02-10

■TV・ラジオ

2月11日（日）RAB青森放送「らじ丸にっち！」（出演：井上尚子）

展覧会「currents / undercurrents—いま、めくるめく流れは出会って」



上：光岡幸一《あるかもしれないあるかもしれない》2024年（部分）
右前：工藤省治《呉須魚文象嵌壺》ほか3点、平成時代 同　原画16点、梅山窯《菊文徳利》、《菊文猪口》
左前：中嶋幸治《パルス》2023-24年（部分）
後：青野文昭《戦う英雄たち - SACRIFICE 2024》2024年

佐藤熊弥
建築家／キュレーター

Review

歩くごと　風が吹きつけるごとに
“今だ”と“今だ　今だ”と言いたくなる—

映画『ベルリン・天使の詩』で、天使は時間の中にいる人間を羨ましがる。「いま」は、ある瞬間を指しているようで、動きや流れがあるからこそ感じることのようだ。展示を作る自分の仕事が、絵や人の足といった物事を止めようとすることなのか、動かそうとすることなのか、よくわからなくなることがある。「currents / undercurrents—いま、めくるめく流れは出会って」は色々な物事が降り積もる青森ならではの複雑な展示だが、そのような自分の問題意識と重なって、自然と鑑賞に入ることができた。

本展は前後期に分かれており、筆者は前期だけを見てこのレビューを書いている。そのことに加え、仕事柄、展示を見ても作品より作品同士の問ばかり見てしまうことからも、自分が展評を書くに相応しくないようにも思える。しかし本展に関しては、それらが問題ないように感じて、この展評を快く引き受けた。本展は単なるグループ展というよりも、国際芸術センター青森（ＡＣＡＣ）というアーティスト・イン・レジデンス（ＡＩＲ）施設がいま、どのような問題意識を示せるかという、別の場所に巡回できない一つの表現に私には感じられたのだ。

展示は参加作家の滞在制作を経て前期展開始から3ヶ月後に展示替えが行われ、後期展はおそらくより落ち着いた様子になったことが想像される。しかし私が見た前期展のいくらかまとまりを欠いた状況が、むしろこの展示の、ひいてはＡＩＲというプログラムの試みをよく表しているようにも感じた。

ＡＣＡＣの展示室は20～30ｍＲでゆったりと、しかしはっきりとカーブする、8.8ｍ幅のスペース。展示室に入った瞬間には一番奥の壁は見えず、奥に手繰り寄せられるような、緩やかな全体性を持った展示室だ。ホワイトキューブ然とした安定したプロポーションを保ちながらも、ＡＩＲならではの動きや流れを引き出す展示室。天井高もあり、柱のないワンルームとしては巨大な空間だ。作家とすれば、大作を作ってみたくもなると推測するが、キュレーションと会場構成によって細かな動きが表現された本展を見て、この展示室はこんな展示を待っていたのかもしれないと思った。

会場構成者の山川陸はツアーパフォーマンスなどを行うアーティストであるが、同時に多くの会場構成を手掛ける建築士でもある。油画を学んでから設計の仕事に進んだ自分とはちょうど反対のような位置におり、確かな設計能力とアーティスト的な思考の柔らかさを兼ね備えた彼を、設計者としてもアーティストとして





〈上〉澤田教一　三沢基地・小川原湖ワイドラックス・パノラマ写真５点、1950年代 / 三沢沿岸写真２点、1950年代
〈下〉右前：ロビン・ホワイト《SAINIMELE GOES FISHING》1995年（一部）、左後：ジュマナ・エミル・アブード《‘Ein al-Joz Bride {the walnut bride}》2016年ほか、ドローイング12点

も注目している。

本展での彼はキュレーターの壁打ち相手のような存在だったと聞いた。確かに私が見た前期の展示では、多くの作家が参加している割にいわゆる会場構成的な大きな操作は行われておらず、背の低い三角平面の仮設壁（2,250㎜H）で所々区切られつつも全体が緩やかに繋げられていた。仮設壁は展示室に対して背が低く、「カベ」というには頼りない。しかし三角平面の仮設壁が散りばめられることで、それが作品ではなく会場に属していることが直感的にわかる。「。（マル）」というほど明確ではないが、「、（テン）」のような存在感で空間の句読点となっていた。三角の壁は視線を受け止める、視線を受け流す、視線を二つにスプリットする、など複数の効果をもたらして展示にリズムを作る。改めて考えてみると真っ直ぐの壁ではカーブしている展示室の中で句読点として強すぎるのだ。

会場構成の仕事は、開幕ぎりぎりまでプランを練りたい作家に対して水を差して打ち合わせを設け、展示全体のクオリティを上げる仕事でもある。山川は当然そのような能力を持っていると推察するが、止まろうとしていない展示に無理に水を差さない柔軟さがあって、もう一人の作家のように振る舞っていると感じた。その姿勢が小さくて三角形の壁に表象されていたように思う。

展示室入り口に投影された岩根愛の海の映像は、ドローンで撮られたとすぐにわかる鳥瞰の映像で、美しい映像とは裏腹に、私にはその



鈴木正治《太平洋》2002年（額装）、2024年（リプリント）



ロビン・ホワイト《NIRA TE IE》1986年頃



鈴木正治《太平洋》2002年



岩根愛《My Cherry》2024年



岩根愛《Island in My Mind, Lahaina》
2024年（部分）



岩根愛《Island in My Mind, Lahaina》
2024年（部分）



右前：ジュマナ・エミル・アブード《'Ein al-Joz Bride {the walnut bride}》2016年ほか、ドローイング12点
左前：ジュマナ・エミル・アブード《I feel everything》2020-22 年
中：ロビン・ホワイト《THE FISHERMAN LOSES HIS WAY.》1995 年
右後：岩根愛《Island in My Mind, Lahaina》2024 年（部分）
左後：中嶋幸治《パルス》2023-24年（部分）

無人航空機が使われている遠くの地の紛争が思い起こされた。岩根は奥に展示された《Island in My Mind, Lahaina》で冠婚葬祭のために転用された元軍用のカメラを作品のきっかけにしていることから、このドローンの利用も、そのような事情を踏まえた上でのことかもしれない。

岩根の作品を通して葛藤の中に飛び込んだまま、パレスチナ出身のジュマナ・エミル・アブードの作品に出会うと、彼女の自由な制作のあり方に驚く。咄嗟の反応で彼女の作品に政治的な主張を探してしまったが、抑圧を受けている国々の作家に政治的な姿勢を押し付けてしまうことほど恐ろしいこともない。後期展の写真を見てもアブードは滞在先から発想を得て、新しいモチーフや素材に出会い、豊かな制作に励んでいたことが伺える。改めてアーティストという職業のするべきことに思いを馳せてみると、入り口の鈴木正治やロビン・ホワイト、またアブードの横に展示されている工藤省治といった絵を描く作家たちが、様々な言語や文化に触れる中で抽象を獲得し、作品同士が時代や地域を越えて互いにコミュニケートしているようにも感じられてきた。

アブードの絵を見て振り返ると、二つの三角壁の隙間に中嶋幸治の作品が見えている。作品の照明隠しのために付けられた屋根が二つの三角壁と合わさって、小さな作品群に自然と視線が導かれる。

カーブする小さな三角屋根の下に、青森から札幌に向かうまで花を握り締めた手を撮って並べている中嶋の《パルス》。介護・介助の家事

労働に追われる中で、彼の制作には「できる時にできることをしておく」計画性が必要だったのではないだろうか。他の作家より先にインストールをした結果、クオリティの高い展示が導入部に置かれることで、全体の少し浮き足立った空気に楔を打っていた。

中嶋の作品は展示全体の試みと共鳴しているように感じ、心に残った。中嶋の別の展示作品《通過せよ》、《パチン》は、いずれも天候や他の人の都合によって形を得る作品だ。思い通りに動けない状況があるからこそ、移ろうものへの感動が深く表現されている。後期展で横一列



中嶋幸治《パチン》2024年



中嶋幸治《パルス》2023-24年（部分）





前：光岡幸一《あざみはなをあざみはなをあざみはなをあざみはなをあざみはなを》（雨漏り）2024年（部分）
後：岩根愛《The Opening》2024年（部分）

光岡幸一《あざみはなをあざみはなをあざみはなをあざみはなをあざみはなを》2024年（部分）

からグリッド配置に並び替えられた《パルス》は、花を握りしめた手がジャンケンのグー、あるいはガッツポーズの集合にも見え出し、ある瞬間をホールドしようとする作家の力強い意志を受け取った。

中嶋の作品列を抜けると、小さな作品群のために三角壁が点在したエリアに入り、最後に青野文昭の大作が充分なスペースを持って設置されている。会場構成者による、お手本のようなアーティキュレーションで、見事に難しい展示室が使いこなされていた。

自分の展示スペースで絵を動かす度、「いま」というものが立ち現れるように感じる。考えてみれば不思議だが、「いま」を感じるということと、「動くこと」は矛盾するどころか、切り離せない背中合わせのことだといつも思う。自分が止まっている時に何かが動いていることを感じること。あるいは自分が動いているときに何かが止まっていることを感じること。その感覚を「いま」と呼ぶのではないだろうか。つまり「いま」とは流れのことでも瞬間のことでもなく、流れと瞬間との関係のことなのだ。中嶋の作品はそのことを鋭く示唆していたと思う。そのように考えてみると、自分の仕事に対して感じていた矛盾にも合点が行く。大袈裟に言ってしまえば自分にとって展示を作るということは何かを止め、同時に何かを動かすことで、「いま」を表そうとすることなのかもしれない。葉が落ちる冬はバードウォッチャーにとって最高の季節だ。ACACの豊かな森を歩きながら、「いま」について思いを巡らせた。



左：是恒さくら《双子鯨の夢を見たら》のうち、《頭「正夢と逆夢」》2024年
右：光岡幸一《あざみはなをあざみはなをあざみはなをあざみはなをあざみはなを》（ししおどし）2024年（部分）

佐藤熊弥（建築家／キュレーター）

1991年東京生まれ。東京藝術大学油画専攻修士課程修了。西澤徹夫建築事務所を経て独立、現在は設計事務所tandem共同主催。主な仕事に「ある家族の会話」（集合住宅改修計画／2024年）「フランク・ロイド・ライト 世界を結ぶ建築／パナソニック汐留美術館」（展示デザイン／2024年）など。設計業務の傍ら展示の企画や絵のお店TANNERAUMの運営を行っている。





岩根愛《The Opening》2024年

石倉敏明
人類学者／秋田公立美術大学アーツ＆ルーツ専攻 准教授

複数の時間、多元化する生命

「currents / undercurrents — いま、めくるめく流れは出会って」をめぐって

新しい創造のためには同時代の出来事に対する鋭敏な感性と、過去の創造や遺産に対する絶え間ない探究が求められる。ヨハン・ゼバスティアン・バッハがヨーロッパの民謡を翻案しつつ画期的な多声音楽を作ったように、現代の音楽家ボブ・ディランは、スコットランドやアメリカの民謡に彼自身の詩をつけて歌った。1964年に作曲された「時代は変わる」はまさにこの時代の表層的な変化と、底流としてうごめく感覚や思想の位相変化を表現した見事な音楽的成果であったと言える。

2024年の日本列島では、能登半島の地震や羽田空港での飛行機衝突事故にはじまり、次々に新しいニュースが報じられた。さらにアメリカ合衆国の大統領選挙や長期化するウクライナやパレスチナでの戦争や侵略について、人びとが記憶し続けることが難しいほど情報はオーバーロードされ続けた。水面に発生した小さな泡は、底流の大きな変化に起因するものかもしれない。青森のローカルニュースでも、新入幕力士の優勝からスーパーマーケットの県内撤退、老舗デパートの閉店など悲喜交々の話題が報道されたという。私たちはそうした新しいニュースに驚きつつ、古くから続く習慣を生きる。そしてある日、習慣自体が更新され、新しい小さな渦を生み出す。アーティストもまた、そのような日々の小さな渦を生きている。

2024年に開催された「AOMORI GOKAN アートフェス2024」は、同一自治体における同時多発的な芸術祭プロジェクトとして、とても新鮮に感じられた。とりわけ私の記憶に突き刺さったのは国際芸術センター青森（ACAC）の「currents / undercurrents」展（副題略）であった。もっともACACでは、これまでも多くのアーティストが青森での調査活動や集中的な制作活動を活かしたユニークな展示を行ってきた。今期の展示で特徴的だったのは、展示替えを含む前期・後期の展示期間を設けたことで作家の滞在期間が延長・分散され、半年間に及ぶ滞在型調査や多様なワークショップやイベントが行われたことである。私は幸運にも、前期・後期両方の展示を見ることができたが、どの作品にも調査の深度、創発の鋭さ、技術の豊かさが感じられた。

前期展示では、ギャラリーAの入り口で、鈴木正治の《太平洋》シリーズとキリバスで制作されたロビン・ホワイトによる版画が対話し、さらに澤田教一の青森で撮影された三沢基地や小川原湖の写真が導入部の流れを形作っていた。一見非歴史的な曼荼羅のように見える鈴木の《太平洋》は、環太平洋の奴隷交易を含む





〈上〉光岡幸一《おらふぁせ》2024年
〈下〉中嶋幸治《パルス》2023-24年（後期）



澤田教一　カラー写真 7点のうち、4点



中嶋幸治《通過せよ》2024年（部分）（後期）



ロビン・ホワイト《ああ木よ/O Tree》 2024年
（越善佳、サワダ ハンナ・ジョイとのコラボレーション）



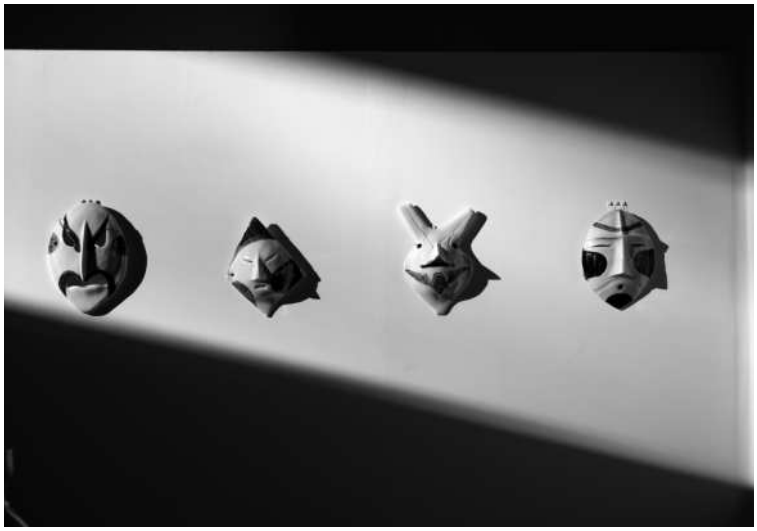
右上：青野文昭《戦争と平和（あるいは、戦没者とその子孫）》2024年
左上：青野文昭《会津の姫・雍仁親王妃勢津子像オマージュ（青森で収拾した古箪笥に入っていた戦前の写真集より）》2024年
右下：青野文昭《1945年7月10日 仙台市柳町の防空壕で焼け死んだ女性（あるいは2022年3月ウクライナ・ブチャで虐殺された女性）》2024年
中下：青野文昭《切腹する仙台藩士・玉虫左太夫（あるいは16世紀以降のアステカの人々）》2024年
左下：青野文昭《命乞いする蝦夷たち（あるいは第三次ポエニ戦争時のカルタゴ市民）》2024年

人間の移動と交信の歴史を考察するもので、さらに旧石器時代の現生人類の移動や人間以前の地球の歴史・大陸移動にも通じている。ニュージーランドとキリバスを往還するホワイトの作品は、鈴木の世界と呼応するように歴史から取りこぼされた女性たちの労働や記録されることのない生の流れを描き出す。戦争・紛争の写真家として知られる澤田は、青森という土地から海を眼差し、さらにそこに設置された自衛隊基地や在日アメリカ軍の基地管理という問題にも迫っている。

　会場を進むにつれ、観衆はハワイのラハイナで発生した山火事の跡を撮影した岩根愛の写真、ジュマナ・エミル・アブードによる神話の断片を思わせるドローイングとビデオ作品、同時代の生と対峙しつつ身体の律動を浮かび上がらせる中嶋幸治の写真シリーズ、青森市に生まれ東西の古代文化を探究した工藤省治による陶磁器とそのデザイン原画へと導かれる。現存作家と物故作家、グローバル世界とローカル世界の作品群がモザイク状に交錯するこの「徒歩旅行」は、さらに、その深部において青野文昭の壮絶なインスタレーションへと開かれていった。青野は川倉賽の河原地蔵尊をはじめとする東北の死者供養の信仰に触れ、モノの奥に潜む霊的な時間を否応なく召喚する。さらにその時間は、過去から現在まで、世界の戦争と暴力の被害者となった膨大な死者の霊を供養する、荘厳な魂の仕事として立ち現れる。その手つきは苛烈な現実や矛盾に引き裂かれながらも、無差別の慈悲によってその悲惨さと残酷さ



工藤省治《白磁暗花アイヌ文 細口 花生》平成時代、《動物文図》原画 平成時代（一部）



工藤省治　仮面4点

を克服している。会場の中盤で福島からハワイに移住した人々の死者供養である盆の記憶に触れた岩根は、青野のインスタレーションの先にある最奥の空間で、亡くなった妹を追慕する桜の写真を展示し、青野の作品に深く応答する。

さらにギャラリーBでは、青森県内の布文化を大胆にリミックスした是恒さくらの作品が、巨大な鯨の精霊のように宙を泳いでいた。これは青森県内から集められた着物のハギレを「解き、裂き、重ね、繕い、藍で染め直す」という日常の手仕事の工程を取り入れたものだという。是恒は自身と他者が織りなす手仕事の自己組織性を活かして、複数種の共棲関係にも似た有機的な空間を構築した。その繊細な手仕事によって、行為のうちに秘められた言葉が詩的なフレーズを編み出してゆく。太平洋・日本海・津軽海峡という三つの海を取材した是恒のフィールドワークは、ここでも鯨への畏怖と感謝の記憶を浮き彫りにしつつ、学術的な記録とは異なる道筋でローカルな現実を生きられた歴史に結びつける。

是恒の《双子鯨の夢を見たら》という作品は、鯨取り漁師たちに伝わる「子連れの鯨は夢にも見るな」という伝承とともに、それを反転した形で「鯨自身の夢」を造形化したようにも感じられた。興味深いことに、この会場の外にある光岡幸一による作品群《ᐊᓂᓯᓂᐱᓕᕆᔨᒃ ᐊᓂᓯᓂᐱᓕᕆᔨᒃ》の一つである「ししおどし」は、是恒の鯨が深い海流から時折水面に姿を現し、潮を吹いたり呼吸したりするような音響効果を発生させていた。光岡によれば、これはカッ

青野文昭《戦う英雄たち - SACRIFICE 2024》2024年





是恒さくら《双子鯨の夢を見たら》2024年

プ麺の「湯切り」から着想した動力装置だという。二人の作家の間には、自然界では頻繁に見られる異種の協働にも似た見事な連携と創造性の連鎖が生じていた。さらに光岡が館内の天井からの雨漏りの音を増幅することで生み出す音響装置、野外の建築物等にテープで描き出されるピクトグラムは、室内で行われる作品制作を外部に裏返し、また野外で行われる土木的・遊戯的な活動をそのままアートワークに反転する会場設計のラディカルな側面を呈示するものだった。

後期の展示では、前期には是恒による巨大な鯨の精霊が泳いでいたギャラリーBの空間に、岩根による壮大な水流の映像が映し出された。これは岩根が高校時代を過ごしたカリフォルニア北部を流れるマトール川の汽水域を撮影したものだという。八戸とほぼ同緯度にあるマトール川では、一年に一度川が海に決壊して、複雑な水流が交わり幾つもの渦を成す光景が展開されるという。これを内側から追体験できるように、岩根の映像は鑑賞者の主観的な視界を維



岩根愛《離脱の試み / Attempt at Disembodiment》2023-24年（部分）

持しつつ、身体から遊離した意識の流れを眺め続けるような不思議な臨場感を与えてくれた。その「不思議さ」は、ギャラリーAの奥に展示されている岩根の旅の写真に継承される。東京・福島・カリフォルニア・ハワイ・青森をたどる環太平洋の旅路を通して、岩根は逝去した人びとを追慕するだけではなく、複数の現実を移行する「体外離脱」の視点を鮮やかに技法化している。それは、カメラのレンズを用いた映像の実験であるだけでなく、古くから『チベットの死者の書』などの経典に記載されている、生と死の間にあるという「バルド（中有）」のプロセスを辿る意識の旅のようだ。

ギャラリーAでは、前期の展示を反復しながらもこれを深めるような工夫が随所に潜んでいた。例えばパレスチナ出身のアブードは、ドローイングやグラスウェア、映像を通じて、かつて緑豊かな土地であったヨルダン川渓谷を思わせる、青森の水に関わる様々な伝承を拾い集めていた。この試みは、ある土地が歴史の中で変化しうること、すなわち現在入植者の開発によって荒廃する故郷への返歌であり、パレスチナもまた、未来において豊かな水と緑を取り戻すことができるという希望でもある。この問いに呼応するように、後期には下北半島・函館・樺太など、日本列島の境界や国境を超えて収集されたアイヌの衣服が展示された。それらは、入植者植民地として北海道地域に囲い込まれたアイヌの人びとの生活文化を思い出させるが、それだけではない。展示されたアイヌの衣装は、かつて津軽半島や夏泊半島に「狄村（えぞむら）」と呼ばれるアイヌ

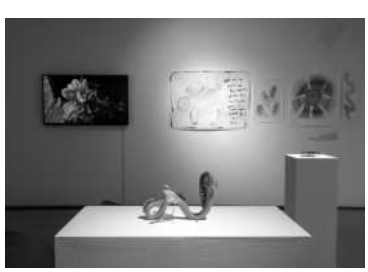


前：アイヌの衣服（青森市教育委員会所蔵）

集落があったことを想起させる。その豊かな衣服のデザインは、アイヌ民族を同化し、和人の政治と文化に組み込もうとしてきたという抑圧の歴史を超えて、実は東北における工芸デザインの源流がアイヌ文化のルーツと重なるものであるという歴史的現実を思い出させてくれる。

前後期を通じて、本展はそれぞれの作家の持つ表現回路と心的現実の多層性にアプローチすることに成功したと言えるだろう。振り返ってみると、こうした実験的な試みは、かつての芸術祭ブームにおいて氾濫した表層的なリサーチに根ざした「作品化」や「展示活動」を乗り越える成果と言えるかもしれない。だが、もっと重要なことがある。それは、おそらく長期間のリサーチの間に激しく揺れ動く現代の歴史から離脱し、自身の意識と身体の関係、生者と死者の関係、人間と非人間の関係といったさまざまな関係性について捉え直し、再帰的に自身の制作に活かすことのできる創作環境の可能性である。本展は大学キャンパスの一部に





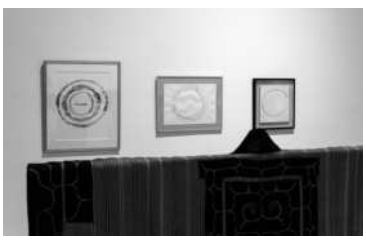
〈上〉ジュマナ・エミル・アブード《Frog-tortoise carried by the great water god between Komainu hands》2024年、ほか
〈下〉ジュマナ・エミル・アブード《Water stories in translation》2024年、ほか



ロビン・ホワイト《あおもり探索 /Finding My Way in Aomori》2024年（部分）

位置するACACの公益性を活かしつつ、このような環境特性をアーティストたちに共有し、複数の時間から同時代の芸術表現を汲み出すという重要な成果を残している。それは単に複数の異なる時間の流れを生きるだけではなく、加速化する時間に抵抗しつつ死者という非時間的な存在を想起し、その視点を自身の生の流れに組み込むことでもある。それはまた、生物進化の時間や地殻変動、火山活動、海流の変化といった長期持続する「人間ならざるものの時間」を想起し、人間の時間を相対化することにもつながる。

半年の期間をかけて二つの展示を接続するというこのプロジェクトは、忙しなく自身をマーケットに捧げ、死者の視点を忘れて生きようとする現代の生者（アーティスト、リサーチャー、鑑賞者、業界人）の在り方を、根底から批評する鋭さに貫かれている。その鋭さを包み込むのは、人間と人間ならざるものの膨大な死を見つめ、その死を想い、現存しない死者や精霊とともに生きようとするもう一つの時間のあり方かもしれない。死を想う時、私たちは自らが生きる同時代の時間の滞留に直面し、見知らぬ他者や亡者たちの生の時間と出会う。そして、それは物理的な死の可能性を超えて到来する想像力による再生の儀式であり、浮かんでは弾ける時間や複数種の身体を超えて「多元化する生命」に出会う奇跡でもあるのだろう。とてつもなく古い時代から受け継がれた盆踊りが移民の社会に甦りを果たすように、私たちは何度でも、新たな形式によって再生する多元的生命と出会い直すのだ。このプロジェクトは土地に潜む固有の時間と空間を超えた他者の時間を接続し、目の前に広がる荒漠とした死の力に抵抗する私たち自身の生の時間を目覚めさせる。私たちは死者とともに生き、この複数の流れの中で再生を果たすのだ。



前：アイヌの衣服（青森市教育委員会所蔵）（一部）
後：鈴木正治《マルイ虹ミタ 飛行機の影ミタ（虹と飛行機）》
1998-2003年、3点

石倉敏明（人類学者／秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻 准教授）
1974年東京生まれ。アジアや日本各地でフィールド調査を行い、アーティストとの共同制作を実施。複数種をめぐる神話学や芸術人類学研究を続ける。2019年、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際芸術祭日本館展示「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」に参加。共著書・共編著書に『野生めぐり列島神話の源流に触れる12の旅』、『Lexicon 現代人類学』『モア・ザン・ヒューマン　マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』、『〈動物をえがく〉人類学　人はなぜ動物にひかれるのか』など。



岩根愛《The Opening》2024年

Photo: 百頭たけし（pp.022–035）

メディア掲載

■ 新聞記事

4月15日(月)	新美術新聞　展覧会カレンダー	7面
4月23日(火)	陸奥新報　社説 アートフェス	5面
5月 8日(水)	デーリー東北　文化―つらなりのはらっぱ③ ACACメイン企画の特色	9面
5月26日(日)	東奥日報　澤田教一、岩根愛さん「故郷を撮る」決意とこだわり	12,13面
6月 4日(火)	東奥日報　ACACで企画展「変化する現在」多様に表現	9面
6月14日(金)	東奥日報　鷲田めるろのアート探訪34 表の流れ裏の流れ	11面
6月19日(水)	デーリー東北　文化―つらなりのはらっぱ⑧鑑賞ツール配布	11面
7月14日(日)	東奥日報　ロビンさん竹林さん版画合作	7面
7月18日(木)	東奥日報　GOKANフェス15万人達成	23面
7月24日(水)	デーリー東北　文化―つらなりのはらっぱ⑬ 展示替えを経て	9面
8月 9日(金)	東奥日報　鷲田めるろのアート探訪㊱ 二つの領域が出会うとき	11面
8月11日(日)	デーリー東北　写真家岩根愛さん 八戸でイベント	9面
9月12日(木)	河北新報　風土と交わる気鋭の表現	17面
9月19日(木)	東奥日報　Miniガイド	18面
9月22日(日)	東奥日報　sawada1964	12,13面
9月18日(水)	陸奥新報　社説 初のアートフェス	5面
9月19日(木)	東奥日報　Miniガイド 是恒さくら「くじらびらき」	18面
10月 9日(水)	東奥日報　県内アート点から面へ	22面

■ 雑誌・広告

5月 1日(水)	「広報あおもり」No.457　くらしの情報	P 24
5月 1日(水)	「Kappo 仙台闊歩」5月号	P 18
5月10日(金)	「あおもりのき」第17号　イベントスケジュール	P 43
5月10日(金)	「クロワッサン」No.1116	P 41
5月27日(月)	「スカイワード」6月号　アートに浸る青森	P 38
5月29日(水)	「CLippER」Vol.264　イベント情報	P 13
6月 1日(土)	「広報あおもり」No.458　ACACからのお知らせ	P 4
6月23日(日)	「SPUR」8月号　アートな感性で旅する青森	P159
6月27日(木)	「スカイワード」7月号　A plaza anyone can visit, anytime	P105
6月28日(金)	「25ans」8月号　アートで感性を刺激する旅	P242
7月 1日(月)	「広報あおもり」No.459　ACACからのお知らせ	P 21
8月 1日(木)	「広報あおもり」No.460　ACACからのお知らせ	P 25
9月 1日(日)	「広報あおもり」No.461　ACACからのお知らせ	P 21

■ Web媒体

Tokyo Art Beat
https://www.tokyoartbeat.com/events/-/Currents-Undercurrents-Bringing-Together-the-Endless-Flow/ABF44D5B/2024-04-13

Web美術手帖
https://bijutsutecho.com/exhibitions/13373

ArtSticker
https://artsticker.app/events/25346

artscape
https://artscape.jp/exhibitions/4739/

Kappo 仙台闊歩
https://kappo.machico.mu/articles/9780

国立新美術館
https://www.nact.jp/english/artcommons/user/detail/75354

アートアジェンダ
https://www.artagenda.jp/exhibition/detail/9549

展覧会「currents / undercurrents ーいま、めくるめく流れは出会って」

アーティスト	ジュマナ・エミル・アブード、青野文昭、岩根愛、是恒さくら、工藤省治、光岡幸一、中嶋幸治、澤田教一、鈴木正治、ロビン・ホワイト
会場構成	山川陸
プログラム期間	2023年3月ー2024年9月
展覧会会期	2024年4月13日(土)ー6月30日(日)(前期)、7月13日(土)ー9月29日(日)(後期)
会場	青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC]展示棟 ギャラリーA・B
主催	青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC]
協力	アジアン・カルチュラル・カウンシル、株式会社ブルージエイ 山ノ手写真、Cyg art gallery、日本カメラ博物館、McLeavey Gallery、青森市教育委員会、AIRS(アーティスト・イン・レジデンス・サポーターズ)、青森公立大学芸術サークル
助成	芸術文化振興基金
協賛	株式会社吉田産業、有限会社大平建設、青森ひばショップ イアモク
後援	ニュージーランド大使館、青森テレビ、RAB青森放送、青森朝日放送、青森ケーブルテレビ、エフエム青森、ABHラジオ、東奥日報社、陸奥新報社、デーリー東北新聞社
企画	慶野結香
来場者数	10,451名(展覧会来場者10,015名、関連プログラム参加者436名)

関連イベント

■ 是恒さくら 共同制作「うつろいのあいだを縫う〜石になる鯨、貝になるイルカ」
日時｜2024年3月13日(水)・16日(土)・20日(水)・23日(土)・27日(水)・30日(土)13:00ー16:00
会場｜創作棟 ワークショップスタジオ
参加者数｜16名

■ 青野文昭 トーク「表現の『道・の・奥』を言葉にする」
日時｜4月13日(土)14:30ー16:00
会場｜展示棟 ラウンジ
参加者数｜21名

■ 是恒さくら 共同制作／刺繍カフェ「大きな鯨の小さなかけら」
日時｜4月20日(土)、5月11日(土)・25日(土)、6月8日(土)・22日(土)13:00ー16:00(会場:展示棟 ラウンジ)
4月29日(月)、5月30日(木)13:00ー16:00(会場:あおもり北のまほろば歴史館 休憩スペース)
参加者数｜23名

■ キュレーターツアー
日時｜5月4日(土)、8月3日(土)10:30ー11:30
会場｜展示棟 ギャラリーA・B
参加者数｜19名

■ 中嶋幸治 ワークショップ「リンゴの花と過ごす」
日時｜5月5日(日)14:30ー終了時間自由
会場｜ACAC屋外
参加者数｜18名

■ Maher Shalal Hash Baz ライブ「山の上の連絡船」
日時｜6月15日(土)13:00ー15:00
会場｜展示棟 野外ステージ

■ 光岡幸一 ワークショップ「徒然面構E倩(ﾂﾚﾂﾞﾚｯﾗｶﾞﾏｴﾂﾗﾂﾗ)」
日時｜6月30日(日)14:30ー16:00
会場｜展示棟 野外ステージ、創作棟周辺
参加者数｜32名

■ 海外アーティストによるトーク(ロビン・ホワイト、ジュマナ・エミル・アブード)
※終了後アブードによる「folklore meditations」パフォーマンス
日時｜7月13日(土)14:30ー16:30
会場｜展示棟 ラウンジ、野外ステージ

■ 伊藤俊治 トーク「めくるめくパターンとイメージ」(出演:伊藤俊治、岩根愛、中嶋幸治)
日時｜7月14日(日)14:30ー16:00
会場｜展示棟 ラウンジ
参加者数｜26名

■ 是恒さくら×昆政明 対談「大きな鯨を囲んでー流れ寄るモノとイメージを語る」
日時｜7月20日(土)14:30ー16:00
会場｜展示棟 ラウンジ、オンライン配信
参加者数｜24名

■ 山川陸×慶野結香 ツアー「あちらの流れをたどる」)
日時｜7月21日(日)10:00ー13:00
会場｜青森駅周辺
参加者数｜7名

■ 岩根愛×町口覚 トーク「唯一無二の写真と、写真集のために」
日時｜7月28日(日)14:30ー16:00
会場｜展示棟 ラウンジ
参加者数｜25名

■ パレスチナを考える① Subversive Film / Tokyo Reels プロジェクト「土地の日」上映会
日時｜8月4日(日)14:30ー16:00
会場｜展示棟 AVルーム
参加者数｜18名

■ パレスチナを考える② Station House Opera「At Home in Gaza and London」上映会+トーク
日時｜8月6日(火)14:30ー16:30
会場｜展示棟 AVルーム
参加者数｜13名

■ 岩根愛 夏休みイベント「水に流さない」
日時｜8月17日(土)9:30ー12:30
会場｜堤川中流—下流
参加者数｜9名

■ 是恒さくら クロージングイベント「くじらびらき」
日時｜9月29日(日)12:00ーなくなり次第終了
会場｜展示棟 野外ステージ
参加者数｜30名

アーティスト・イン・レジデンス プログラム2024
「SPINNING SCAPES」



浅野友理子《ひそやかな交易》2024年

高橋麻衣
八戸市美術館 学芸員

Review

目まぐるしき世界に根を張る

2024年の日本は、石川県能登半島での大地震で幕を開けた。国外では、依然として紛争が続く地域があり、国際情勢は変化し続けている。本プログラムのタイトルである「SPINNING SCAPES」は、このような目まぐるしい世界で、表現による可能性を探る4名のアーティストたちの試みを提示している。「SPINNING」というのは、非常に動的な言葉であり、アーティストたちの作品からも絶えまない動きとそれに対する呼応を見てとることができる。

マギー・チュウの《私が作った巣の中にあなたは家を作りますか?》は、旅による移動の痕跡を「素材」としたインスタレーションである。チュウは、渡り鳥が各地でありあわせのものを使い「巣＝ホーム」をつくることに着目し、チュウが国際芸術センター青森（ACAC）に至る旅路や滞在中に集めたパンフレットや布を用いて作品を制作した。ジェイムズ・クリフォードは、「旅」について、「たんなる場所の移動や拡張ではなく、むしろ多様な文化的意味を構成するものとして考えられる」[*1]ととらえ、経路（routes）が根源（roots）を創造するものとなり得ることを示唆している。中国語と日本語が混じりあったオブジェは、行く先々の文化と混じり合いながら、チュウが築いた新たな故郷（home/roots）なのである。

ベアトリス・ディディエの《AMOR AOMORI》では、4人の参加者とともに歩んだ経路が、木の葉のくずなどで展示室の床面に描かれた。さらに、歩行中の参加者とディディエの気







〈上〉ベアトリス・ディディエ《AMOR AOMORI》2024年 痕跡3：映像《青森を歩く》
〈下〉ベアトリス・ディディエ《AMOR AOMORI》2024年 痕跡4：タイプライター Olivetti Lettera 22
〈右〉マギー・チュウ《私が作った巣の中にあなたは家を作りますか?》2024年



八幡亜樹《記憶の海流》2024年（スライド写真）



八幡亜樹《記憶の海流》2024年（歌詞）

持ちを言葉で綴り、互いに交換した落ち葉も展示され、両者の身体的な形跡とともに、感情の痕跡もたどることができる。ディディエが描いた線は、草原を自ら歩いて作り出した線を記録したリチャード・ロングの《歩行による線》（1967年）を彷彿とさせながらも、どこまでも他者に委ねられている。加えて、葉のくずで描かれた線は、来館者が近くを歩くだけで脆く崩れていき、自らがコントロールできない状況を表しているかのようである。しかし、そのようななかでも、他者を受け入れて協働することで生まれる新たな道の可能性を、ディディエは示している。

八幡亜樹は自らのルーツを出発点とし、出身地の北海道木古内町と、対岸の青森県大間町でのリサーチをもとに、インスタレーション《記憶の海流》を制作した。八幡の母が語る北海道の暮らしを綴ったテキストには、津軽海峡で沈没した青函連絡船の話が登場するが、それらは少しずつ事実と異なっている。加えて、展示された写真に写る祖父の家が、今は取り壊されてなくなってしまっていることも、記憶や思い出が移り変わるものであることを突きつける。しかし、祖父が家に増設した窓から見える津軽海峡は、事故当時と変わらぬままあり続け、八幡は海が内包する遠い記憶を振り返るように海中や海岸に横たわり、背で過去を見る。その姿と2つの町の対岸風景が写る映像の間にはテキストが映し出されているが、椅子に座る観客の背中でピントが合うため、自分だけではそれらを見ることができない。それは、過去が







〈左上〉浅野友理子《ひそやかな交易》2024年（部分）
〈左下〉浅野がリサーチ中に拾った朴の実
〈右〉八幡亜樹《記憶の海流》2024年（映像：観客の背中にピントを合わせて投影）



ベアトリス・ディディエ《AMOR AOMORI》2024年
痕跡1：歩いた道のりを写したドローイング

一人だけのものではなく、幾人もの思い出が絡み合って出来ているものであることに気づかせてくれる。ワークショップで制作した、住民が海にまつわる思いを歌詞にして歌った歌は、海で命を落とした人々の存在を想起させるようにどこか物悲しい。しかし、穏やかながらも明るい曲調と、「明日をみるあなたの背に」という歌詞には、どのような過去があろうとも、それらを乗り越えて前へと進んできた人々の営みが込められている。

ここまで述べた3名の作品が、自らの軌跡を地続きでたどるようだったのに対し、浅野友理子の《ひそやかな交易》は時間的、空間的な飛躍をみせる。浅野は、鳥のペリット（吐き出した消化不良物の塊）や糞のなかにある「種」から芽吹いた様々な植物を、高さ6mもあるACACの天井から床まで広がる和紙にダイナミックに描いた。これらのイメージを育んだ「養分」となったのは、野鳥や渡り鳥の観測を行う人々との交流や、豊かな自然のなかで見た鳥や植物である。浅野はこうした出会いの痕跡をデッサンとして描いた。本作が、そのような過去の蓄積を経て生まれた一方、創作の根源となった種がどのように運ばれてきたのか、その経路をたどることはできない。ルーツを見失いながらも、思いもよらぬ場所で根付いていく植物の姿に、どのような状況でも生きる強さを見出すことができる。

本プログラムにおいて、4名のアーティストたちは、激しく変わる世界に抗うのではなく、環境や他者を受け入れながら、それぞれの表現によって新たな景色を創造した。その振る舞いは、目まぐるしい世界でしなやかに根を張り、道を切り拓くための術といえるだろう。

*1　ジェイムズ・クリフォード『ルーツ―20世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝・柴山麻妃・福住廉・有元健・島村奈生子・遠藤水城訳、月曜社、2002年、12頁。

高橋麻衣（八戸市美術館 学芸員）

東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科卒業、東京藝術大学大学院芸術環境創造領域修了。専門はアートマネジメント。2014年から八戸市まちづくり文化推進室にて「南郷アートプロジェクト」の企画運営を行なう。2020年より現職となり、開館記念展「ギフト、ギフト、」（2021-2022）や「風のなかを飛ぶ種子　青森の教育版画」（2023）を担当。

Photo: 高野ユリカ（pp.038–043）





アーティスト・イン・レジデンス プログラム2024「SPINNING SCAPES」

アーティスト	八幡亜樹、浅野友理子、マギー・チュウ、ベアトリス・ディディエ
ゲスト審査員	近藤亮介
プログラム期間	2024年10月2日（水）ー12月24日（火）
展覧会会期	2024年11月30日（土）ー12月22日（日）（一部11月14日（木）から）
会場	青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］展示棟 ギャラリーA・B
主催	青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］
協力	AIRS（アーティスト・イン・レジデンス・サポーターズ）
助成	令和6年度 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス型地域協働支援事業
後援	駐日ベルギー大使館、青森テレビ、RAB青森放送、青森朝日放送、青森ケーブルテレビ、エフエム青森、ABHラジオ、コミュニティラジオ局BeFM、東奥日報社、陸奥新報社、デーリー東北新聞社
企画	原田桃望、瀬藤朋、慶野結香
来場者数	812名（展覧会来場者591名、関連プログラム参加者221名）

関連イベント

■ 浅野友理子+マギー・チュウ オープンスタジオ
日時：2024年10月26日（土）13:00ー16:00
会場：創作棟 ワークショップスタジオ
参加者数：21名

■ マギー・チュウ 青森市立新城中学校連携ワークショップ
日時：11月6日（水）10:00ー11:00
会場：展示棟 ラウンジ、ギャラリーB
参加者数：136名

■ 八幡亜樹 楽曲制作・歌唱ワークショップ
日時：11月18日（月）・19日（火）16:00ー19:00
会場：大間町健康福祉センター「スマイリー」
参加者数：17名

■ ベアトリス・ディディエ 青森県立青森中央高等学校連携授業
日時：12月3日（火）9:55ー11:45
会場：青森県立青森中央高等学校
参加者数：17名

■ 近藤亮介×参加アーティストトーク
※終了後ベアトリス・ディディエによるパフォーマンス
日時：12月7日（土）14:30ー17:00
会場：展示棟 ギャラリー、ラウンジ
参加者数：26名

■ ベアトリス・ディディエ ワークショップ「いま、ここにいるということ」
日時：12月8日（日）13:00ー17:00
会場：ACAC屋外、創作棟 講義室
参加者数：4名

メディア掲載

■ 新聞記事

11月21日（木）	陸奥新報　アートの現場からACAC通信	9面
12月 5日（木）	河北新報　ACACで滞在制作美術展	23面
12月16日（月）	東奥日報　循環する生命など表現 ACAC（青森）でレジデンス展	5面
12月19日（木）	陸奥新報　アートの現場からACAC通信	9面
1月25日（土）	河北新報　人口減時代の美術館「拠点化進め安定経営へ」	25面

■ 雑誌・広告

10月 1日（火）	「広報あおもり」No.462　ACACからのお知らせ	P21
11月 1日（金）	「CLippER」Vol.269　展覧会のお知らせ	P12
11月 1日（金）	「青年委員会だより」271号	P 1
11月15日（金）	「あおもりのき」第20号　ギャラリーイベントスケジュール	P43
12月 1日（日）	「広報あおもり」No.464　ACACからのお知らせ	P21
12月 1日（日）	「青年委員会だより」272号	P 1

■ Web媒体

アートアジェンダ
https://www.artagenda.jp/exhibition/detail/9550

ArtSticker
https://artsticker.app/events/49475

Web美術手帖
https://bijutsutecho.com/exhibitions/14974

TOKYO ART BEAT
https://www.tokyoartbeat.com/events/-/Artist-in-Residence-Program-2024-Spinning-Scapes/ABF-44-D5-B/2024-11-30

表現のコモンズ / 《ACACの写真部》 / 見えない建築ツアー / 教育普及



表現のコモンズ vol.8 tatazumi 映画上映会「play back」

日時：2024年6月29日（土）17:30ー19:00
企画：瀬藤朋、慶野結香

様々なジャンルの表現を紹介する「表現のコモンズ」。2024年度は作家、美術家、作曲家、編集者、俳優という異なる専門性をもつ5名からなる制作団体 tatazumi が制作した映画「play back」の上映を行った。本作品は、2023年9月に国際芸術センター青森（ACAC）での自主滞在を通じて制作されたものである。アフタートークには、監督の三矢フミと撮影を担当した志賀耕太が登壇し、作品制作の際に参照したジャン=リュック・ゴダールやマルグリット・デュラスの映画作品との関係性、またACACでの自主滞在の経験について共有した。当日は高校生から大人まで幅広い年代の来場があり、「普段、独立系映画を観る機会がないので、面白かった」等の感想があった。映画という第三者による視点を通してACACという場所を見つめ直し、新たな側面を再発見するきっかけとなった。また、自主滞在を通じて制作された作品は、どのような作品になったのか、どこで展示されたのか等の追跡が難しい場合が多い。そのため、ACACがアーティストの作品制作にどのような影響をもたらしているのかを知る、という意味でも貴重な機会だったように思う。



Photo：tatazumi「Play back」より

《ACACの写真部》

《ACACの写真部》は、2022年にACACで開催した松本美枝子個展「具にみる」をきっかけに組織された部活動である*。2024年度は写真で表現を行うアーティストがACACの展覧会に参加し、写真映像を専門とする学芸員が着任した年でもあった。そうした環境を土台とし、《ACACの写真部》の活動を再開した。メンバーと学芸員が共同でイベントを企画し、月1回写真を軸にした場を作ることを試みた。
写真表現に興味がある人、カメラや撮影することが好きな人、これから学んでいきたい人、とりあえず参加してみたいと思った人など、新たなメンバーも加わり活動を続けていった。ACACの中だけでなく、青森県立美術館で開催されていた写真展のツアーをしていただいたり、秋の雲谷で写真撮影を行ったりと外にも活動の場は広がっていった。また、メンバーが主導し写真を用いた対話型鑑賞も行った。
年度末には合同のポートフォリオを作ることになり、編集や表紙デザインはそれぞれ得意なメンバーが担い、2024年度の《ACACの写真部》を象徴する一冊が出来上がった。

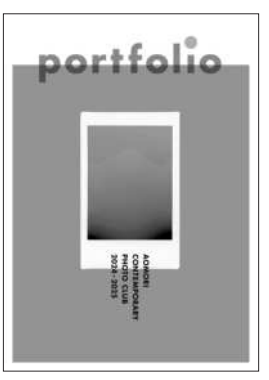
*《写真部》は2010年より松本が、各地で行ってきたワークショップ・プロジェクトである。現在は《メゾン・ケンポクの写真部》と《ACACの写真部》が、地域のひとたちとの協働で続いている。



「小島一郎展」キュレーターツアー
@青森県立美術館



秋の雲谷狩り



《ACACの写真部》2024-2025　ポートフォリオ

開催実績

2024年　① 5/25 岩根愛 ギャラリーツアー&トーク
② 6/22 さまざまな写真集にふれる
③ 7/27 「小島一郎展」キュレーターツアー&中嶋幸治さんと話す会
④ 8/10 カラープリントワークショップ
⑤ 9/21 小林美香『写真を〈読む〉視点』を読む
⑥10/26 秋の雲谷狩り
⑦11/25 対話型鑑賞
⑧12/15 アメリカの写真集を読む
2025年　⑨ 2/16 ポートフォリオZINEを作る
⑩ 3/22 ポートフォリオZINE披露会&モノクロプリントワークショップに向けて

見えない建築ツアー

Photo: 八戸市美術館





ACACの建築に焦点を当てたガイドツアーを、4月から11月にかけて月1回実施した。現在は2名のガイドが活動しており、設立当初からAIRS（アーティスト・イン・レジデンス・サポーターズ）としてACACの活動に関わっている方や、青森県内の他の文化施設でもガイドを務めている方がおり、それぞれに多様なバックグラウンドを持つ。アーティストの制作活動に焦点を当てた内容や、建築的な側面を詳しく解説する内容など、来場者はガイドごとに異なる視点からツアーを楽しむことができる。八戸市美術館の建築ガイド（アートファーマー）との交流会では、始めにACACのガイドによるツアーを実施した後、ラウンジでどのようなことに気を付けてガイドを行っているか、どのような準備をしているのか等の意見交換が行われた。また、6月18日から7月31日まで新たなガイドの募集を行ったが、残念ながら応募はなかった。今後も引き続き募集を継続し、新たにユニークなツアーを実施してくれるガイドを募っていきたい。また、他館のガイドとの交流やノウハウの共有なども積極的に行い、プログラムの充実を図りたい。

開催実績

4月から11月まで、毎月第4日曜日10:30ー11:30に開催した。

① 4/28
② 5/26
③ 6/23
④ 7/28
⑤ 8/25
⑥ 9/22
⑦ 10/27
⑧ 11/24
12/8 八戸市美術館 建築ガイド（アートファーマー）との交流会



教育普及

青森市内の学校との連携授業やアーティストの学校訪問など、2024年度も様々な教育プログラムを実施することができました。改めて実施をご検討、ご協力いただいた先生方へ感謝を申し上げます。

創作体験

青森市内を中心とした小学校の課外活動の受け入れ先として、小学校低学年を対象にワークショップを実施した。13校を受け入れ、ほとんどが2年生だったが、1、2年生合同で参加する学校もあった。午前中は、手を動かして作品を制作するプログラムを行った。ACACの森で拾った葉を素材に、フロッタージュの技法を用いて魚や小鳥を制作し、協力して一つの大きな作品に仕上げる「魚の学校」「小鳥の学校」を実施する学校が多かった。模様の写し取り方や紙の切り方を工夫し、それぞれがこだわりの魚·鳥を制作する姿が見られた。また、スプレーと葉を使って大きな紙の上に森の風景を描く「紙の上に森を作ろう」では、「どんな森があったら面白いか」という視点で色について話し合う様子が印象的だった。午後は、ACACの野外彫刻をめぐるスタンプラリーを実施した。時間内にスタンプラリーを完成させる学校が多かったため、2025年度以降は、野外彫刻やACACの環境をより時間をかけて巡ることができる新しいワークを実施できると良いのではないかと思った。幸い雨天の日はなく、すべての日程で屋外活動を行うことができた。豊かな緑に囲まれ、普段とは異なる空間で溌溂と活動する子どもたちの様子が印象的だった。





2024年度 学校·教育団体来館·連携一覧

学校	学年	参加者数	訪問日	内容：午前	内容：午後
三内小学校	2年生	41	8/27	魚の学校	野外彫刻鑑賞
浪館小学校	2年生	53	8/28	魚の学校	野外彫刻鑑賞
小湊小学校	2年生	43	8/30	紙の上に森を作ろう	野外彫刻鑑賞
造道小学校	2年生	72	9/2	小鳥の学校	野外彫刻鑑賞
原別小学校	2年生	47	9/3	小鳥の学校	野外彫刻鑑賞
堤小学校	2年生	53	9/4	紙の上に森を作ろう	野外彫刻鑑賞
千刈小学校	2年生	87	9/6	魚の学校	野外彫刻鑑賞
戸山西小学校	2年生	38	9/9	魚の学校	野外彫刻鑑賞
筒井小学校	2年生	76	9/13	魚の学校	野外彫刻鑑賞
蓬田小学校	2年生	15	9/17	紙の上に森を作ろう	–
篠田小学校	2年生	58	9/18	小鳥の学校	野外彫刻鑑賞
古川小学校	1-2年生	38	9/20	魚の学校	野外彫刻鑑賞
三内西小学校	2年生	66	9/27	紙の上に森を作ろう	野外彫刻鑑賞



アーティストによる学校連携授業

マギー・チュウ むつ市立田名部中学校職場体験

日時：10月18日（金）

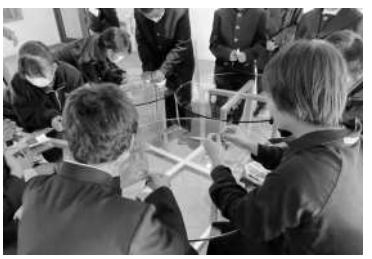
むつ市立田名部中学校の2年生がアーティストという職業を学ぶため、職場体験としてマギー・チュウの作品制作に参加した。知っている英単語を使いながらも、手を動かしながら行う制作を通して2人はコミュニケーションを行った。複雑な折り方にも関わらず、一対一でチュウが手本を見せながら一片の折り紙モジュールが完成した。



マギー・チュウ 青森市立新城中学校連携ワークショップ

日時：11月6日（水）10:00ー11:00

国際交流を目的として青森市立新城中学校の1年生136名がACACに来館した。野外ステージでマギー・チュウから英語で制作中の作品やアーティストのバックグラウンドについて話し、その後チュウの作品の一部を構成する折り紙モジュールの制作ワークショップを行った。
チュウの作品のテーマでもある巣や家に関連する紙を事前に中学校内で用意してもらい、当日は代表生徒に折る方法をチュウから伝授した。残りの生徒は2グループに分かれ、ACACスタッフによる施設案内とギャラリーBにある設営中のチュウの作品を見て回った。最後に生徒からチュウに対して英語で感謝の言葉が伝えられた。
折り紙モジュールは折り方がかなり複雑なため、ワークショップでは完成まで説明することが難く、新たに折り方の説明動画をチュウとACACスタッフが制作し担当の先生にお送りすることになった。後日、生徒たちによって制作された折り紙モジュールとお礼状がACACに届き、チュウの手によって展覧会会期中にインスタレーションの中に組み込まれた。





ベアトリス・ディディエ 青森県立青森中央高等学校連携授業

日時：12月3日（火）9:55ー11:45

ベアトリス・ディディエが、美術系列2年生を対象にワークショップを実施した。ディディエの主な制作活動のひとつであるパフォーマンスアートにおける「身体の在り方」を考える入り口として、いくつかのワークに取り組んだ。
最初に、全員で手をつないで輪になり、隣の人に手を握られたら反対隣の人の手を握っていく、伝言ゲームのようなワークを行った。続いてペアになり、一方が目隠しをし、もう一方がサポート役となって、視覚以外の感覚を使いながら空間を探索するワークを実施した。生徒からは「日常の風景に再発見があった」という感想があった。その後、木の棒を介して他者とつながるペアワークを行った。お互いの身体で木の棒を支えながらアイコンタクトをとり、徐々に歩いたりしゃがんだりと動きを加えていく内容で、言葉を使わずに信頼関係を築くことを意識して取り組んだ。最後に、グラスに満杯まで注がれた水をこぼさないように歩くワークを行った。「これを人生で一番大事なものだと思って」というディディエの言葉通り、生徒たちはゆっくりと集中して歩いていた。馴染みのない内容ではあったが、ときおり笑顔を見せながら、楽しんで取り組む様子が印象的だった。







ベアトリス・ディディエによる連携授業の様子

今日のACAC 2025年6月7日



Photo: STUDIO·2GRAM 西川幸治

アーティスト・イン・レジデンス プログラム2025「CAMP」
指名型AIR（災害ユートピア）| ACAC ベースキャンプ

2025年9月20日—21日
会場：国際芸術センター青森、カクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）











Photo: 岩根愛











アーティスト・イン・レジデンス プログラム2025「CAMP」
指名型AIR（災害ユートピア）｜テント映画祭

2025年9月27日
会場：カクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）





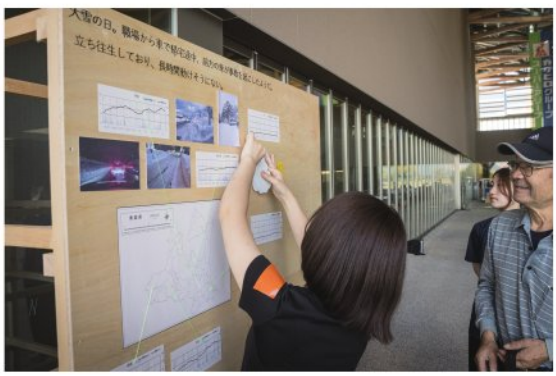












Photo: 小山田邦哉

















アーティスト・イン・レジデンス プログラム2025「CAMP」公募型+海外連携AIR

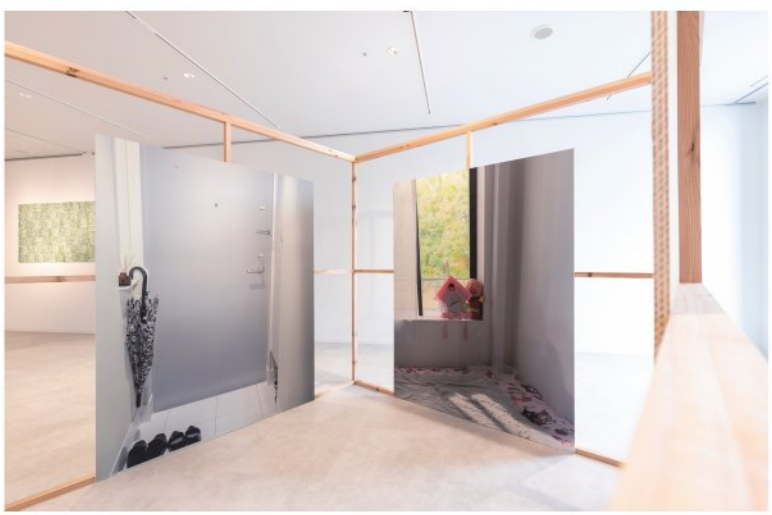
プログラム会期：2025年9月15日—12月15日
展覧会会期：2025年11月14日—29日（11月17日のみ休館）
会場：協同組合タッケン美術展示館





前谷開《このために（Practice for a living）》2025年





丹治りえ《背—景、支えるもの》2025年







Photo: 前谷開

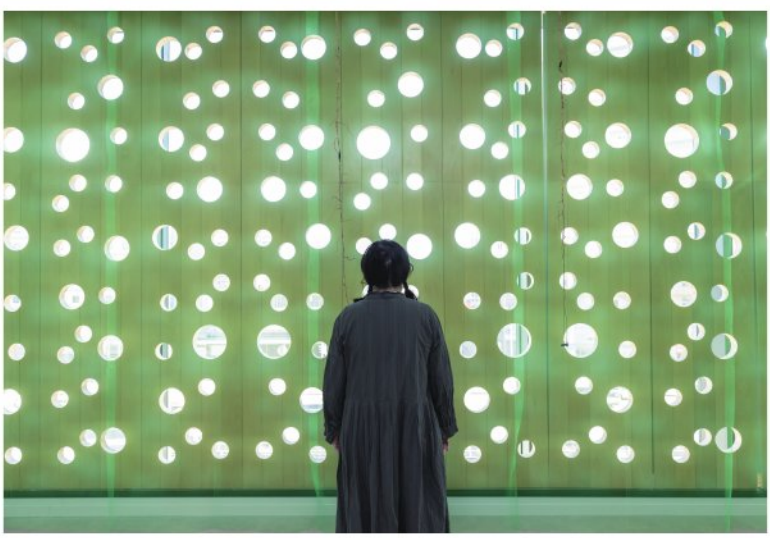






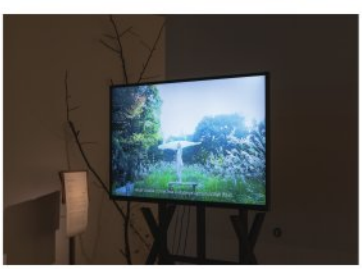


〈左〉アディ・スンドロ《私の書類の山、何かがおかしい》2025年
〈右上〉アディ・スンドロ《Belantara Data #3》2025年（部分）
〈右中〉アディ・スンドロ《Mencari dalam Lipatan #2》2025年（部分）
〈右下〉アディ・スンドロ《記憶の油跡》2025年（部分）



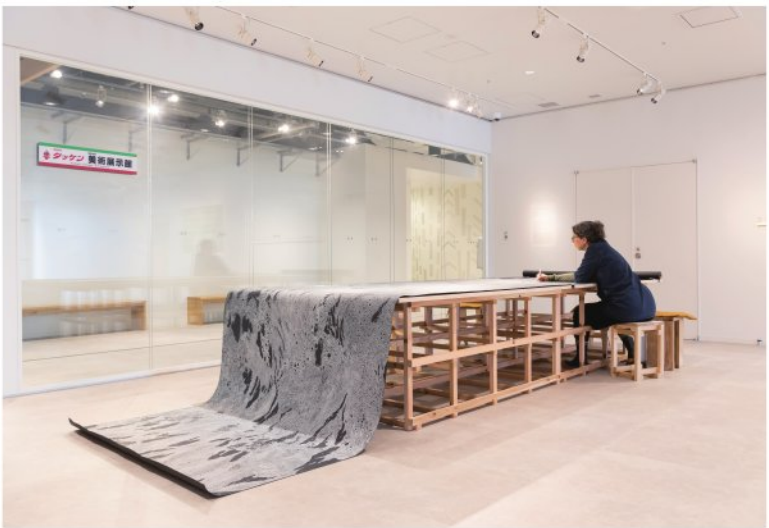






アティッタヤポーン・センポー《バッタが首を吊るのを見た》2025年

Photo: 前谷開









サマンサ・クラーク《Confluence（合流）》2025年



展示風景（会場入口より）

表現のコモンズ vol.9 李奥森 オンライントーク

開催日：2025年2月15日

Photo: Val Lee





表現のコモンズ vol.10 敷地理×イリナ·グリゴレ「身体が透明になるまで」

開催日：2025年3月9日





表現のコモンズ vol.11 松本一哉「　　を　聴く　」

開催日：2025年10月25日





Photo: 前谷開



他の表現分野から学ぶ　Photo: 冨永敦



Photo: 我満祥太

大道兄弟トーク&スライドショー&ワークショップ「自分という本をつくる」







Photo: 大道兄弟



春の桜狩り@合浦公園



カメラと写真集の会



モノクロプリントワークショップ



松本美枝子トーク



創作体験







出張創作体験「学校の妖怪を作ろう」





身体を使った子ども向けワークショップの開発



石川朝日氏による身体を使ったワークショップ@図工部会





ジョブキッズあおもり2025（主催：RAB青森放送）





関優花氏によるワークショップ

Photo: STUDIO·2GRAM 西川幸治

出張創作体験！森の学校を作ろう@青森港 暮らしのマルシェ







国際芸術センター青森（ＡＣＡＣ）は、アーティスト・イン・レジデンス（ＡＩＲ）を主要事業とするアートセンターとして、２００１年に開館した。以来20年以上にわたり、国内外のアーティスト、キュレーター、リサーチャーなど芸術表現に関わる人々の滞在と活動の場所として開かれてきた。表現者が集い、寝泊まりし、制作や展示に向き合う拠点として機能してきた施設であるが、降雪の厳しい八甲田山系の自然環境の影響もあり、経年劣化が各所で見られるようになってきていた。今後も多様な人々を安全に受け入れていくため、２０２５年度は施設の改修工事の実施に伴い、展示棟を中心に約１年間の休館期間を迎えた。この「修復とケア」の期間を迎えたＡＣＡＣにとって、今年度は大きく二つの特徴的な方向性があった。一つは、建物の修復と並行して、多様な人々を受け入れるアートセンターとしての現在地を見つめ直し、今後の運営のあり方を検討する時間としたこと。そしてもう一つは、施設が使用できない状況を契機として、ＡＣＡＣの外へと活動の場を広げ、様々な企画を展開したことだ。本特集では、こうした今年度を象徴する企画をいくつか紹介しながら、１年間の取り組みを振り返る。

指名型ＡＩＲ（災害ユートピア）

２０２５年12月８日に発生した青森県東方沖地震では、青森県八戸市で最大震度６強が観測された。さらに県内14市町村が大雪に見舞われ、２０２６年１月29日に青森県は災害救助法を適用するなど、「災害大国」ともよばれる日本において、自然災害は常に日常と隣り合わせにある。

ＡＣＡＣの運営母体である青森公立大学は、青森市の指定緊急避難場所[*1]及び指定避難所[*2]となっており、有事の際には避難者を受け入れる拠点となる。そのためこれまで同大学とは年に２度、防災訓練を実施してきた。国内外から滞在者を迎え入れる施設として、来る災害にどのように備えるべきか、また現時点でどこまで備えができているのか――その現在地を改めて確認し、アートセンターとしての備えを市民とともに考える機会を設けるべく、キュレーターの澤隆志氏[*3]を招へいし、二つの企画を実施した。

・ＡＣＡＣベースキャンプ

一つは、ＡＣＡＣでの被災を想定し、その場に居合わせた人々が寝食を共にしながら、青森市の新しい防災拠点でもあるカクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）まで歩行する１泊２日のプログラム「ＡＣＡＣベースキャンプ」だ。年齢や性別、肩書きの異なる10名の参加者とスタッフ、ゲストが参加し、事前に準備されたシナリオに沿ってプログラムが進行。ＡＣＡＣの技術員とともに倉庫や機械室を巡る安全点検を行ったほか、相澤久美氏[*4]によるトーク、深夜の読書会を通して、それぞれの災害体験や備えに対する考えを共有し合った。

・テント映画祭

翌週、長距離歩行の到達地点でもあったカクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）を会場に実施したのが「テント映画祭」だ。フィルムアーキビストのとちぎあきら氏[*5]による解説のもと、「関東大震災映像デジタルアーカイブ」の上映や、東日本大震災の津波被災者の姉妹、夫婦、消防団仲間など親しい者同士の対話を記録したドキュメンタリー映画『なみのおと』の続編『なみのこえ 新地町』の上映など、災害に関連する映像プログラムを中心に構成された。加えて、青森公立大学野坂真ゼミの学生による「能登応援ショップ」、ダンボールベッドを組み立てるワークショップ、災害関連の書籍やフリーペーパーを紹介する「コモンズライブラリー」、もしもの状況を想定した対話型ワークショップ「もしも交換所」など、多様なプログラムが並行して展開された。

いずれの企画も、ＡＣＡＣが一方的に技術や知識を提供するのではなく、市民や参加者とともに考える姿勢を重視した内容となっていた。

災害とアートセンターの関係を問い直すこれら二つのプログラムは、災害時に一時的に立ち上がる利他的なコミュニティの可能性を論じた、レベッカ・ソルニッ



テント映画祭　Photo: 小山田邦哉

トの著書『災害ユートピア――なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』[*6]に着想を得ている。その思想的背景を参照しつつも、現在進行形で問い続ける姿勢を示すため、二つの企画のタイトルにはあえて括弧を付した「（災害ユートピア）」という表記が用いられた。

公募型＋海外連携ＡＩＲ「ＣＡＭＰ」

開館以来、ほぼ毎年継続して実施しているのが公募型のＡＩＲプログラムだ。今年度は国内外から寄せられた８００件を超える応募の中から採択された４名に加え、スコットランド北海岸に位置するオークニー諸島、メインランド島の中心地の一つであるストロムネスに拠点を持つアートギャラリー／美術館であるピア・アーツ・センターの推薦による１名を合わせた計５名のアーティストを招へいした。

プログラムのタイトルとした「ＣＡＭＰ」は、一時的な居住の場や技術の訓練などを行うこと、特定の感性や信念を共有する集団、さらには歴史的にさまざまなマイノリティグループ間で共有されてきた反体制的な美学をも内包する言葉である。参加アーティストたちはそれぞれの視点からこのタイトルを解釈し、滞在制作を軸に、ワークショップやトーク、成果発表など多彩な活動を展開していった。

滞在制作・宿泊場所としては、例年同様、ＡＣＡＣの創作棟と宿泊棟を使用することができた。一方で、成果発表の会場として用いてきた展示棟は改修工事期間中であったため使用できず、今年度はＪＲ青森駅東口ビル内の「協同組合タッケン美術展示館」を会場として成果展を開催することとなった。

馬蹄型で天井高６ｍを誇るＡＣＡＣの展示空間は、これまで多くの滞在者の制作や展示に影響を与えてきただろう。しかし、市街地から距離のある立地は、来館者にとって必ずしもアクセスしやすい環境とは言い難い。そうした中、商業施設を併設する駅直結のビルで開催した本成果展には、買い物帰りに立ち寄る来場者や親子連れ、列車の待ち時間に足を運ぶ人々、隣接するホテルの宿泊客など、ＡＣＡＣで「待つ」だけでは出会い得なかった幅広い層の来場が見られた。

会期中に実施したアンケートでは「青森公立大学の敷地内にアートセンターがあることを初めて知った」「アクセスしやすい街中でも今後展覧会を開催してほしい」といった声も多く寄せられ、市街地への展開に対する期待の高まりもうかがえた。

出張創作体験！森の学校をつくろう@青森港暮らしのマルシェ

市街地への展開は、教育普及事業においても実践された。ＡＣＡＣでは毎年、小学校を対象に施設環境を活かした教育普及プログラム「創作体験」を実施している。創作棟にある全長約１００ｍの廊下いっぱいにシートを広げ、学校の机上では体験できない大型作品の制作に取り組むワークショップや、森を探索しながら野外彫刻と出合うプログラムなど、学校ごとの希望に応じて内容をカスタマイズして提供してきた。

例年、青森市内の小学２年生を中心とした児童が、夏から秋にかけて校外学習の一環としてＡＣＡＣを訪れ、プログラムを体験している。しかし今年度は、熊の出没に関する報道が相次いだ影響もあり、児童の安全面を考慮して来館を中止する学校も見られた。加えて、立地条件の特性上、大人数での来館を検討する際に交通手段の確保が課題となるケースも少なくなかった。

安全に、そしてより多くの子どもたちに創作体験を届ける方法はないか――そう検討していた折、「青森港暮らしのマルシェ」[*7]への出展相談を受けた。「りんご箱一つから参加できる多様性にみちたマルシェ」をコンセプトに、市街地で展開する同イベントにおいて、芸術ブースとしてプログラムを実施してみないかという提案であった。

施設の外から関係性を拓く機会として、ＡＣＡＣとしてもぜひ取り組みたいと応じ、当日は会場となった本町公園にて、創作体験で継続的に実施してきた葉っぱの模様をクレヨンでこすり出すプログラムを出張版として展開した。

イベントでは、公園を訪れていた親子連れに加え、過去にＡＣＡＣのプログラムへ参加した経験を持つ子どもたちの姿も見られた。新たな関係性を築くと同時に、これまで育んできた関係性を結び直すような機会ともなり、教育普及活動の新たな展開の可能性を示す実践となった。

アドバイザリー会議

20年以上にわたる活動の中で、社会状況やACACを取り巻く自然環境は絶えず変化し、運営を担うスタッフもまた移り変わってきた。こうした内外の変化を受け止めながら、アートセンターを今後も持続していくためには、運営のあり方そのものを見つめ直す機会が必要である。そうした認識のもと、外部の視点を交えながら、これまでとこれからのACACについて率直な意見交換を行う「アドバイザリー会議」を実施した。

会議には、県外でアートセンター運営に携わる実務者をはじめ、美術家、青森県内の教育関係者、デザイナー、メディア関係者など多様な背景を持つ参加者が集まった。

議論のなかでは、公募型AIRで滞在するアーティストのスケジュールが過密で、市民と交流する機会を十分に設けにくいという課題も提示された。それに対し、本滞在プログラムとは別に、青森の文化や風土を知るためのバスツアーを企画してはどうかといった具体的な提案も挙がるなど、ACACがこれまで担ってきた役割や、今後期待される機能についてフラットな意見交換が行われた。

評価軸が一様ではないアートセンターの活動においては、その存在意義や運営方針を内部のみで検討することに限界もある。本会議を通じて、外部からの評価や提案を受け取りながら、外から見たACACの現在地を確認する機会となった。

開かれたアートセンターとしてのあり方を捉え直す場として、外部有識者と対話を重ねるこうした取り組みは、今後の運営を支える基盤として継続していくことが期待されるだろう。

修復とケアの1年を経て

施設の改修工事という物理的なケアから始まった本年度は、一時的な滞在者を受け入れる施設としての運営基盤や地域への開き方を問い直し、休館期間という時間をかけてプログラムや制度そのものを点検する一年となった。そして、数々の実践を通して見えてきた新たな可能性は、私たち単独で導き出したのではなく、様々な形で関わってくださった方々との対話や協力を経て立ち上がったものであることも特筆すべきであろう。

今年度の取り組みを踏まえ、これからのACACはどのようなかたちで展開していくべきか。AIRを中心事業とする施設としての変わらない軸と、柔軟に開かれた実践――「修復とケア」の1年で得た視座を両輪として携えながら、リニューアル後の施設運営を見据えていきたい。

大黒優香
（国際芸術センター青森 アートコーディネーター）



青森港暮らしのマルシェ「出張創作体験！森の学校を作ろう」にて完成した動物たち

*1　災害が発生した場合、または発生するおそれがある場合に、その危険から逃れるための避難場所として市町村長が指定する施設や場所。現象の種類ごとに安全性等の一定の基準を満たしているかどうかを踏まえて指定されている。なお、青森公立大学は「大規模な火事」および「火山現象」については、指定緊急避難場所の指定を受けていない。

*2　災害の危険が生じた際に避難した住民等を、その危険性がなくなるまでの間滞在させる、または災害により自宅へ戻れなくなった住民等を一時的に受け入れるための施設として、市町村長が指定する場所。

*3　2000年から2010年までイメージフォーラム・フェスティバルのディレクター。現在はフリーランスのキュレーター。あいちトリエンナーレ2013、青森県立美術館、長野県立美術館などと協働キュレーション多数。「都市防災ブートキャンプ」（鉄工島FES、2017-2018）、「めぐりあいJAXA」（2017-）、「たまき -eastern film promises-」（京都市京セラ美術館、2023）、「ｽｳｪｰﾃﾞﾝ ｻﾌﾞｶﾙﾁｬｰ」（羽田イノベーションシティ、2024）、「生活者としての被爆」（イメージフォーラム、2025）など企画／プロデュース。

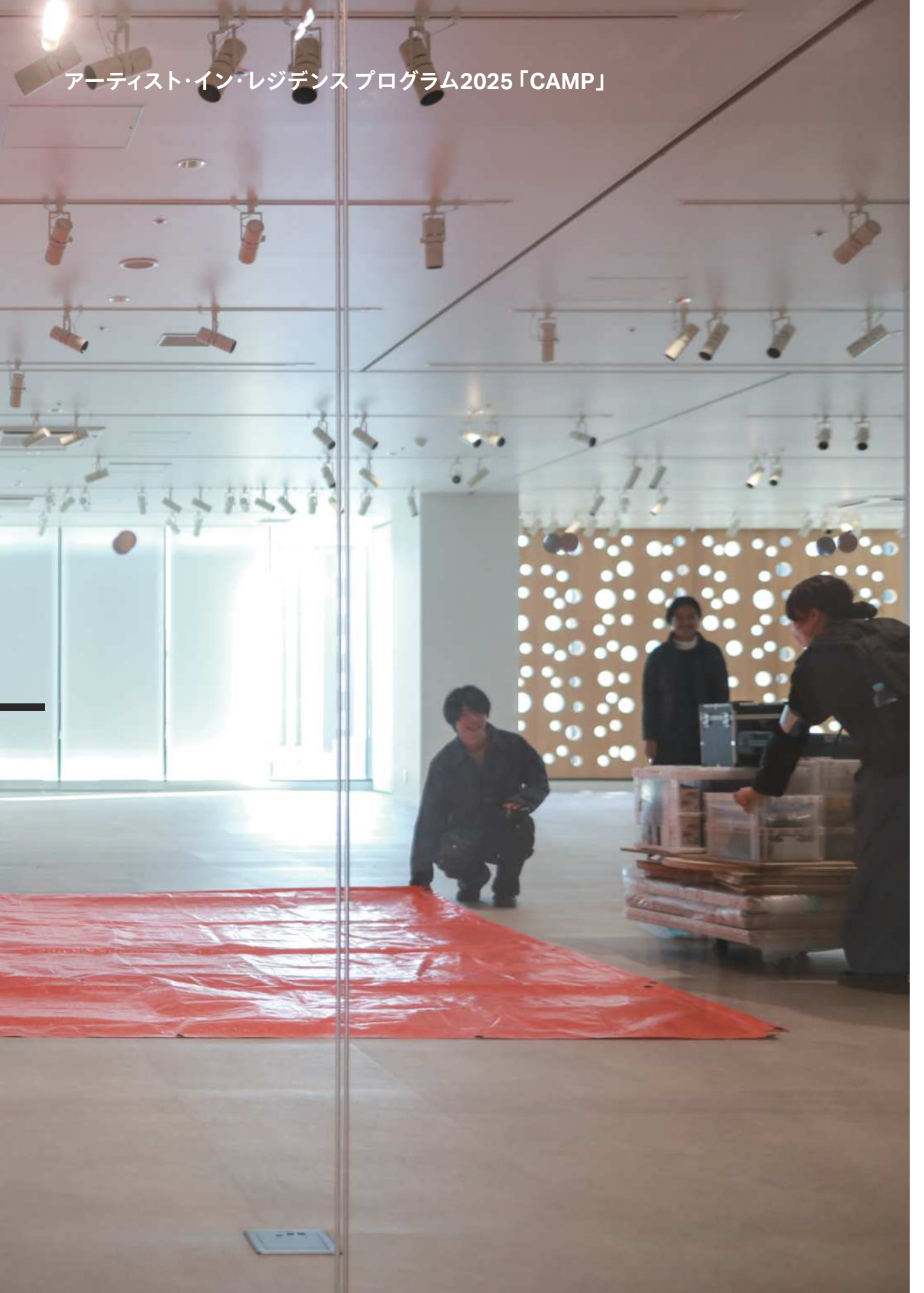
*4　建築家・編集者・映画プロデューサー・コンサルタント。建築設計事務所を軸に雑誌・書籍・新聞の編集、映画プロデュース、地域のアートプロジェクト、災害支援・中間支援など、チームで取組むものづくりに携わる。NPO法人みちのくトレイルクラブを立ち上げ現在常務理事兼事務局長。silent voice、RQ災害教育センター、自然公園財団、マザー・アーキテクチュア等の理事を兼務。

*5　フィルムアーキビスト。『月刊イメージフォーラム』編集長などを経て、2003年より東京国立近代美術館フィルムセンター（現・国立映画アーカイブ「NFAJ」）研究員として、映画の収集・保存・復元・アクセス対応に従事。退職後は、NFAJの配信サイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」や「フィルムは記録する」の制作に関わるとともに、（一社）日本映像アーキビスト協会の会長を務めている。

*6　レベッカ・ソルニット著、高月園子訳『災害ユートピア――なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』（亜紀書房、2010年）

*7　青森港新中央埠頭から柳町通り、青森市役所本庁舎に至る最大約1.4kmの公共空間を舞台に、2025年10月に始動したマルシェ。青森の豊かな農林水産物をはじめ、飲食、工芸、クラフト、アート、映画、演劇、音楽など多彩な分野が集結し、青森港新中央埠頭、柳町通り、本町公園、青森市役所本庁舎の各エリアで展開された。

アーティスト・イン・レジデンス プログラム2025「CAMP」



戴周杰（たいしゅうき）
八戸工業大学感性デザイン学部 助教

境を越えてから、そして島になる

2025年度、国際芸術センター青森（ACAC）は施設の大規模改修に伴い、展覧会などに使用される展示棟を含めて休館に入った。そのため、今年度のAIRプログラムは、JR青森駅東口ビル内の協同組合タッケン美術展示館を成果発表の場とし、AIRの成果展としては開館以来初めて、いわば"アウェー"の会場で開催されることとなった。展覧会タイトルが示すとおり、今期の参加アーティスト5名による展示は、青森駅前に一つの巨大な「CAMP」が出現したかのようにも感じられる。

この成果展に先立ち、9月下旬にはACACにて一泊二日を過ごす「ACACベースキャンプ」と、青森市中心部に新設された防災拠点・カクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）で行われた「テント映画祭」を組み合わせた複合プロジェクト「（災害ユートピア）」が開催され、筆者も一参加者としてこれに参加した。改修工事による休館中だからこそ可能となったACACベースキャンプでは、「もしACACで被災したら」という仮定のもと、スタッフやゲスト、青森公立大学の学生を含む参加者全員が、ACAC館内でキャンプを行い、避難訓練を体験するという趣旨が掲げられていた。

去る2024年には能登半島地震が発生し、来たる2026年には東日本大震災から15年を迎える。二つの大きな震災の体験と記憶の境に立つかのような年の瀬、12月8日には青森県東方沖を震源とする地震が発生し、筆者が居住する八戸市では最大震度6強を観測した。


テント映画祭 *


*


ACACベースキャンプ *

中国大陸出身で、これまで大きな地震を経験したことのなかった筆者にとって、至近距離で地震に直面したこの体験は、強烈な恐怖と不安を伴うものだった。そのような状況下で本稿を執筆すること自体が、ある特別な意味を帯びていたのかもしれない。

ACACの広い展示室にダンボールベッドや寝袋を並べ、参加者とともに一夜を過ごす経験は、おそらく最初で最後になるだろう。クマの出没が懸念され、単独で屋外のトイレに行くことすら制限されるという、限界に近い生活環境のなかで、年齢も国籍も職業も異なる参加者たちは、不思議な親密さを伴った一つのコミュニティを形成していった。その瞬間、レベッカ・ソルニットの著書から生まれた「災害ユートピア」という概念[*1]に、身体的な実感をもって共感できたような気がした。

「ACACベースキャンプ」の参加者の一人が、今期の公募型AIRに採択されたアーティスト、前谷開である。キャンプの翌日、参加者全員でACACを出発し、街中のカクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）まで歩いたのだが、前谷はキャンプ用品一式に加え、写真制作のための一眼レフカメラや三脚など、途方もない量の荷物を詰め込んだ巨大なリュックを背負い、まるで修行者のように最後まで歩き続けていた。

本AIRの参加アーティスト5名には、ある共通点があることに気づかされる。それは、「島」との深い関わりである。前谷は、島国・日本の主要4島のなかでも最も小さい四国島の愛媛県出身で、穏やかな瀬戸内海は、常に見慣れた原風景だという。丹治りえは福島県出身だが、大学院進学を機に沖縄県へ拠点を移し、以降も本土外の地である沖縄に暮らし、独自の「シマ」[*2]社会に身を置いている。アディ・スンドロは、東南アジアの島国・インドネシア出身で、同じ島国である日本に滞在するなかで、両国の文化的・社会的差異への好奇心を糧に、身近な素材を用いた制作を行っている。アティッタヤポーン・センポーは、タイ東北部イサーン地方の出身で、中央文化圏から周縁化され、言語や民族の点でラオスに近いとされながらも、どちらにも還元されない独自の文化を育んできた、いわば「陸の孤島」とも言える地域を拠点としている。サマンサ・クラークは、イギリス北部スコットランドのオークニー諸島を拠点に、島々を取り巻く風や水といった自然要素に呼応する作品を制作している。

大陸国家において海はしばしば天然の障壁と捉えられるが、島国においては、むしろ海こそが道となる。それぞれ異なる「島」から、本州島最北端の地である青森に集ったこの5人のアーティストの出会いは、偶然というよりも、ある必然だったのかもしれない。

一方、戦後80年を迎える2025年は、遠くはパレスチナやウクライナの戦禍から、近くは台湾問題をめぐる日本と中国の緊張関係に至るまで、戦争という人的災害が常に世界の各地で進行している年でもある。分断が深まる世界は、それぞれが孤立した島のようにも見え、そのなかで故郷（国／家）を失った難民たちは、やむを得ずキャンプに身を置き、国境を越えて安全な場所を求め続けている。そうした光景を重ね合わせると、地球そのものが一つの巨大なキャンプとなりつつあるかのようにも思えてくる。このような時代背景が幾重にも折り重なるなかで、「CAMP」をタイトルに掲げた今期の公募型AIRの成果展は、さまざまな意味において特別な展覧会であったと言えるだろう。

前谷の作品は、「（災害ユートピア）」プロジェクト終了後の9月下旬、12日間をかけて津軽半島を徒歩で巡った経験をもとに制作されている。道中で目にした風景や出会った人々、さらにはその風景のなかに立つ自らの姿を写した写真群が、陸奥湾沿岸部に点在する朽ちた小屋を想起させる落枝を用いた構造体に、時間の流れに沿うかのように配置された巨大なインスタレーションである。展示の一角には、徒歩の途中でテントを張る様子を記録した映像作品もあり、そこでは指にはめられた結婚指輪の存在が印象的に映し出されていた。それは意図的な演出であるようにも思われる。前谷は、ACACの公募採択を機に会社員としての仕事を辞め、単身で青森へ向かったが、その決断の背後には妻の後押しがあったという。巨大なリュックを背負う前谷の姿は、「家」という重要なものをも同時に背負っているかのようであり、そのことが作品に秘められた温度として、確かに伝わってきた。

展覧会最終日には、前谷によるパフォーマンスにも立ち会うことができた。パフォーマンスのタイトル《歩く、眠る》は、「移動／越境」と「国

／家」という二重の概念を内包しているようにも思われる。会場となった旧ユースタイルは、また別の意味で「CAMP」を思わせる建物であり、日が沈むにつれて、前谷は身にまとっていた衣服をすべて脱ぎ、徒歩で巡った津軽半島の写真群を自らの身体に投影していった。身体はキャンバスであり、スクリーンでもあった。静まり返り、闇に包まれていく会場のなかで、筆者の脳裏には、初めて前谷と出会った「ACACベーススキャンプ」、そして地震によって停電した部屋での記憶が重なってよみがえってきた。

丹治は、三沢市や六ヶ所村など青森県上十三地域を中心にリサーチを行い、そこで出会った人々の記憶や、リサイクルショップで収集した日用品などを素材として制作を行った。それらは、一見するとどこにでもありそうな都市の居住空間のように展示されながらも、実在の場所や人々と切り離された形で可視化されている。丹治の拠点である沖縄県と同様、米軍基地の存在が大きな比重を占める三沢市は、基地との共存によって成立してきた街とも言われる。一方、原子燃料サイクル施設を多数抱える六ヶ所村は、国家主導の巨大開発計画である「むつ小川原開発計画」[*3]の中核を担ってきた地域である。軍隊、基地、政府、国家権力――そうした複雑な力学が交錯する土地のアイデンティティを、丹治は丹念な調査によって掘り下げていく。誰かが暮らしていそうでありながら、誰の家とも特定できない生活空間として立ち現れる作品は、上十三地域と沖縄、それぞれの地で人々が問い続けてきた「他者」と「自己」の境界に、静かに迫っているように思えた。

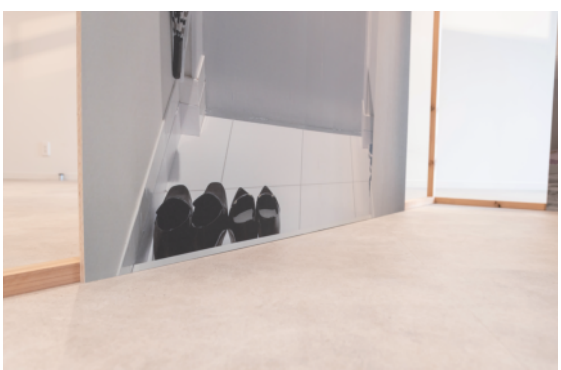
スンドロは、東南アジア最大の島国インドネシアから、東アジアの島国である日本へと移動しながら、両国におけるプライバシー意識や、個人情報と公共空間の境界を探っている。コンビニエンスストアで購入できる揚げ物の包装紙という、誰にとっても身近な存在に着目し、それを専門領域である版画へと展開する。反復的で一見シンプルな構成のなかに、大量生産と消費によって生み出される膨大な情報の氾濫、そしてそれに翻弄される現代社会における「私的」と「公的」の境界が、鮮やかに浮かび上がる。個人情報の保護を重視する日本と、それとは対照的なインドネシアの状況をスンドロは語る。



前谷開パフォーマンス「歩く、眠る」



前谷開《このために(Practice for a living)》2025年





丹治りえ《背―景、支えるもの》2025年(部分)

監視社会へと急速に向かう現代において、プライバシーの定義が揺らぐなか、彼の作品はその検証のための一つのサンプルとなっている。また、揚げ物を歩きながら食べるという行為は、日本とインドネシア双方で共有される日常的な風景であり、加速する社会における「移動しながら生きる」生活様式として、キャンプ的な身体感覚をふと想起させる。

センポーの作品からは、故郷であるタイ東北部イサーン地方への深い愛着が感じられた。イサーン地方は、タイ中部とラオス、カンボジアに挟まれた古来の農業地域であり、全国人口の約3分の1を占めるにもかかわらず、現在も最も貧困な地域の一つとされている。バンコクを中心とする中央文化圏とは異なる歴史を歩んできたため、長年にわたり排除や差別の対象ともなってきた。この土地に積層する歴史の変遷と、その地中深くに潜むイサーン固有のアイデンティティの一端を、センポーの作品は雄弁に語っている。青森県における豊年祭「虫送り」[*4]という津軽の儀式との共通性を見出したとき、両国の「東北地方」を結ぶ、思いがけない接続点が浮かび上がった。また、日本に出稼ぎに来たタイ人労働者の記憶を手がかりとする映像作品は、キャンプと移民というテーマの深い関係性を、具体的な像として提示していた。

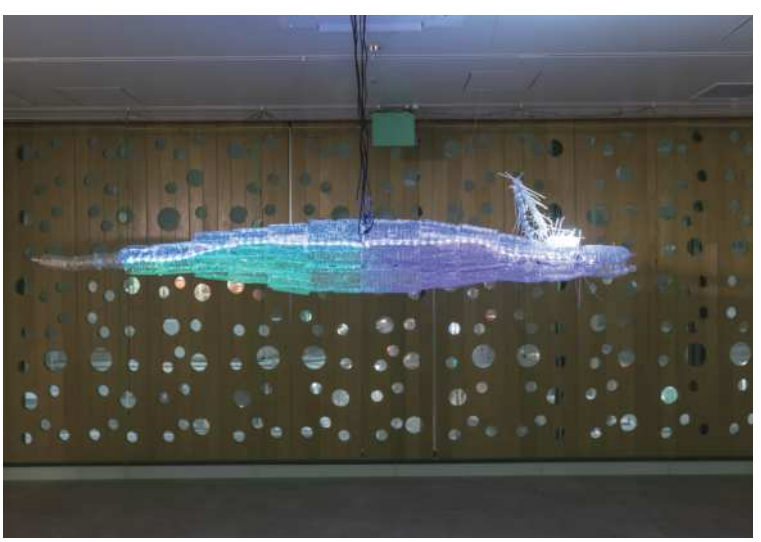
クラークの作品は、タイトル《Confluence（合流）》が示すとおり、一貫して「水」というモチーフへの関心に貫かれている。泡のようにも見える円を、巨大な絵巻物を思わせる紙面に繰り返し描くことで、やがてそれらは川や海の



アディ・スンドロ《Belantara Data #3》2025年（部分）



〈右〉アディ・スンドロ《Mencari dalam Lipatan #2》2025年（部分）
〈左後〉アディ・スンドロ《私の書類の山、何かがおかしい》2025年





アティッタヤポーン・センポー《バッタが首を吊るのを見た》2025年

水面として立ち現れる。参加型の作品として、来場者一人ひとりが円を描く行為に関わることで、さまざまな思いが重なり合い、無数の円＝泡が合流していく。クラークの作品に触れるたび、中国春秋時代の思想家・老子による「上善若水」*5という言葉が思い起こされる。水は自己主張をせず、低きに流れ、どのような器にもその形を合わせる。一方で、円を描き続けるという瞑想的な行為は、小さな動きがやがて大きな力となる可能性を内包しており、「石の上にも三年」ということわざをも連想させる。

成果展が閉幕した翌日には、ACACにてクラークによるパフォーマンス「水を返す」が行われた。会場に展示されていた、世界各地から集められた水をすべてACACの池に注ぎ、新たな循環を生み出すパフォーマンスである。さまざまな思いを宿した水が池に注がれ、波紋が広がり、やがて遠くへと流れていく様子を、スタッフや参加者とともに見守りながら、人と水、そして島と海との共生関係について、改めて考えさせられた。

パフォーマンスが終わる頃、池の背後にそびえる展示棟では、改修工事の進行に伴い、足場が徐々に撤去されつつあった。新生ACACの姿が、ついにその輪郭を現し始めていた。

*1　アメリカ出身の著作家レベッカ・ソルニットが、著書『災害ユートピア』（2009年）において提唱した概念である。災害発生後、被災者同士の利他的な行動を通じて、一時的な共同体が形成される現象を指す。

*2　沖縄の地域社会における「シマ」とは、単に「島」を意味する語ではなく、地域、集落、故郷、共同体といった重層的な意味を持つ概念である。沖縄方言（しまくとぅば）では、「出身地」や「村落」を指す言葉として用いられている。

*3　1960年代末以降、青森県上北郡六ヶ所村を中心とする地域において、石油化学コンビナートや製鉄所を中核とした大規模臨海工業地帯の整備を目的として構想された開発計画である。「世界最大の開発」とも称されたが、コンビナート建設は実現せず、後に原子力関連施設が進出することとなった。

*4　津軽地方では、田植えが終わると「サナブリ」と呼ばれる農休みの時期に、「虫送り」と呼ばれる行事が行われる。これは、農作物に付く害虫の駆除を主な目的とし、集落にとっての災厄を送り出すことで、豊作と村内の安全を祈願する伝統行事である。

*5　老子の著した『道徳経』に由来する言葉であり、「上善如水（じょうぜんみずのごとし）」とも表現される。最高の善は水のようなものであるという意味を持ち、柔軟性や謙虚さ、そして大きな度量を備えることの重要性を示している。

戴周杰（八戸工業大学感性デザイン学部 助教）

1993年中国湖南省生まれ。2015年に北京電影学院広告監督専攻卒業後に来日。東京藝術大学大学院映像研究科に在学中、監督・編集を担当した作品が国内外の映画祭にノミネート。東京都写真美術館映像部門インターンおよび第12回恵比寿映像祭アシスタントを経て、2020年より木下惠介記念館・浜松市鴨江アートセンターに勤務。上映プログラムや映画資料展覧会の企画、映像系ワークショップを担当。仕事の傍ら社会人院生として静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科でアートマネジメントと文化政策を学ぶ。2025年より現職。専門は映画制作、アートマネジメント、映像アーカイブ。

〈左〉サマンサ・クラーク《Confluence（合流）》2025年、ドローイング（部分）

Photo: 前谷開（pp.069-075）｜岩根愛（写真右下に•）｜小山田邦哉（写真右下に*）





指名型AIR（災害ユートピア）
ACACベースキャンプ



ACAC ベースキャンプ
参加者レポート









施設の改修工事に伴い休館期間を迎えた国際芸術センター青森（ACAC）では、この時間を施設の足元を改めて見つめ直す機会と捉え、キュレーターの澤隆志氏を共同企画としてお招きし、災害をテーマとした2つのイベントを実施しました。
その一つが、2025年9月20日—21日に開催した「ACAC ベースキャンプ」です。本企画は「もしもACACで被災したら」という想定のもと、その場に居合わせた参加者とACACスタッフ、ゲストがともにACACで一晩を過ごし、翌日には青森市の新しい防災拠点でもあるカクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）まで、約10kmを歩行する1泊2日のプログラムとして構成されました。
ゲストに相澤久美氏を迎えたトークをはじめ、夕食作りや寝床作り、真夜中の読書会、そして長距離歩行へと展開した本企画は、参加者にとってどのような体験となったのでしょうか。ここでは、プログラムに参加された方々から寄せられたレポートから抜粋した一部を手がかりに、当日の様子を振り返ります。

小田島徹
あおもりいのちの電話　32期生

相澤さんのお話の中で、みちのく潮風トレイルの参加者が被災者の話を聞いて防災意識を高めたという話を聞きました。自分は3.11以降、毎年その時期に特集報道を見て、防災を意識したつもりになっていたことに気が付きました。実際には、ハザードマップを確認したり、家の浸水時に罹災証明書を発行してもらうために通常時の家の外側を撮影しただけで、ニュースで見るような水や食料などをまとめた防災バッグは用意していませんでした。今回の体験を通して、情報を得るだけではなく、実際に話を聞いたり身体で体験することの有効性を実感しました。今回をきっかけに、防災グッズとして使える寝袋を手に入れる事ができ、ありがたかったです。
印象深い瞬間は、施設見学中に雨が激しくなった時のことです。周りの状況に気が付かずにいたところ、相澤さんが「傘に入れて貰っていいですか？」とおっしゃったことで、助け合いの姿勢に気づきました。その後のトークで、「傘を差し出して入れてくださった」とお話されていた事から、スマートで素敵な方だと感じ、見習いたいと思いました。更に、お話の中で傾聴の事をおり混ぜてくださって、初対面の参加者として嬉しかったです。防災時の助け合いのありがたさに気付きました。





伊多波麻衣子

八戸ポータルミュージアム はっち　学芸員

震災を経て、防災には多少備える意識は出てきたものの、いろんな災害があることを考えると何が本当に備えとなるのか、正直わかりませんでした。そんな中で、相澤久美さんの、みちのく潮風トレイルを身ひとつで歩くことで最低限自分が生きていくために必要なものがわかるというお話しがとても興味深かったです。まだ想像することしかできない災害に備えて、ついついあれもこれもとものを揃えがちでしたが、人一人が移動と共に持ち運べるものの量はたかが知れているなと気付かされました。今居住している八戸市では、みちのく潮風トレイルは観光資源として認知されているものの、震災や防災について考える装置のような役割（歩くことで震災を記憶し、災害から学び、そして傷ついた被災地の癒しにもなる）があることは広く知られていません。八戸市職員として何らかの情報発信の必要性を感じましたし、できることは形にしていきたいと思いました。





西塚務

八戸市　会社員

カレーはひとりで作るのが面倒でいつもレトルト頼りですが、工程を手分けするとあっという間にできてしまうことに驚きました。参加者はみんな「おとな」でしたが、幼児がいればカレーは甘口、お年寄りがいれば介護食を用意する必要があるかも。そういえば私の家の近くではインドネシアからの技能実習生が集団生活をしていて、彼らは豚肉を食べないかもしれない…。人によって「食」は変わる場合がありそうです。

20年ほど前まで青森市に住んだことがあり、ACAC や横内地区、観光通り沿いの土地勘があるつもりでいましたが、幹線道路から脇道に入ると昔からの集落や水田がまだまだ残っていることを再発見しました。田んぼのあぜ道から見慣れたお店や問屋町、住宅街が見えるのは不思議な感じがしました。視点を変えてみるって大事ですね。

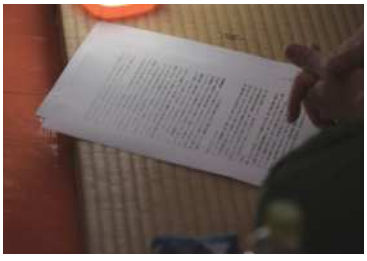


【2026年1月追記】

ACAC ベースキャンプの後、12月8日に大きな地震がありました。年末に八戸市美術館でワークショップコーナーのお手伝いをしていると、3週間前の地震のことを話している子どもたちが。東日本大震災を経験していないこの子たちにとって、夜遅くに家が揺れつづけた体験は、強く記憶に残る出来事だったかもしれません。体を動かすこと、描いたり話したりすることで怖かったことや辛いことを吐き出し、元気を取り戻してほしいですね。



蟻塚唯衣



読書会を通して参加者それぞれの経験や感覚を共有したとき、自身の体験した東日本大震災への記憶があまりにも断片的かつ今の肉体から離れた場所にあることを感じた。同じ青森でも、八戸での被災状況や、海外から見た震災の話を私自身が受け取る中で、どこかで人が亡くなっても、それは偶々自分じゃなかっただけで、運がよかっただけで、結果は如何様にも受け取られ、その物語は変わっていく。その後を生きている私たちが、震災に対してどのように向き合って、かわして、対策していくかが求められているのだと感じ、今回のキャンプを今の時期に経験できたことがまず貴重だった。



永井寧

人生で初めてダンボールベットで一晩過ごしたことがとても貴重な経験になった。ダンボールベッドにマットを敷き、寝袋で寝たが、寝づらいということはなく、ぐっすりと眠ることができた。試しに床にも寝袋で少し横になってみると、床は固く、ダンボールベッドの重要性がよく分かった。マットが安眠のために重要な役割を果たしていると感じた。
今回のベースキャンプでは、年齢が異なり、様々なバックグラウンドの人たちと一緒に参加することができてとても良かったと感じる。普段は、同じ世代の人たちと話すことが多いが、他の参加者の方たちとお話をして、交流することができて良かった。





鳥ちゃん
学生

相澤さんと澤さんの対話を聞いて、知らない分野のお話を、対面で聞くことの新鮮さを感じました。現代社会では饒舌に発信する人が多いが、向き合っている相手の話を、深く聞くことができることの重要性が、対照的に見過ごされているという指摘が、私には改めて考えさせられた部分です。
2日目は素晴らしい朝食を用意していただき、感動しました。朝食プレート・豚汁・おにぎり・デザート。横長のテーブルで、皆で美味しい食事をする幸福、豊かさを感じられました。調理を担当してくれたスタッフに、直接お礼を言えたことが、自分には重要なことでした。



前谷開
アーティスト

避難訓練とは一種の上演であると、企画者の澤さんが話していた。であれば、上演にあたっての取り決めが、もう少し強く提示されてもよかったのではないかとも思う。困難に直面して起こったかもしれない協働が、台本的な進行によって、わりと手軽に乗り越えられてしまうような場面もあった。実際ならもう少し疑って、他の選択肢についても考えなければならない場面もあったと思う。しかし、詳しいことはよくわからないまま動かされてしまう状況もまた、それこそがリアルな避難訓練だったのだと考えることもできる。それでも、寝る場所や避難先についてなど、議論が起きる可能性はあったし、ひとつの流れを変えてしまうような提案をしていたらどうなっていただろうかと後になって思う。
ACACが避難先になる可能性についても想像した。被災した人々をアートセンターは受け入れられるだろうか。このようなオルタナティブな避難訓練が、ACACで毎年行われる企画になればいいのではないかと思う。

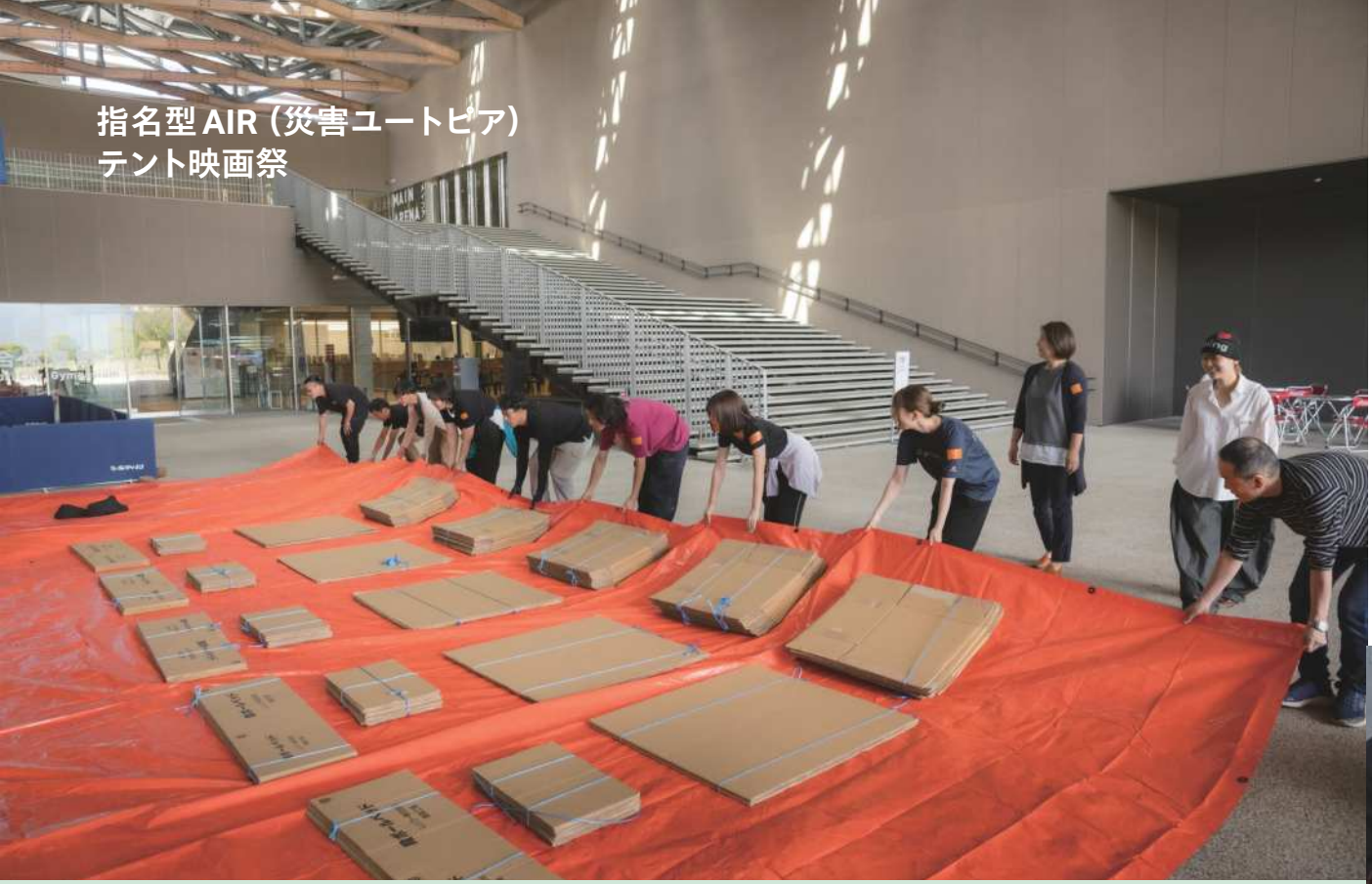


大黒優香
ACAC アートコーディネーター

ACACは主催者ではあるが、防災の専門家ではない。だからこそ（無責任に映るかもしれないが）、「共に学び、共に考える」という姿勢で、備えの不十分さをオープンにし、相澤さんのトークからヒントを得ながら、読書会や長距離歩行を通して考えていくという構成は、「自分たちで牽引するのではなく、市民や来館者など様々な方と共にこれからを歩んでいきたい」という現在のACACのスタンスをよく表していたように思う。
今回の「歩く」という体験は、体力的な備え以上に、「自分の足で10km歩けた」という成功体験、会話をしながら歩くことで時間があっという間に過ぎた感覚、見慣れた目印を見つけた時の安心感など、心の備えにつながる感覚をもたらしてくれた。この経験そのものが、有事の際に感じるどうしようもない無力感に、わずかでも希望の光を灯してくれるのかもしれない。

Photo: 岩根愛（pp.076-080）

指名型AIR（災害ユートピア）
テント映画祭



学生スタッフに聞いてみた！

災害をテーマとした企画「（災害ユートピア）」の一環として、9月27日（土）にカクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）にて「テント映画祭」を開催しました。

当日は災害にまつわる映像の上映に加え、さまざまなブースを展開しました。ACACを離れて開催した映画祭は、準備段階から当日の運営に至るまで、多くの学生スタッフの協力を得て実現したものです。

ここでは、さまざまな形で「テント映画祭」を支えてくれた学生の皆さんに、参加のきっかけや印象に残った出来事などについてお話を伺いました。

聞き手：
原田桃望（ACAC学芸員）
大黒優香（ACACアートコーディネーター）

新井奏鳳玖さん（青森公立大学3年生）

大黒　テント映画祭に参加しようと思ったきっかけと担当したことを教えてください。

新井　はじめはゼミの先生に紹介してもらいました。私はもともとキャンプが好きで、テントも好きですし、休みの日には映画もよく観ています。自分の好きなもの同士が組み合わさったら、絶対に面白いだろうと思い、参加を決めました。映画祭では「もしも交換所*1」の準備を担当しました。「もしも交換所」は、何をするかが決まっていない、本当にゼロからのスタートでした。何をするのか、どこから手を付ければいいのか分からず、議論が息詰まることもありました。ちょうどその頃、大学の授業でコミュニケーションや意見交換の方法について学ぶ機会があり、それを応用しながら、まずは自分からアイデアを共有し、意見を出しやすい雰囲気をつくることを意識しました。「もしも交換所 PART1」では、有事に自分ができることを日常の延長で考える、というコンセプトを立てましたが、メモに書いて貼り出し、考えを「見える化」する方法を提案できたのは良かったと思っています。

大黒　最初にアイデアを出すのは心理的なハードルも高いと思うのですが、その中で積極的に意見を出してくれたのは本当にありがたかったです。また、9月上旬には「青森みんなの防災フェア2025*2」への出展に向けて、テント映画祭を紹介する学生によるPR動画も制作してくれました。

新井　動画サイトを無心で観るのが好きで、自分でもいつか作ってみたいと思い、中学生の頃から動画制作をしてきました。ある程度の編集スキルはあったので、自分の得意なことを活かせるならと思い、「やらせてください」と手を挙げました。人手が足りていなさそうだと感じたこともあり、自分にできることがあればやろう、という気持ちでした。

原田　8月末に学生さんにインタビューを行い、9月初めに動画の編集をお願いしましたよね。その頃は業務も立て込んでいて、「この企画は本当に意味のあるものになるんだろうか」と気持ちが落ち込んでいた時期でした。ですが、完成した動画を見て、こんな思いをもって協力してくれる人がいるんだと改めて実感して、「こ

れは頑張らねば」と思えたんです。本当に救われました。

新井　自分が編集した動画で人の心を動かしたいと思っていたので、よかったです！

大黒　本当に心を動かされました。準備に携わる中で、今後に活かせそうなことがあれば教えてください。

新井　高校の文化祭など、これまでも企画に関わる機会はありましたが、どれもある程度の型が決まっているものでした。今回のテント映画祭は、企画自体がまっさらな状態から始まったので、企画の立ち上げ方や進め方を学べたことが大きな収穫だったと感じています。全体像が見えない中で、どのようにアイデアを出し、企画を詰めていくのか、どれくらいの期間が必要なのか。そうした点も含めて考えていかなければならないことを学びました。ACACのお二人が横に並んで歩いてくれていたからこそ、安心して一歩ずつ前に進めたという感覚があります。



永井寧さん（青森公立大学3年生）

大黒　テント映画祭に参加しようと思ったきっかけと担当したことを教えてください。

永井　大学のゼミの先生からイベントを紹介してもらい、もともと防災に関心があったこともあって、面白そうだなと思い参加しました。テント映画祭では「能登応援ショップ*3」を担当しました。9月上旬には、野坂真先生のゼミ生と一緒に出張輪島朝市*4を訪れ、出店者の方から商品の魅力やおすすめの食べ方を伺いながら、商品の仕入れから販売までをお手伝いしました。被災後、まだ復興が十分に進んでいない状況のなかで、ショッピングセンターの一角に出張輪島朝市として出店されている様子を見て、大変な状況の中でも、前を向いて商品を販売する姿がとても印象に残っています。

大黒　現地の様子を見てお話を聞いた上で迎えた「能登応援ショップ」ですが、当日はどのようなことを意識して運営しましたか？

永井　来てくれた方に輪島朝市の商品の良さを知ってもらうこと、そして能登の被災地のことに少しでも関心を向け続けてもらえるきっかけになればと思いながら運営しました。せっかく現地を訪れ、実際に試食をしたり、おいしい食べ方を教えてもらったりしていたので、その魅力を伝えられるよう工夫しました。例えば、輪島サイダーは2種類の味を用意していたのですが、実際に飲んでいたからこそ、味の細かな違いを伝えることができました。「両方ください！」と言って購入してもらえたときは、とても嬉しかったです。



大黒　私も当日、味の違いの説明を受けて2本購入しました。とてもおいしかったです！永井さんは、ほかにも「ダンボールベッド組み立てワークショップ*5」の運営も担当してくれましたね。

永井　はい。参加者の方に向けて組み立て方を説明しながら進めたのですが、ベッドを1台完成させると皆さんすぐにコツをつかみ、2台目以降は驚くほどの速さで完成していったのが印象的でした。いざ災害が起きたとしても、この方々なら大丈夫だと感じました。

原田　永井さん自身の災害に関する研究にも私は興味があります。永井さんはACACベースキャンプも参加してくださったのですが、これら2つの企画を経験して、何か研究に活かせそうなことはありましたか？

永井　私は、配慮が必要な方の避難行動や避難所生活に関心があり、ゼミでの研究テーマとしています。2つのイベントを通して、まったく知らない人と関われたことは、とても大きな経験でした。避難所の運営は、自分一人や限られた人だけでは成り立たない。その場で居合わせた人と協力して、特定の人に負担が集中しないよう工夫することで、赤ちゃんを連れたお母さんや高齢者、障がいのある方など、さまざまな人がより安心して過ごせる避難所になるのではないかと感じました。多様な背景を持つ人たちをうまく巻き込んでいけるといいな、と2つのイベントに参加して改めて思いました。

原田　今後の研究に少しでも活かせることがあればと思っていたので、そうした視点に繋がったと聞けて、とても嬉しいです。



山田結子さん（青森公立大学1年生）

原田　テント映画祭に参加しようと思ったきっかけを教えてください。

山田　企画運営や空間設計に興味があったこ

と、そしてアートに関わりたいと思っていたことがきっかけでした。大学の中にアート施設があるのはとても貴重なことだと感じていて、いつか関わってみたいと思っていたので、これはチャンスだと思い参加を決めました。

原田　美術大学ではない、大学にアートセンターがあるのは、なかなか珍しいですよね。テント映画祭では「コモンズライブラリー*6」を担当してもらいました。当日は本のレイアウトもお願いしましたが、工夫した点があれば教えてください。

山田　お客さんがどのように、どんな順番で本を手に取るかを考えながら、レイアウトを決めました。本を置くテーブルにプチプチが敷かれていたり、本の紹介文の字体が少し違うだけで印象が大きく変わったりするなど、そうしたアイデアに触れられたのは勉強になりました。

原田　テキストのフォントサイズなどは見る人や場所を意識して変えていたので、そこに注目してもらえて嬉しいです。準備から当日まで関わってきて、特に印象に残っていることはありますか？

山田　最初は、おおよそのイメージをＡＣＡＣのお二人から共有してもらい、そこからみんなで意見を出し合いながら、少しずつ形にしていく。企画が形になるまでの過程そのものが、とても大きな学びでした。これまでは、一人で計画を立てて完成させる方が簡単で早いと思っていましたが、チームで進めることで、集まった人数分だけ面白いアイデアが生まれたり、自分にはない視点を得られたりすることに気づきました。チームで進めることの良さを実感できたと思います。これまで、複数人で何かを進める場面では、他の人にどう頼ればいいのか、どう指示を出せばいいのか悩むことも多くありました。ですが今回、ＡＣＡＣのお二人の指示の出し方やお願いの仕方を間近で見て、自然と「やってみたい」と思わせてくれる雰囲気があることに気づき、そのことも勉強になりました。



原田　学生さんは学業がある中で、どのように関わってもらうのが良いか大黒さんと話しながら進めていたので、そんな風に受け取ってもらえていたのは、とても嬉しいです。

大黒　山田さんは話し合いの中でも、柔軟にアイデアを出してくれましたよね。本を選ぶという行為自体にゲーム性を持たせようとしたり、何事も面白がりながら設計しようとしてくれていた姿が印象的でした。

山田　現実味のないアイデアを出すのも得意なので、いろいろ提案しました（笑）それが最終的な選択に繋がらなかったとしても、話し合いの中でちょっとした刺激になればいいなと思っていたので、そう言ってもらえて嬉しいです。

原田　青森公立大学の大学祭では古着屋をご自身で出店していましたよね。今回の経験の中で、ご自身の活動に活かせそうなことはありましたか？

山田　チームで企画を動かすことを、より意識するようになりました。自分には苦手なことでも、他のメンバーが得意ならお願いしてみよう、と考えられるようになったり、チーム内での役割分担や動き方を意識できるようになったと思います。今は、大学祭で実施した古着屋を発展させて、空間全体をデザインする企画をやりたいと考えていて、今年中に実現できそうです。



*1　2部構成のワークショップ。ＰＡＲＴ1では、災害時に起こり得る「困りごと」と、それに対して役立つであろう自分の「得意」を書き出し、ボードに貼り付けてシェアするワークショップを開催。ＰＡＲＴ2では、過去の事例をもとに災害時に直面する「正解のない問い」についてグループで考える、ゲーム形式のワークショップを実施した。

*2　県民の防災意識を高めることを目指し、2025年9月13-14日にカクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）にて開催された防災イベント。主催は青森みんなの防災フェア実行委員会。ＡＣＡＣは防災に関する書籍の紹介と学生によるテント映画祭ＰＲ動画を上映するブースを出展した。

*3　令和6年の能登半島地震と能登豪雨で被災した地域の方々を応援するチャリティ企画。青森公立大学野坂真ゼミが主催し、輪島朝市のお店などへ実際に行って選んだ食品、飲み物、工芸品などを販売した。まちづくり輪島の方が作成された映像の上映も行った。

*4　１００年以上続いてきたとされる輪島市の伝統的な市「輪島朝市」。令和6年能登半島地震により朝市が並ぶ通り一帯が大規模火災に見舞われ、現在は出張形式により市内のショッピングセンターであるワイプラザ輪島を中心に全国各地で開催されている。

*5　学生スタッフとともに参加者を募りながらダンボールベッドを組み立てるワークショップを実施。合計で6台のダンボールベッドを組み立て、ワークショップ後はそのまま設置し映像を見る際の椅子として使用した。

*6　青森やその他の地域から集めた防災に関するフリーペーパーや小冊子などの配布と、映画祭スタッフやイベント協力者が推薦する書籍を展示。推薦者一人ひとりのテキストも掲示し、さまざまな視点から本に触れることができる空間を目指した。

Photo: 小山田邦哉（pp.081-083）｜ ACAC スタッフ（写真左下に•）

アーティスト・イン・レジデンス プログラム2025「CAMP」
指名型AIR（災害ユートピア）
ACACベースキャンプ|テント映画祭

プログラム期間｜2025年3月ー9月
主催｜青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］
共同企画｜澤隆志
企画・コーディネーション｜原田桃望（プロジェクト主担当）
もしも交換所監修｜大黒優香（プロジェクト副担当）

ACACベースキャンプ
日時｜2025年9月20日（土）ー9月21日（日）
会場｜青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］
プログラムゲスト｜相澤久美
参加者数｜10名（事前予約制、定員10名）

テント映画祭
日時｜2025年9月27日（土）12:00—21:30
会場｜カクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）
プログラムゲスト｜相澤久美、とちぎあきら
協力｜RAB青森放送、青森公立大学 野坂真ゼミ、カクヒログループスーパーアリーナ（青森市総合体育館）、あんてな青森、GREEN HOUSE、cotocoto
参加者数｜235名

〈テント映画祭プログラム一覧〉
■ 映像上映プログラム|「関東大震災映像デジタルアーカイブ」を一緒に見るためのささやかな前置き
登壇：とちぎあきら
参加者数：28名

■ 映像上映プログラム|青森の災害と新しい防災拠点
登壇：久保田麻奈
参加者数：17名

■ 映像上映プログラム|『なみのこえ 新地町』上映
登壇：相澤久美
参加者数：22名

■ 能登応援ショップ
主催：青森公立大学 野坂真ゼミ
参加者数：20名

■ フード&ドリンク販売
出店：あんてな青森、cotocoto
参加者数：36名

■ もしも交換所
協力：青森公立大学 野坂真准教授
参加者数：43名

■ コモンズライブラリー
参加者数：50名

■ フリーテント／テント設営ワークショップ
出店：GREEN HOUSE
参加者数：9名

■ ダンボールベッド組み立てワークショップ
参加者数：10名

メディア掲載
■ 新聞記事
9月 2日（火）｜東奥日報　文化消息｜9面
9月25日（木）｜陸奥新報　文化「映画祭で防災を考える」｜9面

■ 雑誌・広告
8月1日（金）｜「あおもりのき」第24号　テント映画祭｜P35
9月1日（月）｜「CLiPPER」Vol.279　テント映画祭｜P13
9月1日（月）｜「青年委員会だより」281号　テント映画祭｜2面
9月1日（月）｜「広報あおもり」No.473　暮らしの情報｜P20

■ Web媒体
ART iT
https://www.art-it.asia/top/admin_ed_pics/274554/
あおもりアーツカウンシル
https://aomori-artscouncil.jp/2025/08/12/12902

■ TV・ラジオ
9月14日（日）RAB青森放送「らじ丸にっち！」（出演：原田桃望）



公募型+海外連携AIR　写真で滞在を振り返る

アーティストが一定期間滞在しながら創作活動を行うアーティスト・イン・レジデンス（AIR）。国際芸術センター青森（ACAC）では、アーティストやリサーチャーなど文化芸術活動に携わる方々を対象に、公募制によるレジデンスプログラムを実施してきました。2025年度は国内外から800件を超える応募があり、その中から採択された4名に加え、スコットランド北海岸のオークニー諸島・メインランド島の中心地ストロムネスに拠点を持つアートギャラリー／美術館であるピア・アーツ・センターの推薦による1名を合わせた計5名が滞在しました。滞在制作を通じて、ワークショップやイベント、成果展など多彩なプログラムを展開しました。滞在期間は作家によって異なり、長い場合は約3か月に及びます。滞在中、作家たちは制作のためのリサーチやワークショップの準備などに取り組んでいますが、その過程を目にする機会は意外と少ないものです。今回は、5名の作家がレジデンス期間中にどのように過ごしていたのかを、写真を通して振り返ります。

展覧会の軌跡——設営から撤収まで

設営期間：2025年11月4日—11月13日
撤収期間：2025年11月30日—12月1日

START



技術員が制作した展覧会会場の模型を囲んで打ち合わせ

















お昼ごはんはみんなで食べにいきました

















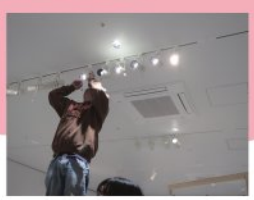






サテライト会場（旧ユースタイル）での設営風景





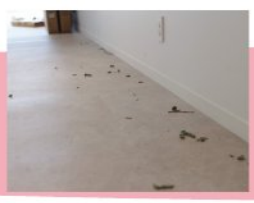






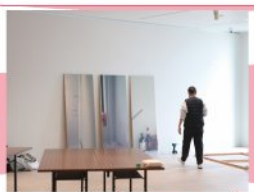


青森テレビ「わっち!!」に取り上げていただきました！











撤収作業

Photo: 前谷開(pp.085-087) | ACACスタッフ(写真左下に•)





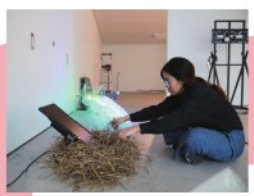


ACACから協同組合タッケン美術展示館(展覧会会場)へ作品を運び出します






会場にて設営スタート



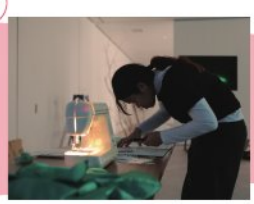




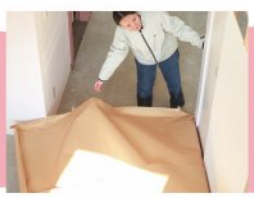





設営作業は夜まで続きました









設営最終日、青森公立大学関係者にお披露目

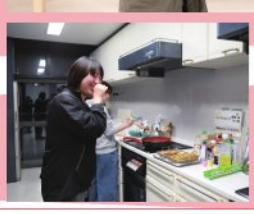
ゲスト審査員・池田佳穂さんに作品を観ていただきました






GOAL




ACAC宿泊棟ではアディがナシゴレンとゴレガン(揚げ物)を、スタッフの大黒がから揚げを作り、「揚げ物交流会」が開かれました!



前谷開

MAETANI KAI









表現と広報物の間にある制作

11月に行うワークショップに向け、前谷は青森で撮影したイメージの上にテキストやドローイングをシルクスクリーンで重ね、ポスターを制作していました。出来上がったものは青森公立大学の随所に設置。パフォーマンスの前には書道で「歩く、眠る」というタイトルを書き、成果発表展の入口やパフォーマンス会場の扉に貼っていました。こうした手作業で作られたものは街中で見かける普通のポスターとは雰囲気が異なります。ポスターを自分で作り、いろんな場所に貼る行為は風景の一部をジャックするような試みのようでした。







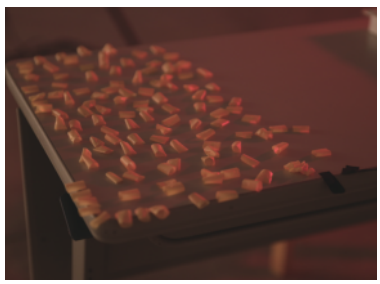




夜の展示棟で暗室作業

前谷は成果発表前にACACのギャラリーAを夜間に暗室として使用し、写真のプリントを行っていました。例年だと展覧会前はギャラリー内で設営がありますが、会場が街中だったからこそ行えた2025年ならではの取り組みかもしれません。引き伸ばし機を三脚に固定し壁に投影することで、一般的な暗室では考えられない巨大なイメージがプリントできます。とはいえ、バットや竹ピンは一般サイズ。四つ切の印画紙の裏にマスキングテープを輪にして付け、それらを壁に貼りつけていき、露光したら一枚ずつ剥がして現像していきます。気が遠くなるような作業に思えましたが、まだ濡れている印画紙に写るイメージはなによりも良く見えました。







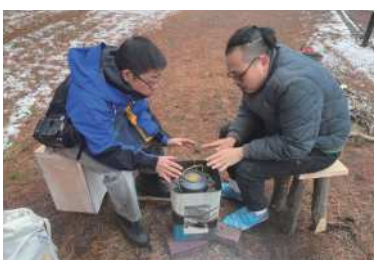

キャンプな滞在

展示だけでなくコーヒーを淹れるときや撤収中にも木の枝は大活躍。最後はACACで焚火をしスタッフと共に火を囲みました。テント泊をしながら津軽半島を徒歩で巡ったこともあり、前谷の滞在自体がキャンプのようでした。
「津軽半島の、特に陸奥湾沿岸には多くの小屋がたっています。朽ちそうになりながら立ち続ける小屋からは、そこに暮らす(あるいはかつて暮らしていた)人々の生活が感じられました。キャンプをしながら歩いて印象深く感じたことは、生活と作品制作が、自分の中で新たな回路として結ばれていくことでした。小屋と自分が背負って歩いたテントから発想し、ACACの敷地に無数に落ちている枝を使って、遊ぶように作品を作っていきました。」(前谷)









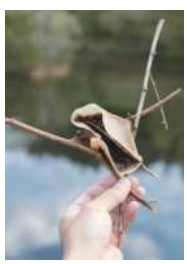



Photo: 前谷開 | ACACスタッフ(写真左下に•)
テキスト: 原田桃望(ACAC)



丹治りえ

TANJI RIE



滞在制作を支えたリサーチの日々

約3か月間滞在していた丹治は、その土地の歴史や文化、暮らしの特徴を探究すべく、到着後すぐにレンタカーを借り、三沢市や六ヶ所村など上十三地域を中心にリサーチを進めていました。文献や資料を読み解きながら、実際に訪れてみたい場所はGoogle Map上にピンを立て、連日のように各地へ足を運んでいました。制作の材料でもある日用品は、青森県内のさまざまなリサイクルショップを巡って集められたものです。首都圏で暮らす人々から提供してもらった日常風景の写真を手に、青森市、黒石市、三沢市、おいらせ町内のリサイクルショップはほぼすべて回ったといいます。















精度を極めた貼りこみ作業

丹治は、青森県内で集めた日用品などを用い、提供してもらった写真に写る日常風景を仮構し、撮影を行いました。そのイメージを壁紙としてプリントし、合板に貼り付けています。完成した壁紙は2枚の合板にそれぞれ貼られ、横に並べることで1枚の写真の風景が立ち上がる構成となっています。壁紙の長辺は2メートル弱ありましたが、裏面に糊付けを施し、2枚の合板の中心が正確に揃うよう微調整を繰り返しながら貼り合わせていく作業は、まさに職人技でした。運搬時には角が傷つかないよう丁寧に梱包され、展示会場まで大切に運び込まれました。















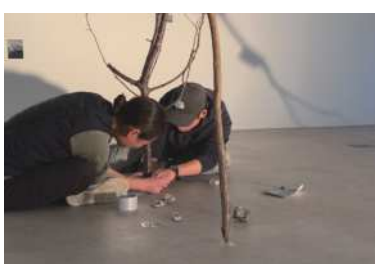


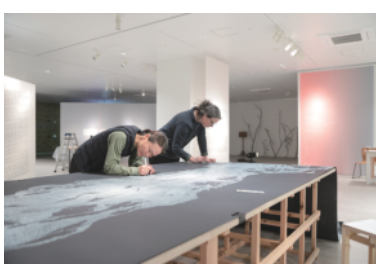
互いに手を差し伸べながら進めた設営作業

5名のアーティストが同時期に滞在していたこともあり、ACACの創作棟ではそれぞれが仮設スタジオのように自身の制作スペースを確保し、制作を進めていました。今年度はACAC展示棟ではなく、JR青森駅東口ビル内の協同組合タッケン美術展示館を成果展の会場としていたため、設営期間中は全員で会場に通いながら、互いに協力して設営作業を行いました。丹治も自身の作品設営の合間を縫って、サマンサのテーブルに使用する木材を切り出したり、アディの作品設営や照明調整を手伝ったりと、他作家と協力しながら設営に臨む姿が印象的でした。











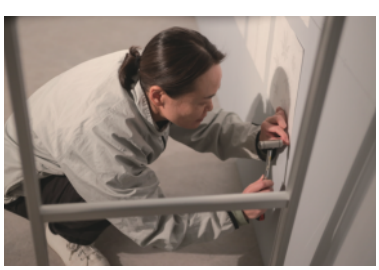


Photo: 前谷開｜丹治りえ(写真左下に*)｜ACACスタッフ(写真左下に•)
テキスト: 大黒優香(ACAC)

アディ・スンドロ

ADI SUNDORO











シュレッダープレスが作品になるまで

個人情報が残る印刷物がどのように処理されているのかをリサーチするため、株式会社伸和産業を訪問。各所から持ち込まれたシュレッダーダストがキューブ状にプレスされる工程を見学しました。シュレッダープレス品は作品にも使用されましたが、展示会場の床の耐荷重を考慮し、通常よりも小さいサイズで特別に制作していただくなど、多くの協力を得て実現しています。担当の太田さんからは「アディさんの作品に関わらせていただきとても光栄に思います。弊社にとって芸術分野は初めての取り組みで、工場担当者も作製·運搬に知恵を絞りました。古紙の上の【情報】について意識させられる作品になったと感じています。」とコメントをいただきました。









プロジェクトの原点に触れる技法との出合い

揚げ物をプロジェクトの出発点としているアディは、かつて実際の食用油を使って版画制作を試みたことがあるそうです。しかし、油は粘度が低く流動性が高いため、素材としては思うように扱うことができませんでした。そんな中、滞在中に出合ったのが、ねぶた制作で用いられる蝋でした。和紙に塗られた蝋に光が透ける様子は、まさにアディが求めていた油染みの表現を連想させるもの。青森公立大学ねぶた制作サークルの学生から教わった蝋の技法は、今後も彼のプロジェクトを象徴する表現の一つとなっていくことでしょう。













簡単ではなかった、ワークショップ開催までの道のり

滞在中、アディは台所にある身近な材料を使う版画技法「キッチンリトグラフ」を用いたワークショップと、制作の出発点となったインドネシアの揚げ物「ゴレガン」を実際に調理して味わうワークショップを企画しました。どちらも過去に実施したことのある内容でしたが、日本で手に入る材料で試してみると、思うようにいかない場面も多く、ACAC宿泊棟のキッチンで実験の日々が続きました。試行錯誤と失敗を重ねて迎えたワークショップ本番は大成功。「これまでさまざまな場所で同様のワークショップを行ってきたけれど、今回が1番うまくいった」と語ってくれました。















Photo: 前谷開 | アディ・スンドロ（写真左下に*）| ACACスタッフ（写真左下に•）
テキスト: 大黒優香（ACAC）



アティッタヤポーン・センポー

ATITTAYAPORN SAENPO









念願のカラオケ

リサーチやインタビューのため、色々な場所に足を運びましたが、その中でも五所川原には何度も通いました。車での長距離移動中の定番ソングは、イサーンのポップソング、藤井風、NewJeans。インタビューを無事終えてリラックスした帰り道は、音楽に合わせて歌ったり。「アティッタヤポーンとタイ・ナイト☆彡」で流すために、プレイリストも作りました。滞在中、音楽がいつもそばにあったセンポーが念願のカラオケに行けたのは、タイナイトが終わった日の深夜。スミビマルフクのオーナーとスタッフ、前谷さん、アディさん、ACAC技術員の木下さんも付き合ってくれました。眠気と疲労の先にある盛り上がりをご覧ください。





持ち運べる彫刻

センポーが制作した彫刻作品は、ペットボトルでできています。軽くて折りたためるので、どこへでも持ち運べます。撮影やリサーチで、この彫刻とともに色々な場所に行きました。五所川原の田んぼでパフォーマンス撮影をしようとしていた時、日が暮れてきてもう少しで辺りが真っ暗になりそうだったので、カメラと三脚、そしてこの彫刻を抱えて駐車場から田んぼまで走ったこともあります。ずっしりしていて、ひとつの場所にずっと留まっているという、伝統的な彫刻のあり方とは大きく異なっているのですが、こうやって、色々な場所に移動できるという身軽さも、この作品にとっては重要なことなのです。(詳しくは、公募型AIRのカタログをご覧ください♪)








あだ名でのコミュニケーション

センポーは、女性のアーティストや学芸員のことを「マミー」と呼びます。これはタイ語で、親しい女性の友達に呼びかける時に使われる言葉です。そして、男性にはあだ名を付けて呼ぶこともありました。例えば前谷さんのことは、自分のパフォーマンスの写真撮影を手伝ってくれたことをきっかけに、写真の師匠としてのリスペクトを込めて「ティーチャー」と呼んでいました。本名とは別にあだ名を持つことは、タイでは珍しいことではないようです。私たちもセンポーのことを、「アミー」というあだ名で呼んでいました。あだ名を介したコミュニケーションは、なぜだか陽気でリラックスしたムードを生み出していたように思います。

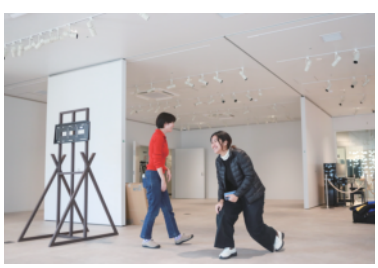








Photo: 前谷開 | ACACスタッフ(写真左下に•)
テキスト: 瀬藤朋(ACAC)



サマンサ・クラーク

SAMANTHA CLARK







静かな制作期間

クラークが青森に到着してからの2週間は、ひとりでの静かな制作の日々でした。参加型のドローイング作品を展覧会に出展しようと考えていたのですが、何も描かれていない紙だけが置かれているより、参加者のためのガイドとして自分のドローイングがあった方が良いだろう、ということで、巨大なロール紙約6メートルにわたってドローイングを施しました。「ドローイングが好き！1日中できるよ。」とクラークが言う通り、何時間も黙々と創作棟で制作を行っていました。

展覧会での出会い

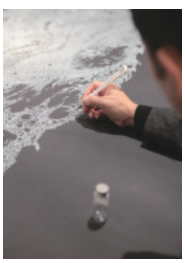
他のアーティストより遅く青森に来たクラークは、作品制作のためにあちこち訪ねることはしませんでした。その代わり、展覧会が開けた後も彼女の制作期間は終わることがなく、会場でドローイングを行っていました。そこでは、さらに大きな作品になるように新しい円を書き足したり、様々な人が参加したことで少し乱れた流れを美しい姿に修正したりしていました。おそらく、展覧会会場で一番長い時間を過ごしたのはクラークだったのではないでしょうか。その中で生まれた来場者の方々との温かな出会いも、作品の一部のように感じられます。



















水に迎えられ、送り出される

クラークは、展覧会の来場者から集めた水をACACの水盤に返すパフォーマンスを行いました。その日はパフォーマンスを邪魔しない程度に、雨がしとしと降っていて、「水を返す」というタイトルにぴったりの天気でした。そして、クラークが帰る日には、それまで暖かかった天気が一転して雪がたくさん降りました。積もってしまったので、クラークのアイディアで、スーツケースをソリで駐車場まで運びました。水をテーマに作品を制作してきたクラークの周りに水が集まってくるのが、面白い偶然でした。







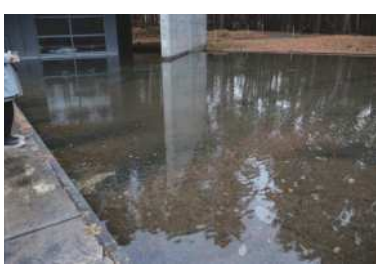


Photo: 前谷開 | ACACスタッフ(写真左下に•)
テキスト: 瀬藤朋(ACAC)

アーティスト・イン・レジデンス プログラム2025「CAMP」
公募型+海外連携AIR

アーティスト	前谷開、丹治りえ、アディ・スンドロ、アティッタヤポーン・センポー、サマンサ・クラーク
ゲスト審査員	池田佳穂
プログラム期間	2025年9月15日（月）ー12月15日（月）
展覧会会期	2025年11月14日（金）ー11月29日（土）（11月17日（月）のみ休館）
会場	協同組合タッケン美術展示館（青森市柳川1-1-5 JR青森駅東口ビル4F）、旧ユースタイル（青森市新町2-6-21）
主催	青森公立大学 国際芸術センター青森［ACAC］
協力	AIRS（アーティスト・イン・レジデンス・サポーターズ）
助成	令和7年度 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス型地域協働支援事業
後援	青森市、青森テレビ、RAB青森放送、青森朝日放送、青森ケーブルテレビ、エフエム青森、ABHラジオ、コミュニティラジオ局BeFM、東奥日報社、陸奥新報社、デーリー東北新聞社
企画	原田桃望、瀬藤朋、大黒優香
来場者数	1,124名（展覧会来場者971名、関連プログラム参加者153名）

関連イベント

■ 前谷開 ワークショップ「写真になる」
日時：11月1日（土）・2日（日）10:00—17:00
会場：ACAC屋外、展示棟
参加者数：8名

■アディ・スンドロ オープンスタジオ&作品制作ワークショップ
日時：11月3日（月）13:00—16:00
会場：ACAC創作棟 ワークショップスタジオ
参加者数：8名

■サマンサ・クラーク 青森県立青森中央高等学校連携授業
日時：11月13日（木）8:55—12:45
会場：青森県立青森中央高等学校
参加人数：16名

■池田佳穂×参加アーティスト トーク
日時：11月15日（土）13:00—16:00
会場：旧ユースタイル 1F（青森市新町2-6-21）
参加者数：14名

■丹治りえ オフサイトでの作品公開
日時：11月16日（日）・23日（日）13:00—16:00
会場：旧ユースタイル3F
参加者数：8名

■キュレーターツアー
日時：11月18日（火）ー21日（金）・25日（火）ー28日（金）13:00—13:45
会場：協同組合タッケン美術展示館
参加者数：7名

■アティッタヤポーンとタイナイト☆彡
日時：11月21日（金）17:00—22:00
会場：スミビマルフク（青森市幸畑1-21-20）
参加者数：30名

■丹治りえ ワークショップ「きおくのきろくをさがし、きろくのきおくをたどる」
日時：11月22日（土）10:00—16:00
会場：旧ユースタイル2F、青森駅周辺
参加者数：5名

■アディ・スンドロ ワークショップ「プリント&フライーキッチンリトグラフとゴレガンワークショップ」
日時：11月24日（月）9:00—15:00
会場：旧ユースタイル2F
参加者数：6名

■アティッタヤポーン・センポー パフォーマンス
日時：11月28日（金）19:00—20:00
会場：旧ユースタイル
参加者数：15名

■前谷開 パフォーマンス「歩く、眠る」
日時：11月29日（土）16:00—18:00
会場：旧ユースタイル
参加者数：25名

■サマンサ・クラーク パフォーマンス「水を返す」
日時：11月30日（日）9:00—10:00
会場：ACAC 展示棟ラウンジ、野外ステージ
参加者数：11名

メディア掲載

■新聞記事

11月14日（金）—29日（土）	陸奥新報　暮らしのイベント情報	
11月20日（木）	東奥日報　公募AIR開催	16面

■雑誌・広告

10月　1日（水）	「青年委員会だより」第282号	P　2
11月　1日（土）	「青年委員会だより」第283号	P　2
10月28日（火）	「広報あおもり」No.475　暮らしの情報	P21
10月28日（火）	「ガイドブック」東北文化の日2025	P　2

■Web媒体
アートアジェンダ
https://www.artagenda.jp/exhibition/detail/10762
あおもりアーツカウンシル「NEWS」
https://aomori-artscouncil.jp/2025/10/23/12941
ART iT　アートイット
https://www.art-it.asia/top/admin_ed_pics/278642/
Web美術手帖「地域レビュー（東北）：長尾衣里子評「コスモスの咲くとき」「90年目の狂詩曲」（青森県立美術館）／アーティスト・イン・レジデンス プログラム2025「CAMP」（国際芸術センター青森）」
https://bijutsutecho.com/magazine/review/31929

■TV・ラジオ
9月30日（火）　ABHラジオ「DADIO-BOX」（出演：大黒優香）
11月19日（水）　青森テレビ「わっち!!」（出演：前谷開、丹治りえ、アディ・スンドロ、アティッタヤポーン・センポー、サマンサ・クラーク、瀬藤朋、大黒優香）



Photo: 前谷開

国際芸術センター青森(ACAC)には、展覧会やワークショップといった様々な事業や施設の管理を支える「技術員」がいます。技術員は展示のための什器、試作を支える道具、ワークショップで使う机や椅子など展示や制作を支えるさまざまな「もの」をACACの事業の中で作ってきました。現場で生まれた工夫や試行錯誤の跡に目を向けながら、制作の裏側にある風景を写真とともに振り返ります。









椅子

これまでの展覧会事業などで使用してきた材木を組み合わせて作った椅子。全部で20脚あり、どれ一つとして同じ見た目のものはありません。ペンキの痕跡や材木の形からは、ACACのこれまでの活動や時間の積み重なりを感じることができます。テント映画祭や青森港暮らしのマルシェなど、様々な場所へ持ち運んで使用されました。その独創的な佇まいから、「販売してほしい」という声が寄せられることもあるとか…





丸テーブル

足と天板を組み合わせて組み立てるテーブル。一つひとつのパーツは軽く、持ち運びしやすい一方で、十分な耐久性も備えています。天板は、使用する人が安全に触れられるよう、技術員が丁寧に磨き上げています。椅子とセットでワークショップ用のテーブルとして使用されたほか、イベントや展覧会設営時の荷物置きなど、様々な場面で活躍しました。



「出張創作体験!森の学校を作ろう@青森港 暮らしのマルシェ」ワークショップの様子



テント映画祭で解説をするとちぎあきらさん





丸テーブルを切り出す道具

丸テーブルを作るためには、丸い形の板が必要です。四角い板を丸く切り出すための道具も、技術員が作っていました。ビスを板の中心にとめて、反対側に刃を固定してコンパスのようにぐるっと回しながら丸い形に切り出しました。

テント映画祭　看板

テント映画祭では映像上映プログラムのほかに複数のブースを展開しました。それぞれのブースの特徴を活かした看板も、技術員による手作りです。木の枝の形をそのまま活かした看板や、手書きのゴシック体で書かれたもの、参加者の想像力を引き出すブースに設けられた「もやもや」型の看板など、表現もさまざま。学芸担当と意見交換を重ねながらイメージを共有し、一つひとつ形に落とし込んで制作されました。
ペンキを塗る作業は青森公立大学の学生にも協力いただきました！













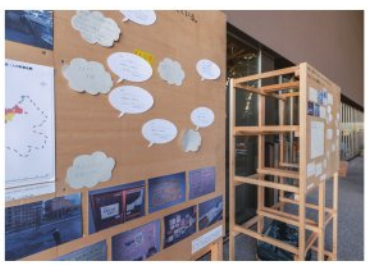

テント映画祭ブックスタンド

災害への備えとして役立つフライヤーや関連書籍を設置するためのブックスタンド。配架するフライヤーや書籍の大きさ・形状に合わせて、自立型のものから平置き用のものまで、計3種類を制作しました。ブースの看板を兼ねた自立型のブックスタンドは、現在ACACの展示棟ラウンジにて、施設パンフレットや子ども用鑑賞ツールの設置台として活用されています。



テント映画祭「もしも交換所」ボード

「もしもこんな災害に直面したら、という状況設定を書き、そこに参加者が付箋を貼っていけるような黒板みたいなものがほしい」という、かなりざっくりとした要望を、技術員が現実的な形へと落とし込んでくれました。モニターを取り付けたい、ボード面をもう少し大きくしてほしいといった追加のオーダーにも快く応じ、柔軟に対応。また、倒れないよう現場でボード同士を固定したり、脚部に重石を設置したりするなど、安全面への配慮も徹底されていました。












サマンサの共同制作で使用したテーブル

海外連携AIRに参加したアーティスト、サマンサ・クラークが、展覧会会場にて来館者の参加を受けながらドローイング作品を制作するために使用したテーブル。大型のドローイングを展開し、複数人で囲んで取り組めるよう、テーブルのサイズは4mに設計されています。作品を安定して置けるよう、天板同士の間に段差が生じないよう2人がかりで結合し、また、座って参加しやすいよう足が入る部分を空洞にするなど、参加者への配慮が随所に施されています。

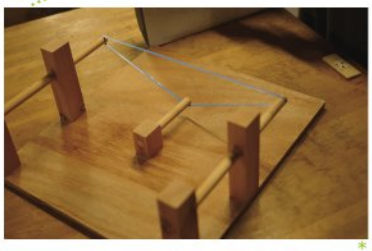
アーティストトーク会場でのスクリーン（会場：旧ユースタイル）

公募型+海外連携AIRのトークイベントでスライドを投影するためのスクリーン。もともとは、縦に広い会場を横に使い、白壁に投影する予定でしたが、入口から奥に向かって広がる空間を活かすため、大型の紙をスクリーンとして設置しました。紙の下部が丸まらないよう、糸とACACから持ち込んだ大きな丸石で固定。空間の特性を活かした投影環境を作ることができました。

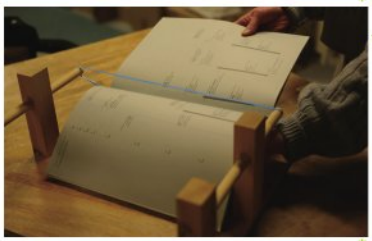












カタログを組み立てる道具

2023年度の公募型AIRのカタログにゴムを取り付けるためだけに制作された道具。事務職員の「もう少し楽に付けられる道具があれば…」という一言をきっかけに生まれました。実際に使ってみると作業効率が大きく向上し、事務職員からは「助かった〜！」と大好評だったそうです。

Photo: 小山田邦哉（pp.100-102）｜前谷開（写真右下に•）｜ACACスタッフ（写真右下に*）



《ACACの写真部》

Photo: 冨永敦

《ACACの写真部》タイムライン

《ACACの写真部》は、2022年に国際芸術センター青森(ACAC)で開催した松本美枝子個展「具(つぶさ)にみる」をきっかけに組織された部活動です*。2025年度は2024年度と同様に写真に関する集まりを月1回の頻度で設けてきました。また、本づくりを得意とする写真家ユニット大道兄弟や松本美枝子さんをお招きし、ワークショップやトークイベントなどを《写真部》だけでなく一般の人も参加できる形で開催しました。2026年度から《ACACの写真部》はメンバーが主体となり名前を変え市民団体として活動を行う予定です。ここではタイムライン、メンバーの声、松本さんのエッセイを掲載し、これまでの《ACACの写真部》の歩みを振り返ります。(原田桃望·国際芸術センター青森 学芸員)

*《写真部》は2010年より松本さんが、各地で行ってきたワークショップ·プロジェクトです。現在は《メゾン·ケンポクの写真部》と《ACACの写真部》が、地域のひとたちとの協働で続いています。

2021

6

第1回　写真の自作品などを見せ合う

日時:2021年6月6日(日)14:30ー
場所:展示棟 ラウンジ
参加人数:14人

青森公立大学の写真部、美術サークルのほか、八戸、弘前、青森から人が集まりました。新聞記者やラジオパーソナリティ、印刷会社など、メディアに携わっている社会人が多かったのが印象に残っています。(松本美枝子·以下松本)

7

第2回　撮っている写真やどんな活動をしているか、自分が何に影響を受けているか紹介

日時:7月4日(日)13:00ー
場所:展示棟 ラウンジ
参加人数:10人



8

第3回　写真集持参でそれを見せ合う

日時:8月9日(月)13:00ー16:00
場所:展示棟 ラウンジ
参加人数:10人

この時に部長、副部長が決まりました。
(我満祥太:ACACの写真部部長、以下我満)

9

(9月は感染症の影響で延期)

10

10月某日
写真部員の有志による「弘前の前川建築を見る」ツアーを開催!部員の浜中淳さんが案内してくれました。(松本)

第4回　ミーティング、展示に向けて話し合い

日時:10月16日(土)13:00ー
場所:展示棟 ラウンジ、ギャラリーA
参加人数:10人

第5回　プリント

日時:10月24日(日)13:00ー15:00
場所:創作棟 写真スタジオ

11

第6回　プリント

日時:11月6日(土)10:00ー15:00
場所:創作棟 写真スタジオ
参加人数:6人

第7回　ミーティング

日時:12月12日(日)13:00ー
場所:展示棟 ラウンジ
参加人数:6人

12



第8回　プリント

日時:12月14日(火)10:00ー15:00
場所:創作棟 写真スタジオ
参加人数:4人

2022

3

第9回　オンラインミーティング

日時：2022年3月26日（土）14:00ー15:00
場所：オンライン

4

4月上旬
松本美枝子個展「具（つぶさ）にみる」設営期間中
《写真部》メンバーが設営に参加してくれました。
また、設営チーム5人分くらいの夕食を作りにきて
くれたメンバーもいました。（松本）

5



6

松本美枝子
個展「具（つぶさ）にみる」
記録映像

7

第12回　ミーティング、展覧会カタログ作成に向けて

日時：6月4日（土）13:00ー15:00
場所：展示棟 ラウンジ
参加人数：5人

8

第13回　オンラインミーティング

日時：8月12日（金）18:00ー
場所：オンライン
参加人数 6人

9

第14回　プリント

日時：9月27日（火）
場所：創作棟 写真スタジオ
参加人数：2人

11

第15回　オンラインミーティング

日時：11月2日（水）17:00ー
場所：オンライン
参加人数：5人

12

第16回　ミーティング、カタログの構成など話し合い

日時：12月13日（火）10:00ー、14日（水）13:00ー
場所：展示棟 ラウンジ

第10回　ミーティング

日時：4月16日（土）16:00ー17:30
場所：展示棟 ラウンジ

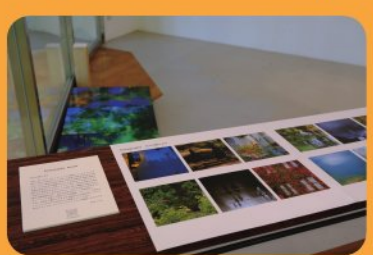
第11回　プリント

日時：4月23日（土）10:00ー15:00
場所：創作棟 写真スタジオ
参加人数：3人

展覧会「それぞれの日常から」

日時：5月10日（火）ー15日（日）9:00ー17:00
（最終日ー16:00）
場所：青森市役所 駅前庁舎 アウガ1F駅前スクエア
主催：《ACACの写真部》
協力：青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC]
参加人数：10人
来場者数：315人







12

展覧会「遠くの日常、近くの日常」

日時：12月17日（土）ー26日（月）
11:00ー17:00（最終日ー16:00）
場所：メゾン・ケンポク
参加人数：10人
来場者数：65人
主催：一般社団法人 自由と地図
協力：《ACACの写真部》、青森公立大学
国際芸術センター青森［ACAC］

ギャラリートーク

日時：12月26日（月）13:00ー14:00
場所：メゾン・ケンポク
トーカー：藤本健人、松本美枝子
モデレーター：若山萌恵
来場者数：8人







1

2023
2024

県内外様々な場所へ図録を寄贈、設置しました。
（我満）

「ACACの写真部」展覧会図録発行

発行日：2023年1月31日（火）

5

岩根愛 ギャラリーツアー＆トーク

日時：2024年5月25日（土）16:00ー17:30
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：9人



6

さまざまな写真集にふれる

日時：6月22日（土）16:30ー18:00
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：8人

7

「小島一郎展」キュレーターツアー＆中嶋幸治さんと話す会

日時：7月27日（土）10:15ー13:00
会場：青森県立美術館
参加人数：10人

8

カラープリントワークショップ

日時：8月10日（土）13:00ー16:00
会場：創作棟 写真スタジオ
参加人数：3人



9

小林美香『写真を〈読む〉視点』を読む

日時：9月21日（土）16:00ー18:00
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：4人

10

秋の雲谷狩り

日時：10月26日（土）10:00ー15:00
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：5人

11

対話型鑑賞

日時：11月25日（月）16:00ー17:30
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：5人





12

アメリカの写真集を読む

日時：12月15日（日）11:30ー14:00
会場：宿泊棟 ダイニングルーム
参加人数：7人

2025

2
ポートフォリオZINEを作る
日時：2025年2月16日（日）15:00ー17:00
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：7人

3
ポートフォリオZINE披露会&
モノクロプリントワークショップに向けて
日時：3月22日（土）13:00ー16:00
会場：創作棟 ワークショップスタジオ
参加人数：10人

4
春の桜狩り
日時：4月19日（土）10:00ー12:00
会場：合浦公園
参加人数：6人

5
カメラと写真集の会
日時：5月25日（日）14:00ー17:00
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：8人

他の表現分野から学ぶ
日時：6月22日（日）13:00ー16:00
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：9人

6


7
春の写真を見る&
モノクロ暗室ワークショップ準備会
日時：7月27日（日）13:00ー16:00
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：9人





Photo: 冨永敦

2024年度から《写真部》のみなさんと活動を共にし、写真を撮るだけでなく撮った写真をどのようにまとめるかということにみなさんが関心を寄せていることに気づきました。そこでこれまで本を作り続けてきた大道兄弟のお2人に来てもらい3つのイベントを実施しました。（原田）

8
大道兄弟トーク&スライドショー
&ワークショップ「自分という本をつくる」
日時：8月16日（土）14:30ー16:00（トーク）、
18:45ー19:00（スライドショー）、
17日（日）10:00ー17:00（ワークショップ）
会場：展示棟 ラウンジ、野外ステージ、
創作棟 ワークショップスタジオ
参加人数：51人

9

モノクロプリントワークショップ
日時：9月28日（日）13:00ー16:00
10
会場：創作棟 写真スタジオ
参加人数：9人

前谷開ワークショップ「写真になる」
日時：11月1日（土）、2日（日）10:00ー17:00
会場：展示棟 ラウンジ、ギャラリーA
参加人数：8人
＊2025年度の公募型AIRの枠組みで実施したワークショップでしたが、9月28日（日）に実施した「モノクロワークショップ」に前谷開さんが参加したことにより、《写真部》のメンバー数名がこのワークショップに参加しました。

11



Photo: 前谷開

12

松本美枝子トーク
日時：12月21日（日）14:00ー15:30
会場：展示棟 ラウンジ
参加人数：17人

《ACACの写真部》メンバーに聞いてみた！
Q.これまでの活動の中で印象に残っていることを教えてください



写真家の松本美枝子さんがACACでの滞在制作の中から始まった《写真部》は、当初学生や若い方中心に写真について色々なアプローチで取り組んでいただきました。作品づくりや展示について身近に勉強できたのがとても印象的でした。個人的には、松本さんの地元茨城でも写真展示したこと、記念のミニ図録制作で活動を形にできたことがとても良かった。

その後、岩根愛さんが《写真部》に協力していただき、アメリカの写真の系譜勉強会、カラープリントワークショップ、後にzineの体験制作等レベルの高い活動ができたことも財産となった。後に写真好きな仲間も増え、これからも写真制作のスキルアップに役立つ企画や活動は続く。

浜中淳



一番印象に残っていることは、手焼きプリントです。私はこれまでフィルム写真は撮っていましたが、暗室での作業は初めてでした。引き伸ばし機にフィルムをセットし、真っ暗な中で印画紙を準備し、露光、現像、水洗を行う。電気をつけるまで、どんな写真が現れるのか分からず、不安と期待が入り混じった感覚を今でも覚えています。初めての工程ばかりだったことが、強く印象に残った理由です。《写真部》では、ただ撮影するだけでなく、写真との向き合い方や捉え方を多角的に考えます。学びや発見が多く、自分一人では得られなかった経験を積み重ねられたことが、活動を楽しく続けてこられた動機の一つだと思います。

我満祥太



印象に残っているのは、対話型鑑賞への取り組みです。写真を「見る」という行為を、問いと対話を通してみんなで掘り下げていく体験は新鮮でした。特に歌川広重の浮世絵とソール・ライターの写真を並べ、時代や表現手法を越えた共通点を探った時間は印象深く、参加者それぞれの視点の重なり合いから、多彩な気づきが生まれる面白さを実感しました。

《ACACの写真部》は、撮影や鑑賞に留まらず、作家や専門家との出会いや多様な芸術体験の機会があり、振り返ると世の中の見え方の幅が広がったと感じます。それぞれが無理なく関われる緩やかな活動ながら、そこにアートセンターらしい深い学びが同居している点も、この《写真部》の魅力だと思います。

米田剛



ハクセキレイ

《写真部》の活動に参加させてもらうようになってからの私は、貴重な出会いや経験の連続でした。中でも印象に残っているのは、2025年秋の『モノクロプリントワークショップ』です。各自事前にモノクロフィルムで撮影し、プリントしたい作品を選んでおきました。現像液を作るところから始まり、露光時間、印画紙を現像液から引き上げるタイミング、ひと通りの工程を体験しました。初めての暗室、初めて聞く用語、初めてづくしの中、手作業で自分の作品が完成した時の感動は今でも忘れられません。伝統的な写真のプリント方法を体験し、改めて写真の奥深さを感じ、ますます写真が好きになりました。



横山実緒

私が《写真部》の活動に参加したのは昨年からです。スマホで気に入った瞬間を写すことは好きでしたが、それまでカメラを触ったこともほとんどありませんでした。誘われるがままに参加することになり、初心者の私にとってはどの活動も初めてのことばかりで新鮮でした。中でも、大道兄弟による本づくりや、暗室でプリント、前谷開さんの「写真になる」など、自身の手や身体を動かして形にするワークショップがとても印象深いです。それは、写真を撮る行為はシャッターを切る瞬間だけではなく、その前後の意図や表現までも含めた一連の動作と地続きであることを体感できたからだと思います。少しずつですが、写真との距離が縮まっていると感じます。



Numari

大道兄弟のワークショップ「自分という本を作る」が印象に残っています。これまで自分でも冊子を制作してきましたが、「写真50枚、共通のシンプルなフォーマット、その場で組んで印刷・製本」という限られた時間とプロセスの中、大道兄弟のお二人に助けられながら、余計なことを考えずに手を動かし、どうにかこうにか完成させた一冊には、今の自分が持つ写真の基礎体力や編集力がそのまま現れていました。他の参加者の作品も大変興味深く、一人でやっていたのでは気づけなかった自分の現在地を知ることができました。今後もACACの環境を活用させていただきながら、人との関わりを大切に、写真への理解を深め、表現力を高めていきたいです。

Photo: 松本美枝子（pp.104-109）| ACACスタッフ（写真左下に•）

Essay

作品をつくる私とあなたに

松本美枝子

《ACACの写真部》が始まって、5年目を迎えようとしている。青森を訪れる前、どのような滞在制作を行なっていくか、というACACとの打ち合わせの中で「作品制作のほかに、松本さんがこれまでにワークショップを通してやってきたような、ACACと市民をつなぐコミュニティづくりができたらいい」という話があった。そうして2022年の春、私の滞在制作と共に始まったのが《ACACの写真部》だった。当時、館とともに思い描いたことが、その通りになって今も続いていることに、当事者ながら驚いている。もちろん、喜びを込めて。

青森のことを語る前に、まず《写真部》とは何かを説明したい。元々は水戸芸術館で高校生向けワークショップとして始めたのだが、翌年の東日本大震災をきっかけに、自分の制作の大きな部分を占めるようになった。震災後、どうやって以前のように作品を作っていけばいいのか、完全にわからなくなってしまった私自身のために、リハビリのように再開したのが《写真部》の活動だったのだ。自分の小さなランスペースに毎週集まる知らない人たちと、互いの写真についてただ語り合うことで、自然なコミュニティが出来上がっていった。この活動を通して自分もまた、いつのまにか写真が撮れるようになっていった。

その後は各地でワークショップ・プロジェクトとして開催し、16年目の今も、茨城での《メゾン・ケンポクの写真部》と、そしてここ青森の《ACACの写真部》が、地域の人たちとの協働で続いている。私にとって《写真部》とは単なるワークショップというより、形のない、長い作品シリーズだとも言える。

《写真部》を介して人と関わるなかでいつも驚くのは、写真作品をつくりたい、という熱意を持つ人たちが各地にいることだ。それは写真ならではの現象だと思う。実のところ写真とは、成果物のほとんどを「私」より機械が作ってくれる芸術だ。だから今この瞬間から、誰もが制作活動を始めることができるのだと、《写真部》の現場で何度も実感してきた。

そういう人たちが集まってくる場に、私が気にかけてきたことは、写真の表層的なテクニックを「教える／教えられる」という関係を作らずに、それぞれの視点を観察する場を立ち上がらせていくことだった。《ACACの写真部》でも、当時参加した人たちの年齢や経験はさまざまだったが、互いの写真を見る時間を重ねていくことで、共に作品をつくる仲間としての関係性が育っていった。例えば《写真部》に入ったことがきっかけで、大学卒業後にカメラ関係の仕事に就職して青森を離れ、そこで写真を撮り続け《メゾン・ケンポクの写真部》に参加している若者もいる。《ACACの写真部》には来なくなったけれど、青森で川柳を作って発表を重ねている人もいる。それぞれが、なんらかの表現活動を続け、お互いを気にかけて、緩やかにつながり続けているのだ。

そして2025年末に、《ACACの写真部》に久々にゲストトーカーとして参加したとき、写真部員だけでなく、県内からたくさんの人が話を聞きに集まってくれたことにも、かなり驚いた。それは設立メンバーの浜中淳さんと我満祥太さん、そして新しい部員のみなさんが定期的にACACに集い、学芸員の原田桃望さんと共に主体的に写真部を続けてきたからなのだと、来場者の一人一人と話してよくわかった。

《ACACの写真部》は、ワークショップとしてアーティストの私が直接関わらなくなっても、続いている唯一のプロジェクトだ。集う人たちの熱意が強かったことが大きいが、それに応えてACACが、このプログラムを複数年、継続してくれたことにつきる。公共の館と、集う人たちの信頼関係とも言えるだろうか。そのあり方は、これまで私が各地で行ってきた《写真部》の活動のなかでも、地域に根ざしたACACならではの成熟したかたちだと感じている。

《ACACの写真部》は、これから名前を変えて、ACACと協働しつつ地域で自走した活動を始めるそうだ。これはもう、ひとつの表現活動のはじまりなのだと思う。アーティストであっても、そう自称しなくても、作品を作っていくのは孤独な作業だ。写真を撮り続けるのも所詮は自分一人の力でやらなければいけないことだ。でもそういう孤独な作業をする人同士が寄り集まって語りあうのは、やはりプラスでしかない。お互いが、細く長く作品を作り続ける助けになるだろう。そうしてその寄り合いそのものが、やがてみなさんの作品にもなるだろう。《写真部》が私の作品であるように。

松本美枝子（写真家／美術家）
1974年茨城生まれ。茨城とリオデジャネイロを拠点に活動。さまざまなテクノロジーとメディアを横断しながら、知覚のあり方を問い直す試みを続ける。近年は自然環境と社会構造の関係についてリサーチを重ね、地層、歴史、人間の移動などをテーマとした作品を制作。南米やヨーロッパでも撮影を行い、インスタントカメラを用いた最新作では、各国の風景の中にとどまる光を写しとるシリーズを展開している。
主な展示に、個展「具（つぶさ）にみる」（国際芸術センター青森、2022年）、トーキョーアーツアンドスペースレジデンス2024 成果発表展「微粒子の呼吸」（トーキョーアーツアンドスペース本郷、2024年）などがある。



教育普及　身体を使った子ども向けワークショップの開発

身体を使った子ども向けワークショップを考える

瀬藤朋
国際芸術センター青森 学芸員

あまり広くは知られていないかもしれないが、国際芸術センター青森（ＡＣＡＣ）ではアーティスト・イン・レジデンス（ＡＩＲ）事業と同じくらい教育普及事業にも積極的に取り組んでいる。特に子ども向けのプログラムとしては、創作体験や出張授業を通じて、学校単位で創作活動を楽しめる機会を提供している。ＡＣＡＣで実施できる子ども向けワークショップ（以下、ＷＳ）は豊富にあり、児童数、年齢、先生の意向等を加味して最適なものを選択できる。しかしその多くは絵画や彫刻といった、手を動かして作品を制作するための技術を応用したものであり、身体全体を用いるものや、後に形として残らないパフォーマンス、舞台芸術の特性を生かしたものは見当たらない。ジャンルレスにアーティストを受け入れるアートセンターとして、より多様なＷＳがあっても良いのではないかと考えた。こうした背景から、演出家の和田ながらさん、俳優の石川朝日さんと協働して、身体を使う子ども向けＷＳの開発を試みる本事業が立ち上がった。最終的には小学校低学年向けの創作体験で取り入れることを目指して、2か年計画で進めることとなった。

１年目となる今年度は、ＷＳのプロトタイプを完成させることを目標に活動を行った。和田さん、石川さんと会話を重ねる中で、「子どもたちの教育に携わるサードプレイスとして、ＡＣＡＣにはどのような役割を果たすことができるのか?」という疑問が挙った。簡単には答えの出ないこの重要な問いを検討するため、青森で教育に携わる／携わったことのある方々へのヒアリングや、関連書籍の読書会をお二人と共に実施した。加えて、ヒアリングとは異なる形で教育関係者の知見に触れることもできた。例えば、図工部会[*1]に所属する先生向けに、石川さん考案の身体ＷＳを実施した後、その内容を取り入れた授業の様子を見学することができた。アーティストの実践が、小学校の先生の立場からどのように解釈され、授業の枠組みに即して再編成されるのか、そして子どもたちはどのように反応するのか、といった一連のプロセスを追うことができたことは、大きな収穫であった。

また、創作体験に参加した先生からは、集中してひとつの作品を制作する活動と同じくらい、身体全体を動かして表現する機会への需要も高まっているという声を多く聞いた。加えて、熊の出没状況を受け、ＡＣＡＣの自然環境を活用した定番のＷＳに加え、屋内や出張授業でも実施可能なＷＳを準備する必要が生じた。こうした子どもを取り巻く環境やＡＣＡＣの状況の変化が、教育普及事業のあり方にも影響を及ぼしているからこそ、長年実施してきたＷＳの内容を時々見直したり、改良していく必要があるのだと再認識した。

今年度完成したプロトタイプは、身体をつかって「かたち」になるというものだ。ＡＣＡＣに限らず、学校や家など身近な場を含め「かたち」であふれる世界をより楽しめるＷＳになれば嬉しい。来年度は、和田さん、石川さんがこれまでの創作活動で蓄積してきた身体知を幾分か分け与えていただきながら、学芸員だけで実施可能なＷＳとして、ブラッシュアップしていく予定だ。

*1 東青地区小学校教育研究会図画工作科研究部会。青森県東青地区の小学校図画工作科の教員が、図工教育の研究や技術の習得を行う。

活動タイムライン

2024年11月1日
参加者：石川朝日さん（俳優）、瀬藤朋（ACAC）
場所：オンライン
プログラムの構想について初めて話した。

12月27日
参加者：石川さん、瀬藤
場所：オンライン
学校という場や教育について、自分たちの体験をもとに考えを共有。

2025年1月17日
参加者：石川さん、瀬藤、大黒優香（ACAC）
場所：オンライン
関連書籍を紹介しあった。

3月31日
参加者：石川さん、瀬藤、大黒
場所：オンライン
石川さんにプログラムへの参加を打診。

4月15日
参加者：斎藤誠子さん（AIRS）、瀬藤、大黒
場所：ACAC
青森県内の学校や先生方へのヒアリングの実施、協働方法について相談。

4月16日
参加者：和田ながらさん（演出家）、石川さん、瀬藤
場所：オンライン
和田さんにプログラムへの参加を打診。

4月26日
参加者：新山乃愛先生（筒井小）、和田さん、石川さん、瀬藤、大黒
場所：アウガ&オンライン
筒井小学校の新山先生へのヒアリング。大学で美術を学んだ経験、学校教育についての考え方、ACACに期待すること等を伺った。

5月2日
参加者：成田博樹校長先生（新城中央小）、斎藤さん、瀬藤
場所：新城中央小学校
成田校長先生と打ち合わせ。今後のプログラムの展開について相談。

5月30日
参加者：黒川千恵先生（三内小）、嶋富哲子先生（三内小）、松浦純先生（荒川小）、中川史子先生（長島小）、成田校長先生、斎藤さん、和田さん、瀬藤、大黒
場所：新城中央小学校
先生方へのヒアリング。普段の図工の授業でやりたくてもできないこと、どんな制限があるのかを詳しく聞き、ACACの教育プログラムの役割について考えるヒントをいただいた。

6月7日
参加者：石川さん、瀬藤
場所：オンライン
図工部会の研修に関する打ち合わせ。粘土WS、仮面WSなどの案が出た。

6月16日
参加者：石川さん、瀬藤、大黒
場所：オンライン
図工部会の研修に関する打ち合わせ。粘土WSに決定し、ファシリテーションの方法を検討。

7月24日ー26日　石川さんがACACに滞在

7月24日
参加者：石川さん、瀬藤、大黒
場所：ACAC
図工部会の研修で行うWSをテスト実施。

7月24日
参加者：石川さん、和田さん、瀬藤、大黒
場所：オンライン
『驚くべき学びの世界―レッジョ・エミリアの幼児教育』の読書会①

7月25日　ACACにて図工部会の研修会



8月15日
参加者：石川さん、和田さん、瀬藤、大黒
場所：オンライン
『驚くべき学びの世界―レッジョ・エミリアの幼児教育』の読書会②

8月24日ー30日　石川さん、和田さんがACACに滞在。






8月24日
参加者：金子由紀子さん（美術教育研究者／アートエデュケーター）、石川さん、和田さん、瀬藤
場所：オンライン
金子さんはかつてACACの教育普及担当の学芸員として、創作体験を含む子ども向けのプログラムを手掛けた。当時、教育普及事業を行う上で意識していたことや、創作体験でのファシリテーションの試行錯誤について伺った。退職後に進学した大学院で行った、ACACでの経験を基にした研究についても、興味深いお話を聞くことができた。

8月28日
参加者：木戸永二先生（青森中央短期大学）、石川さん、和田さん、瀬藤、大黒
場所：青森中央短期大学
幼児保育学科准教授の木戸先生にヒアリング。子どもとはどのような存在か、学術的な視点からお話を聞くことができた。また、木戸先生が大学で実施する子ども向け造形WSでのファシリテーション方法も聞くことができ参考になった。

8月29日
参加者：石川さん、和田さん、瀬藤、大黒
場所：筒井小学校
以前ヒアリングをした新山先生の授業を見学。5年生のクラスで図工部会の研修内容を取り入れた授業に、様々な面で大きな刺激を受けた。

9月17日ー19日　石川さん、和田さんがACACに滞在。
創作体験の様子を見てもらった。ファシリテーションの補助もしていただいた。

9月17日
参加者：長内真理さん（舞踏家）、石川さん、和田さん、瀬藤
場所：ACAC
野口体操のWSや太極拳のレッスンなど身体を使う場を一般に幅広く開いている舞踊家の長内さんに、理想の子ども向けのWSについてヒアリング。

9月18日
参加者：石川さん、和田さん、瀬藤、大黒
場所：新城中央小学校
出張授業を実施。フロッタージュを使って学校の妖怪を作るWSを行った。児童と一緒に妖怪の身体を考えるには時間が足りなかったが、和田さん、石川さんもファシリテーションに加わり盛り上がった。




9月19日
参加者：石川さん、和田さん、瀬藤、大黒
場所：ACAC
野内小学校の創作体験を実施。また、新WSのアイデアを試し、プロトタイプのような物が完成した。

和田ながら
演出家

Essay

誰かに渡せるかたちの遊び

自身の創作方法を共有したり、それを応用して参加者を刺激したり、新しい作品のためのクリエイションの一部であったり、プロトタイプの実験であったり。アーティストにとってワークショップとは、どんな形であれ、みずからが直接リードするものだという意識が強い。もちろん、私もそう思っているうちのひとりだ。

だから、国際芸術センター青森（ＡＣＡＣ）からの依頼が届いた時にまず、自分が進行役をするわけではないということに驚いた。どうやら私はワークショップをするのではなく、ワークショップを開発しに行くのである。開発したワークショップは、ＡＣＡＣのレパートリーとして学芸員がファシリテーションを担当するらしい。

ワークショップに臨む場合、私はやりたい内容を構成し時間配分も組んだ簡単な台本のようなものをあらかじめ作成しておく。だからつまり、台本を自分がやるときよりも微細な部分まで作りこめばよいのだろうか。

ただ、参加者の反応を受けて進行にアレンジを加える、あるいはその場でもたらされた新しいアイディアを実践してみるなど、即興的な調整と展開が現場で次々に発生していくライブ感がワークショップの醍醐味なのではないか。コロナ禍ではオンラインでのワークショップも幾度か経験したけれども、画面越しで参加者の機微がわからないなかでのファシリテーションはどうも雲をつかむような心地だった。やっぱり、参加者の目の前に身体を立ててこそ、そして、参加者の身体を見つめていてこそ、自分にとって

創作体験「長いトンネルをつくろう」の様子



のワークショップだ。

と、舞台芸術を生業にしていることも手伝って「生身原理主義」に芯まで浸かっている私は、どうやったら自分ではない誰かにワークショップを進行する役割を（がめつく言えば、自分のよろこびを減じることなしに）渡すことができるのだろう、というのは実のところ半信半疑だった。

しかしさいわいにもそれは杞憂に終わった。丁寧に準備し、代々教え継がれてきたレシピを自分なりにアレンジし、学校の先生たちとコミュニケーションを重ねながら、子どもたちによい体験を贈ろうとしている学芸員のみなさんのリアルな姿を見られたのが、私にとってＡＣＡＣでのもっとも重要な収穫であったことは間違いない。

なるほど、合点がいった。おそらく私が開発するべきなのは、実際の現場でプレイヤーとなるＡＣＡＣの学芸員を飽きさせず、アレンジのしがいもあり、とはいえそこそこに困らせもする、というプログラムなのだ。それは、演劇をつくっている現場で、演出家の私が俳優に対して仕掛けようとしていることにとても似ている。

演技とは、同じことの繰り返しをその定めとしながら、そのすべての実行において新鮮さが求められるという、奇妙な行為だといえる。そして、たとえば、戯曲に底知れなさがある、あるいは、再現するのに困難な振り付けが含まれる、つまり、予定されている演技がイージーに「こなす」ことを拒む時、俳優は困りながらも生き生きしている。

では、学芸員の生き生きと充実したパフォーマンスを引き出すワークショップのインストラクションとはいったいどんなかたちをしているのか。私がじかに出会うことのない未来のＡＣＡＣの学芸員にも渡すことができる遊びについて、もう少し時間をもらって、ぞんぶんに悩んでみたいと思う。

さて、ワークショップの参加者である子どもたちについて、ほとんど言及せずにここまで来た。しかし全く心配していない。俳優がおもしろさを感じながら演技をしていれば、観客にもそのおもしろさが伝わるということを素朴に信じている。だから、学芸員がファシリテーションを楽しめるワークショップであれば、その学芸員の楽しんでいる身体が子どもたちを触発するに違いない。



創作体験「長いトンネルをつくろう」の様子

和田ながら（演出家）

京都を拠点に活動。演技という行為に強い関心を持ち、テキストやモチーフを接写するように読み解いていくことで作品ごとに固有の演技の文法の構築をめざしている。美術、音楽、ダンスなど異なる領域のアーティストとも共同作業を行う。2018年より多角的アートスペースUrBANGUILDのブッキングスタッフ。2019年より地図にまつわるリサーチプロジェクト「わたしたちのフリーハンドなアトラス」始動。2025年からKYOTO EXPERIMENTアシスタント・ディレクター。

石川朝日
俳優

あいていること

学校があまり好きではない私は、小学校の授業を一つも覚えていない。なにひとつといっていいくらい思い出せない。というか思い出したくない。何はともあれ6年間は通ったあの学校。あの空間を思い出してみる。三小ランドというバカでかい遊具、事故が多すぎて私が卒業してから撤去されたみたい。体育館横の秘密基地、吹奏楽でチューバ、子供の相撲の大会で頭突きされて口のなかが血だらけになったこと、木のタイルが交互になっていた長い廊下、緑色の薄暗い階段、それはもしかしたら中学校だったかも。そういうものは時間がたっても手に取るように思い出せる。今、吉祥寺のリンデというドイツパン屋で書いているのだが、吉祥寺は僕の生まれ育った街でここから10分歩けばその小学校は今もあって、ヨドバシカメラができる前からこの町を知っている。すごく広く感じていた五日市街道も、こんなに狭い道路だったのかとおもう。学校帰りに日本酒の一升瓶の蓋をもらっていた酒屋はずいぶん前に無くなった、ガラスが割れボロボロになった電池の自販機、こういう経験に教師はいなかった、僕はただ体験していた、繰り返し、自分の身体で。小学校4年生の時に赴任してきた先生が、字にとてもこだわる人で、4年生全員に新しいふにゃふにゃの半透明な下敷きと4Bの鉛筆が支給された。筆圧をあげて字を書く、そのためには姿勢がきちんとしていなくては筆圧を上げて書くことができない、だ



ACACのツアーの最中に雪室を覗く様子

から座り方を正さなくてはいけない。正しく座ること、足の裏を地面につき椅子に浅く座り左手を添える。たくさん書くし、かなりぎゅっと押し付けて書くので右手の側面は鉛筆の炭で黒くなる。こんな風に身体は教育されて、奪われたり、新たに獲得したりするのかもしれない。では身体のワークショップで人を教育しないことは可能か?演劇と教育の消化に悪そうな食い合わせ。苦い味がする。自由(とは)な身体を持っている小学2年生への身体のワークショップは、その自由を奪いやしないか?ファシリテーターと教師の違いとは?その先生は僕にとって恩師といえる人だった。僕に教師になってほしかったそうだ。一時期、教師になろうかとも考えたが、やっぱり僕は俳優になりたかった。その先生は10年ほど前から筋肉が衰える病気になりもう動けないそうだ。僕は高校で非常勤のような形で週に一度高校生に演劇を教えている。あの身体はどこへ?

　創作体験の創作中に学芸員の一人にACACのツアーをしてもらった。ここにはすでに何度か来ていたが、このツアーでおそらくACACのすべての部屋を見せてもらった。音の響きが建物の中と外で違う。部屋によってもちがうし部屋のどこにいるかによっても違う。円形上に沿った部屋の反響、野外ステージでの集音、マスターキーは実際に存在する。雪室のわけわからない部屋、ここは半地下のような、水が溜まっているように見えるが、いかんせん暗いので、そこに水があるのか、それとも底が抜けてしまっているのか。安藤忠雄、窓の大きい部屋、熊注意の張り紙があり、いつかこの部屋の大きい窓の前を通り過ぎるのではないかという予感、気配、その時まで口を開けて微動だにしない鉄製の檻の前兆、その鉄製の檻は、野外彫刻があるところのちょっと奥まったところにあって、ああそう、野外彫刻もだいぶ時間がたっていて、さびれたり、はげたり、劣化したり、削れたりして、元の原形をとどめないわけだ。でも、そういうもの。木。夏と冬では全く景色が違うこと。雪で建物は埋もれ、道もわからない。うん、「入口」が必要なのか。入口は強制しない、開いているだけ。私たちは、他人が経験するものを基本的には選べない。だけどその入口にはなれる。その入口があるから私も経験できた。入口はなによりも存在することが大事だし、来た人が気に入らなかったら出口にもなりえるのは希望。じゃその入口はどんな姿、形をしていたら良いのだろうか?2年目の創作はそういうところにも触れていけそうな。熊との勝ち目のない撤退戦の中、いよいよ野外での活動も難しくなっていくが、それでも子どもだけじゃなく多くの人がこの場所を繰り返し訪れて経験できるための入口があるといいだろう。

ギャラリーAにて音の反響を確かめる様子



石川朝日(俳優)

1995年生まれ、穴の世代。Dr.Holiday Laboratory所属。野田秀樹に会いたくて多摩美に入学、だが中退、そして渡仏。ジャックルコック国際演劇学校に入学。仏語、授業、ギリギリ、3畳の元·女中部屋、素パスタ、鶏肉に湧いた蛆、ああ!フランスの風。2年ここに生きた!苦しかった。なぁんにもわからなかった。楽しかった。言語が消えたサイレントブレインのため帰国し、浦島太郎に。浮遊したまんま。ルコックと日本演劇の大きなギャップ&コロナ禍でまさに迷子。よし、歩こう。伊勢神宮への道中、鹿の親子は、私が何時間も何千歩もかけて歩いてきた道を、2歩でゆく。もう見えない。『神秘的』。私は踏み出す。この一歩一歩で母から遠ざかっていく。歩行者。



身体を使った子ども向けワークショップの開発に向けて
――図工部会での実践

新しい子供向けＷＳを開発する事業の一環として、図工部会に所属する小学校の先生方を主な対象とした研修をＡＣＡＣで実施した。ファシリテーターに石川朝日さんを招き、粘土と身体を使ったＷＳを行った。

まずラウンジに集まり、ほかの人が言った言葉からできるだけ離れた概念の言葉を挙げていく逆連想ゲームを行った。続いて、自分の今の状態を言葉で書き出し、それを食べ物にたとえて発表した。その後、ＡＣＡＣの空間から受けた印象を紙に書き、屋外に出てそれぞれが選んだ場所で過ごしながら、音、風、目に入るものから生じた内面の変化をメモした。続いて創作棟へ移動し、メモをした感情を粘土で表現した。粘土作品が完成したら、鑑賞し合い、ほかの人の作品から受けた印象を言葉で書き留めた。そして講義室に移動し、粘土の質感を身体で表現した。硬い、重い、動かしにくいといった粘土の質感について考えるため、ペアになって一方が「粘土」、もう一方が「触る側」となるワーク等を行った。それから、自身の粘土作品を身体で表現した。最後に、粘土作品のテーマとなる感情が芽生えた場所に、それぞれが作品を持っていき、作品とともに時間を過ごした。

参加者からは、「自分の気持ちという正解のないものを扱うため、上手い・下手で評価できない点がよかった」「身体を使うＷＳは図工部会ではあまり経験がなく不安もあったが、自然に楽しむことができた」「授業に取り入れてみたい」といった感想が寄せられた。小学校教育の場では、身体表現は体育の分野として分類されることが多いため、図工部会の研修としては珍しい内容だったが、前向きな感想が多くあったことは大きな収穫だった。

ご協力いただいた方々に聞いてみた！

今年度は身体を使った子ども向けWSを開発するにあたり、青森市内の教育に携わる方々にさまざまな形でご協力いただきました。関わってくださった皆様に、感謝申し上げます。ここでは、教育現場とACACをつなぐコーディネーターや、図工部会で実施したWSに参加してくださった先生方の声を紹介します。

聞き手：
瀬藤　朋（ACAC学芸員）
大黒優香（ACACアートコーディネーター）

斎藤誠子さん（一般社団法人 青森市国際交流協会 理事・AIRSメンバー）

――新しいWSを開発するにあたり、青森市内の小学校の先生方へのヒアリング等をコーディネートしてくださいました。

私はACACが設立された頃から、AIRS*1の一員として、海外のアーティストの通訳や生活のサポートなどに関わってきました。当時は今よりも現代アートは認知度が低く、滞在しているアーティストを小学校や美術科のある高校へ連れて行く機会もよくありました。そうした経験があったからこそ、今回教育普及に関する相談を持ちかけていただいたことは、とても嬉しかったです。

近年、子どもの心のケアの方法は多様化しているように感じていますが、子どもに限らず、アートには人の心をケアする力があると思っています。数字で人が評価されがちな時代を生きるなかで、五感を使って経験することから得られる感覚は、生きていく上でとても大切だと感じてきました。アートには、その感覚を補完する力があるのではないでしょうか。

以前、海外のアーティストを小学校へ連れていった際、子どもたちの反応がとても印象的でした。その時に見た、いきいきとした表情が今も心に残っています。あの時のような子どもたちの姿を、もう一度見たいという気持ちも、今回協力したいと思った理由の一つです。

私は学校の先生とは違い、コーディネーターという立場で教育に関わっていますが、先生方も学校の外での体験の機会を求めていらっしゃるのではないかと感じています。ただ、現場はとても忙しい。だからこそ、面白いプログラムを作ろうとするACACと、そうした機会を必要としている教育現場とを、私が繋いでいけたらと思っています。また、主人の仕事の関係でアメリカに住んでいたことがあり、その時に現地で多くの助けを受けました。その恩返しの気持ちもあり、現在は国際交流の支援にも携わっています。ACACには海外だけでなく、日本各地からも様々なアーティストが訪れます。青森は規模が大きすぎないからこそ、教育現場や地域のコミュニティとの距離が近く、できることも多いと感じています。この場所を訪れるアーティストには、そうした経験をぜひ味わってもらいたいです。

ACACには、これからさらに教育に関わっていってほしいと思っています。技術員の仕事も子どもたちにとってはきっと面白いはずですし、ダンスやパフォーマンスなど、今年度に限らず様々な表現に触れる機会があってもいい。何かを「してあげる」というよりも、一緒に作り上げていく感覚で関われることが、私自身の楽しみにもなっています。





*1　2003年4月に発足した、ACACで行われるAIR事業の支援を中心に活動するボランティア組織。

嶋富哲子先生（青森市立三内小学校 教諭）

――新しいWS開発の一環として、石川朝日氏による粘土と身体を使ったWSを小学校図工部会の研修に採用してくださいました。

私は東青地区の小学校図工部会の研修を担当しており、これまで夏と冬の研修会を企画してきました。研修会の内容は、先生方が授業を考える上で疑問に思っていることや、子どもたちに還元できそうなものを中心に選んでいます。これまでには、ACACや青森県立美術館のスクールプログラムを体験したり、ノコギリなどの木工道具の使い方を指導していただいたり、藍染や紙漉きのワークショップを取り入れたこともありました。手を動かすプログラムでは、先生方も本当に没頭して取り組まれていました。

ACACは創作体験などですでに訪れたことのある先生も多く、身近な場所だと感じていました。今回の研修では、自分の気持ちを粘土で表現するという内容に取り組みました。正解はないと分かっていながらも「もっと上手く表現できないだろうか」とジレンマを感じてしまって。どうしても大人になると頭の柔らかさが足りないというか、自分が納得できる表現を見つけることに悩みました。

その後、全身で風を感じたり、粘土になりきってみる時間がありました。体を使う活動は体育の領域という意識があって、これまでの研修では手を動かすことはあっても、体を動かすことはほとんどありませんでした。今回は図工部会以外の先生方も参加する研修となり、とても新鮮な体験でしたし、「面白かった」という感想も多くいただきました。

図工部会の先生方は、新しいことを否定せず「これ面白いね」「素敵だね」と素直に受け取ってくださる方が多いのですが、今回の研修でもそうした姿勢が共有されていることを感じました。私たちの仕事はどうしても学校の中に収まりがちなので、外からどんな面白い視点を持ち込めるかを大切にしています。研修を通して、学校の中だけでは得られない何かを提供できれば、それがまた別のかたちで子どもたちに還元されるかもしれません。そんなことを考えながら、「できないことを一緒に考えていこう」というスタンスで、面白い研修を作れるよう常にアンテナを張っています。

ACACができた当初、林道をずっと歩いて行くと山椒の木があり、そこにアゲハ蝶の幼虫がいたこと、そのさらに奥には調整池があって、たくさんのトンボが飛び交っていた光景に感動したことを覚えています。大きな水芭蕉も生えていました。そうした風景を、ぜひ子どもたちにも見せてあげたいと思っています。写真で見たことがあっても、大きさや迫力は実際に見てみないとわかりません。私自身、実物を見て驚いた経験があるからこそ、自然のものをもっと子どもたちに見せてあげたいと感じています。そうした自然を生かした体験と、美術とを結びつけたWSが、もっとたくさんあればいいなと思っています。



Photo: 冨永敦

開米史先生（青森県立浪岡養護学校 教諭）

――新しいWSを開発する事業の一環として実施した図工部会の研修に参加してくださいました。

特別支援学校では、一人ひとりのお子さんの将来の姿、QOLを思い描きながら、発達段階やそのお子さんの「今できること」を考え、個性や特性に寄り添いながら学習支援を行っ

ています。

様々な個性のある子どもたちのなかで、私が受け持っている重症心身障がい児棟学級のお子さんたちは、病院に入院加療しながらの生活であるため、多様な素材に触れたり、風などの自然を感じたりする等の五感を使った体験の機会がどうしても限られがちです。そのため自立活動[*2]の学習では、五感で感じることを通して、好き・嫌いといった感覚や、快・不快の気持ちを少しずつ表に出していくことを大きな目



標の一つとしています。自分の意思や感情を言葉で表現するのが難しいお子さんの場合には、眼球の動きや表情の変化、手指の動きといった微細な表出を受け止めながら、「これが好きなんだね」「これ柔らかいね」と、周囲が意味づけを行いながら関わっています。こうした関わりを通して、お子さんたちが自分なりのかたちで意思を表現し、生きていく喜びのようなものを感じてくれたらと思っています。そうした日々の実践の中で、ACACの自然環境の中で身体を使うWSには何かヒントがあるのではないかと感じ、図工部会の研修に参加しました。

普段はお子さんたちの感覚を育むために、身体に触れたり、様々な感触や温度の素材に触れられる機会を設けたりしながら関わっていますが、今回のWSでは、目を閉じた状況で他者に自分の身体を動かしてもらったり、風を感じたり、音に耳を澄ませたりしながら、「自分がどう感じているのか」を改めて考えさせられました。時間をかけて自分の感覚に向き合い、感じたことを表現するという体験を、自分自身に置き換えて経験できたことが、とても印象に残っています。

自ら手を動かして何かを造形することが難しい子どもたちでも、素材に触れたり、風の音を聞いたり、温度の違いを肌で感じたりすることで、表情が和んだり、眉間にしわが寄ったりします。ACACの環境は、そうした五感を刺激する要素がたくさんあると感じました。

もっと絵を上手く描けるようになりたい子もいるでしょうから、技術を学べるWSがあってもいいと思います。一方で、ACACはアーティストが寝泊まりしながら作品を制作している場所でもあります。どんなアーティストが、どんな思いで、どのように作品を作っているのか、その制作過程に触れられるプログラムがあってもいいのではないでしょうか。絵を描くのが苦手、立体物を作るのが苦手、そうした理由で美術から離れてしまう子どもたちもいますが、表現には様々なかたちがあると知ることで、救われる子もいるのではないかと感じています。

*2 特別支援学校学習指導要領で定められている、障がい等に基づく学習上、生活上の課題を幼児児童生徒自ら改善・克服するための指導を指す。

今井礼子先生（青森市立浜田小学校 教員）

――新しいWSを開発する事業の一環として実施した図工部会の研修に参加してくださいました。

私は小学生の頃からクラリネットを続け、音楽大学を卒業しました。今回は音楽に限定せず自分の感覚をさらに広げたいと考え、図工部会の研修会に参加しました。音楽は無形の芸術と言われ、形として残すことが難しいものです。音楽で感じる雰囲気や感情、熱量のようなものを、もし形や色、あるいは温度のような要素で表現できたらどうなるのだろう。そう考えたとき、視覚的・触覚的に可視化できる図画工作の領域は、とても親和性が高いように感じられました。また、身近なものを素材

にした授業を行いたいという思いもあり、体育ではないにもかかわらず身体を動かすプログラムが含まれていた点にも強く惹かれました。身体という最も身近な素材を使えることに可能性を感じ、参加を決めました。

研修会では、自然の中で風や音を感じながら自分の気持ちを見つめ、それを粘土で表現し、最後は身体でも表現しました。私が担当する特別支援学級には、自分の気持ちを言葉で伝えることが難しい子供も多くいます。そうした子供たちが別の方法で自分を表現できるようになれば、コミュニケーションの在り方も変わるのではないかと感じていました。そのヒントをこの研修会から得られたように思いました。研修で得た気付きをもとに、同じテーマで授業を行いました。自分の気持ちを題材にすると、誰かと比べる必要も、上手・下手という評価も生まれず、唯一無二の作品が立ち上がります。周囲の目を気にせず制作に向き合いながら、子供たちが最後まで気持ちよく取り組めていた様子がとても印象に残っています。



頭の中のイメージを粘土で表すことは大人でも難しく、まして感情を形にするのは容易ではありません。実際の授業でも、苦戦しながら何度も作り直す子供がいました。けれど、自分の作品と向き合うことは、自分の中の気持ちと向き合うことでもあります。だからこそ、納得がいくまで丁寧に作り直すのだと思います。評価されるためではなく、自分自身と対話するような時間がそこに生まれていたように感じました。

私自身、音楽大学時代には自分で自分に完璧さを求めすぎてしまい、自分らしい表現に行き詰まることもありました。そんなときは美術館を訪れ、絵画からヒントを得ていました。異なる分野の表現に触れることで、自分にはない表現や気持ちを受け取っていたように思います。

自ら何かを生み出すクリエイティビティは、これからの時代ますます重要になるはずです。完成形を与えすぎてしまうと、子供たちもそれ以上を求めなくなってしまいます。想像力で補い、広げていくことを前提とする図画工作や音楽は、そうした発想力を育む上で非常に大切だと感じています。

新山乃愛先生（青森市立筒井小学校 教諭）

――学校教育に関するヒアリングや、新しいWSを開発する事業の一環として実施した図工部会の研修に参加してくださいました。

図工の授業では手を使って創作することが多いので、「全身を使うってどんな感じなんだろう」と興味を持ち、図工部会の研修に参加しました。参加してみて、正解を求めるような凝り固まった考えが和らぎ、子供に戻ったような感覚がありました。「これを子供達がやってみたら、面白いんじゃないか」と思い、2時限分の授業として実施しました。自分の今の状態や気持ちを書き出す活動は、大事な軸として残しました。自己分析を深め、好きなことや得意なことを見つけるための機会を持つことが、大きな狙いのうちのひとつだったからです。そして、自己表現に留まらず他の人の作品を鑑賞することも重要だと思いました。なので、他の人の粘土作品にタイトルを付ける時間を設けました。粘土の形を全身で表現する活動には、石川朝日さんも参加してくれて、子供たちも楽しそうでした。高学年なので、身体を使って表現することに抵抗があるんじゃないか、と少し心配していましたが、スモールステップを積み重ねることで「表現しても良いんだ」という安心感が

生まれていました。こういう授業は心理的安全性がないと成立しないからこそ、日常的に子供たちとの関係を作っていくことが大事なんだなと改めて思いました。

普段の授業では、教師の私が一方的にやりたいことをやるんじゃなくて、子供達の「やりたい」という気持ちと私の願いがピタッと合うような授業をしたいと思っています。そういう意味でも、普段からコミュニケーションを積み重ねたり、子供達をよく観察したりすることは大切です。

主体性を尊重する姿勢は、今の職場の柴田校長先生からの影響が大きいです。年度始めに校長先生が共有する学校のビジョンや教育についての考え方に刺激を受けています。あと、校長先生は、子供と接する時すごく柔らかいんですよ。毎朝玄関に立って笑顔で挨拶するし、子供達に会ったらじゃんけんしてたり。あとは全校朝会でも、子供達が飽きない講話をしています。校長先生は私のロールモデルです。生徒指導などで子供との関わり方に迷った時、校長先生ならなんて言うかなって考えます。

学校はある意味閉ざされた空間でもあるので、ＡＣＡＣで普段と違う体験をすることは子供達にとって良い刺激になると思います。また、図工部会の研修のような内容は、図工、体育、そして自分と向き合うという意味では保健にもつながります。ＡＣＡＣはひとつの教科に縛られず、横断的な学習ができる場所だと思います。





教育普及

2025年度は、施設の改修工事や熊の出没といった影響を受けながらも、場所や内容を工夫し、様々なプログラムを実施することができました。実施にあたり、ご検討ならびにご協力いただいた先生方に、心より感謝申し上げます。

創作体験

7月から9月中旬にかけて、昨年よりも長い期間で創作体験の受け入れを行い、小学校低学年を中心にワークショップ(以下、WS)を実施した。身体全体を使うメニューへの希望が増加したこと、また熊の出没が広く話題に挙がったことから、フロッタージュやスプレーを使う定番メニューではないWSも多く実施した。

例えば、段ボールを使って長いトンネルを作るWSでは、段ボールの飾りつけをギャラリーBで、トンネルをくぐる活動をギャラリーAで行った。熊の出没を念頭に置いた屋内型のWSとして重宝されるとともに、ギャラリーAの無骨な空間がにぎやかな遊び場へと変わる様子が印象的だった。

また例年、野外彫刻を探すスタンプラリーを実施していた午後の時間には、「つめたいもの」「まるいもの」「音のするもの」など、五感を使って屋外にあるさまざまなものを見つけていく、新しいワークシートを導入した。ひとつの正解をなくすことで競争する必要性が薄れ、例年よりもじっくりと取り組む様子が印象的だった。

ACACに来館できない学校に対しては出張授業を行った。和田ながら氏、石川朝日氏と協働し、学校にあるさまざまな模様をフロッタージュして学校の妖怪を作るWSを行った。日常の風景の中に面白い模様があることを再発見しながら行うフロッタージュは、ACACで実施する以上の盛り上がりを見せていた。











2025年度 学校·教育団体来館·連携一覧

学校・団体名	学年	参加者数	訪問日	内容:午前	内容:午後
戸山西小学校	2年生	20	7/3	長いトンネルをつくろう	森のビンゴ
北小学校	1-2年生	23	7/8	魚の学校	森のビンゴ
泉川小学校	2年生	96	7/10	魚の学校	森のビンゴ
荒川小学校	2年生	26	7/11	海の世界をつくろう	森のビンゴ
造道小学校	2年生	64	9/1	紙の上に森をつくろう	森のビンゴ
筒井小学校	2年生	77	9/3	小鳥の学校	映画鑑賞
呉竹幼稚園	年中·年長	13	9/4	魚の学校	–
堤小学校	2年生	47	9/5	魚の学校	–
わくわくスペースみらいと	小2-高3	10	9/6	小鳥の学校	–
青森県総合学校教育センター	中2-3年	10	9/9	小鳥の学校	紙の上に森を作ろう
原別小学校	2年生	43	9/10	魚の学校	映画鑑賞
新城小学校	2年生	70	9/12	紙の上に森をつくろう	–
筒井南小学校	2年生	51	9/16	小鳥の学校	映画鑑賞
新城中央小学校	2年生	70	9/18	妖怪の学校	–
野内小学校	1-2年生	12	9/19	長いトンネルをつくろう	森のビンゴ
小湊小学校	2年生	46	9/22	魚の学校	森のビンゴ
三内西小学校	2年生	62	9/24	紙の上に森をつくろう	映画鑑賞

ジョブキッズあおもり2025（主催：RAB青森放送）

日時：2025年8月9日（土）9：00ー12：00

RAB青森放送が主催する子ども向けの仕事体験ワークショップ「ジョブキッズあおもり2025」は、青森県内のさまざまな企業や公共施設で実施されている。例年通り、ACACでもアーティストの仕事を体験するWSを実施した。今回は、美術家の関優花氏を迎え、「人に伝えたいこと、もの」をテーマに版画作品の制作と展示を行った。

まず、大きな紙の上に身の回りにあるもの（毛糸、網、紐、クリップなど）を並べ、アルミホイルを使って版を作った。次に、インクをローラーで塗り、版画プレス機を使って紙に転写した。インクののせ方によって刷り上がりが微妙に異なるため、どのような作品になるのか分からないドキドキ感を味わいながら制作する様子が印象的だった。

完成した作品をギャラリーAへ運び、好きな場所を選んで設置した。技術員と話し合いながら、作品に合った照明の明るさや位置を決め、アーティストネームとタイトルを記したキャプションを付けた。すべてのインストールが完了した後、展覧会をオープンし、保護者を招いたアーティストトークを行った。

参加者は制作の中で工夫した点等を説明し、保護者やACACスタッフが感想や質問を共有した。「大きな作品を運んだり、設置したりと、アーティストの仕事には大変なことや地道な作業もある。しかし、そうした仕事を経て、作品を多くの人に見てもらうことができる」という関氏の言葉通り、完成した作品の背後にある仕事や時間を知ることができるWSだった。







サマンサ·クラーク 青森県立青森中央高等学校連携授業

日時：11月13日（木）8：55ー12：45

サマンサ·クラークが、美術系列3年生を対象に授業を行った。1限目は、拠点とするオークニー諸島、重要なテーマである水、これまでの制作活動について説明した。反復的なドローイングを作品に取り入れるクラークから「もしこれがAIによって描かれていたら、どう感じますか？何が得られ、何が失われるでしょうか？」と問いかけられ、考えをめぐらす姿が印象的だった。滞在中クラークは、沢山の小さな円を描くことで大きな川の流れを表現するドローイング作品に取り組んでいた。2、3時限を通して、生徒とドローイング作品の共同制作を行った。時折吹き抜けの上階から作品を鑑賞し、一人ひとりが描いた小さな円が大河になる様子を味わいながら制作した。4時限目には、ライティングのワークショップを行った。生徒からは、共同制作の中でいつもより自由を感じたこと、水と深く関わる自分たちが大きな川の流れを描いていることへの不思議さ等について感想が寄せられた。







表現のコモンズ vol.9 李奥森 オンライントーク

日時：2025年2月15日（土）15：00—16：00
企画：瀬藤朋
参加者数：13名

台湾を拠点とする演出家・アーティストの李奥森（ヴァル・リ）は、2024年秋に青森を含む日本各地でブラインドサッカーのリサーチを行った。その後、国際芸術センター青森（ACAC）に自主滞在しながら、取材成果に基づく新作写真作品を制作した。制作を終え帰国した李を迎え、制作を振り返るオンライントークを実施した。

制作された作品は、青森のブラインドサッカープレイヤー2名と、公募で選ばれた青森市民3名によって架空のブラインドサッカーチームを結成し、ACACや合浦公園でプレイする様子を撮影したものだ。李はまず、作品制作を委嘱された緑島ビエンナーレ（台湾）について紹介した。緑島には、白色テロ時代に、政治犯が収容されていた施設がある。同年夏に開催されたこのビエンナーレでは、この収容施設内を中心に作品が展示された。それから、撮影した写真を見せながらこれまでの取材や制作を振り返った。その中で李は、視覚情報がない状況の中でプレイヤー同士が築く信頼関係のあり方や、視覚障害を持つプレイヤーの生き方が、過酷な環境の中でも時に楽しみを見出しながら生き抜いてきた収容者の姿と重なる部分があることを語った。

ACACがアーティストを招へいしたのではなく、アーティスト自身がACACや青森の環境を見出し、作品制作へとつながった事例を共有できたことは意義深かった。また、青森の場所、人との関わりから制作された作品が、台湾の文脈へと接続されていく過程を共有できたことも、青森でAIRを実施する施設として重要な意味を持っていたように思う。





Photo: Val Lee

表現のコモンズ vol.10 敷地理×イリナ・グリゴレ「身体が透明になるまで」

日時：2025年3月9日（日）14：00—16：00
企画：瀬藤朋
参加者数：11名

アーティスト、振付家・ダンサーの敷地理によるパフォーマンスとトークを行った。敷地はACACに滞在中、恐山、六ヶ所村、酸ヶ湯温泉を訪問し、青森がどのような場所なのか知っていく中で、パフォーマンスのクリエーションを行った。

パフォーマンスは前半と後半の二部構成で、前半ではギャラリーBと雪に埋まった野外ステージで行われた。展示棟の屋根から採取した氷柱をツノのように頭部に装着した敷地の動きからは、生まれて間もない小鹿のような幼さと、人間にはない野性味が感じられた。後半はギャラリーAで行われ、これまで敷地が取り組んできた匿名性の高い身体をテーマとしたパフォーマンスが展開された。個人を特定する顔の要素を排除した振付や、iPhoneとプロジェクターを接続し、リアルタイムで自身の手足を映し出す映像は、他者と自身の身体感覚が同期し、次第に乗り移っていく様子を観客に共有するものだった。その後、文化人類学者のイリナ・グリゴレを招き、アフタートークを実施した。パフォーマンスにおいて手の動きが全体の振付を先導していた点が話題に挙がり、手が表象するものや、そこから発せられる社会的なメッセージについて意見が交わされた。またパフォーマンス中、舌が「第三の手」として位置づけられていたことや、振付制作の際に参照したオーシャン・ヴオンの著作『地上で僕らはつかの間きらめく』と、グリゴレの著書『優しい地獄』とのあいだに通じる部分があることが、敷地から語られた。トークの後半では、参加者が一人ずつ感想を共有した。





表現のコモンズ vol.11 松本一哉「　　を　聴く　」

日時：2025年10月25日（土）15：00－16：00、16：30－18：00
企画：原田桃望
参加者数：33名

全国をツアーで回っていた音楽家・サウンドアーティスト・ドラマーの松本一哉によるワークショップ「熊になる」とパフォーマンス「　　を　聴く　」を開催した。





ワークショップでは松本が常に行っている能動的に音を捉えて自分からも音を起こすことを体験するものだった。絶対に音を出さないようにして動く、グループの人と協働する意識をもって1音を起こす、外に出て環境音も捉えながら同じことを行ってみる。音を出さないように動こうとしてみても、服が擦れる音や呼吸音、足音がどうしても起こってしまうことに気づかされる。普段は意識していない微細な音や、ほかの参加者が出す1音、鳥の鳴き声、水のせせらぎ、空調設備の振動に耳を澄まし、その中にどのような音をどのようなタイミングで起こすか、身体・聴覚を駆使して行うワークを重ねていった。

その後のパフォーマンスは、ゆるやかなカーブを描く馬蹄形が特徴のギャラリーAで開催した。松本曰く、残響音が5〜8秒程度ある空間で、足音や物音などが小さいものでも増幅して響き渡る。空間の中に起こる音を捉えながら音具や身体やその場にあった物を用いて即興的に音の空間を作り上げていった。多様な音が混ざっていくさまとその残響、参加者が発する音に松本が応えるように音を紡いでいたことが印象に残る時間だった。日が落ち暗さが増す室内では、音がよく届く場所を見つける人や、レジャーシートの上にあおむけになって聞いている人など、参加者が自由に音に耳を傾ける姿があった。

Photo: 前谷開



飯田克子（事務職員）

自然いっぱいのACACで多くのことを学ばせていただきました。「分からない」から始まったアートも知れば知るほど見れば見るほど気づけば夢中に。
アートの楽しさを教えてくれたすべての出会いに感謝します。

大久保寛樹（事務職員チームリーダー）

ACAC事業の支払い業務は複雑である。大学とは比べものにならないほど年ごとに事業が大きく変化し、アーティストの意向によって、また内容が変わってくる。次々と押し寄せる変化にいつでも対応できる柔軟な脳をできるだけ継続するように心がけたい。

木下雄二（技術員）

20幾年前に植えられた土屋さんの作品を引っこ抜いて、開館すぐからあったACACのシンボルのひとつがなくなった今年は、僕の知人たちが青森を去った年でもあったので、少し寂しい雰囲気が残っている年でした。

瀬藤朋（学芸員）

やっと運転免許を取得して車を購入したので、青森での生活を楽しむ余裕ができて良かったです。出張で訪れた色々な場所で自分と同じ仕事に携わる人と知り合ったり、青森で学校教育に関わる人の話を聞くことができ、充実した1年になりました。

原田桃望（学芸員）

余裕をもって働けるかなと思っていた2年目も忙しない1年になりました。指名型AIRを通じて、他分野で活動している人や東北の文化施設で働いている人と、共同したり、お話をうかがえたりできたことはとても良い経験でした。

磯嶋真理絵（事務職員）

2年半ぶりの復帰となり、周囲に助けられながら、気持ちよく仕事ができた1年でした。朝は3歳目前の娘とバタバタ出勤。車内の会話も日に日に人間らしくなり、そんな日常の中で、今年も無事に働けています。

大黒優香（アートコーディネーター）

青森に来て1年。様々な事業を通して出会った方々の優しさに触れ、青森が大好きになりました。仕事に夢中になるあまり、気づけば夫の家事力が上がっていて。生活も大事にしながら、息切れしない程度に走り続けたいと思います。

越谷英樹（事務職員グループリーダー）

皆さんと一緒に仕事ができ、とても刺激的な1年でした。自分の中に新たなレイヤーが一枚できた、という感覚です。現代アートの楽しさを多くの人と分かち合いたい、というACACの皆さんをしっかり支えていけるような人に、私はなりたい。

服部浩之（館長）

施設建物や野外彫刻が少しずつ朽ちている。人間にはダメージと見えるが、地球という身体から見ると微生物の活発な分解活動による回復とも言えるかもしれない。屋根の架け替えや彫刻の修復は、この森の多様な命を考える契機となった。

Magazine for Document & Critic
AC² [エー・シー・ドゥー] 26号 (通巻27号)

発　行　日　2026年3月31日

ブックデザイン　字と図

編　　集　大黒優香 (ACAC)
佐藤史隆 (ものの芽舎)

編集協力　飯田克子、磯嶋真理絵、大久保寛樹、木下雄二、瀬藤朋、服部浩之、原田桃望 (ACAC)

印　　刷　シナノ印刷株式会社

発　　行　青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]
〒030-0134 青森市大字合子沢字山崎152-6
TEL: 017-764-5200　FAX: 017-764-5201
https://acac-aomori.jp

ISSN 2758-6960

＊特記のない写真はACACスタッフによる撮影です。

本文の一部あるいは全部を無断で複写 (コピー)・複製・転載することを禁じます。
Copyright © 2026 Aomori Contemporary Art Centre, Aomori Public University



文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
国際芸術センター青森